

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	順天堂	大学名	順天堂大学
研究プロジェクト名	大規模災害に対応する包括的医療提供体制構築を目指す統合型研究拠点の形成		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本邦は災害大国であり、地球温暖化と共に様々な災害に見舞われてきている。しかし、大規模な災害が想定されているにも関わらず、医学的見地から専門的・総合的に災害、防災について研究を行う拠点は少ない。そこで、災害に強いシステム構築及び医療技術の発信、優秀な人材の育成を通じて、防災、減災に貢献することを目的として、本学附属静岡病院に大規模災害に備えた組織体制構築から、災害・救急時の傷病に対する予防・治療開発に関する基礎研究まで含んだ総合的研究を行う拠点を整備する。本学附属静岡病院は、災害拠点病院であり、且つ、多様な災害被害が重要課題となっている静岡県にあるため、当院に付属する形で研究拠点を置くことは、平時及び災害時でも本研究活動を活用することが出来るため大変意義があると言える。また、静岡県東部は医療資源が不足しており、常日頃から本学附属静岡病院に静岡県東部ドクターヘリの運用等で重症な症例が搬送され、地域住民も当院に信頼を寄せている。平時から様々な研究成果や教育に接することが可能となり、当地域にとって防災及び減災の観点からも非常に有益であり、安心な地域づくりに貢献することと考えられる。また、災害教育の際には、本邦のみならず、海外からも多数の受講生や、災害研究の専門家を招聘する予定であり、地域経済に活性化をもたらす波及効果も及ぶことが期待される。

本拠点は、来るべき大規模災害の脅威に備え、英知、研究・教育成果を結集するために、順天堂大学大学院医学研究科静岡災害医学研究センターとして新たにスタートを切る。さらに、画期的な災害時初期診療法、独創的な災害事案への対応方法、さらに減災に対する新たな発信や政策の提案を世界へ行う。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

本プロジェクトは2つのテーマに分けられて研究が進められている。特に重要な成果を以下にあげる。

- 災害に備えた組織体制の構築について～システム運用と新たな医療技術の開発、教育・訓練の普及についての検証～
 - ①くも膜下出血、急性冠症候群(心臓発作、心筋梗塞、不安定狭心症)症例では、ドクターヘリによる現場からの早期搬送が有用であることを世界で初めて示した。
 - ②減圧症のドクターヘリ搬送の安全性を世界で初めて示した。
 - ③多数傷病事案における複数機ドクターヘリやドクターカー運用の有用性を示した。
 - ④急性膿胸に対し、胸腔鏡下手術と開胸手術と同等の効果があることを発見。
 - ⑤骨盤骨折においてより少ない手技操作で、最大の骨折固定効果が得られるSIRF法は、災害時などマンパワーが得られにくい場面で有用な方法で有ることが解った。
- 新規治療法開発を目指した災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
 - ⑥定量的な圧迫装置を用い、クラッシュシンドローム・モデル動物の作成に成功した。
 - ⑦血清 HMGB-1 の上昇遷延が腹膜炎の予後不良因子であることを示した。
 - ⑧パイロトーシスの重要因子 GSDMD のノックアウトマウスにおいて、腸炎の抑制が見られ、GSDMD が大腸炎を促進する働きを持つことが示唆された。
 - ⑨肉眼では見ることが出来ないコンタクトレンズやレンズケース内保存液の汚染状況は、蛋白濃度により汚染度が推測できることが示唆された。
 - ⑩火山灰の眼内飛入ではソフトコンタクトレンズ装用眼で眼障害が少ない傾向がみられた。
 - ⑪胎児期や新生児期のストレスがグルココルチコイドレセプター遺伝子のメチル化を引き起こし、PTSD や腎形成不全、動脈硬化や肺がんにつながることを見出した。

本研究プロジェクトの推進によって、組織構築・災害教育・疫学・臨床・基礎研究の融合を図り、今後、平時の救命率の向上だけでなく、災害死の減少、災害対応の普及・定着の効果が期待できる。

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

平成 27 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」 研究進捗状況報告書

- 1 学校法人名 順天堂 2 大学名 順天堂大学
- 3 研究組織名 静岡災害医学研究センター
- 4 プロジェクト所在地 静岡県伊豆の国市長岡 1129
- 5 研究プロジェクト名 大規模災害に対応する包括的医療提供体制構築を目指す統合型研究拠点の形成
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
佐藤 浩一	医学研究科・上部消化管外科学	教授

- 8 プロジェクト参加研究者数 29 名

- 9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
柳川 洋一	医学研究科・救急・災害医学・教授	災害教育とその効果の検証民間災害拠点病院における civilian-military co-operation の実現	テーマ1 研究総括 災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
大坂 裕通	医学研究科・循環器内科学・助教	ドクヘリ搬送による内因性疾患の検証	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
大森 一彦	医学研究科・救急・災害医学・助教	多数傷病者発生事案における効果的なドクヘリ運用の検討	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
石川 浩平	医学研究科・救急・災害医学・助手	海難事故発生防止を目的とした医学的介入	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
三島 健太郎	医学研究科・救急・災害医学・助手	災害時への早期メンタルヘルス介入は PTSD を減少させるか？	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
大出 靖将	医学研究科・救急・災害医学・非常勤講師	災害派遣時の特殊車両モデルの作成と運用	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
小池 道明	医学研究科・血液学・教授	災害時の輸血療法	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
岩神 真一郎	医学研究科・呼吸器内科学・教授	自然災害発生時における在宅酸素療法患者に対する地域ネットワーク構築に関する検討	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
田中 利隆	医学研究科・産婦人科学・准教授	災害時における妊婦の適切なトリアージの構築に関する研究	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証
山本 拓史	医学研究科・脳神経外科学・先任准教授	災害時における症候性てんかん患者の服薬管理と重積発作への対応に関する研究	災害に備えた新たな医療技術の開発

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

市之川 英臣	医学研究科・呼吸器外科学・助教	災害時急増する呼吸器感染症疾患(膿胸)に対する手術の意義	災害に備えた新たな医療技術の開発
楠 威志	医学研究科・耳鼻咽喉科学・教授	災害時医療機関機能停止時における、気道系疾患に対する「自宅でできる腹式呼吸を重点に置いた音声訓練法」の有効性	災害に備えた新たな医療技術の開発
大林 治	医学研究科・整形外科・先任准教授	災害時被災者のロコモティブシンドローム及び運動器不安定症患者の運動機能評価	災害に備えた新たな医療技術の開発
最上 敦彦	医学研究科・整形外科・先任准教授	災害時の駆幹骨々折の治療機器の力学的評価	災害に備えた新たな医療技術の開発
諏訪 哲	医学研究科・循環器内科学・先任准教授	災害時の深部静脈血栓症及び肺血栓塞栓症(エコノミークラス症候群)に関する研究 災害時のタコツボ心筋症(カテコラミン心筋症)と急性冠症候群の診断と治療に関する検討	災害に備えた新たな医療技術の開発
吉池 高志	医学研究科・皮膚科学・名誉教授	災害時に生じる皮膚潰瘍に対する早期ならびに中期簡便治療について	災害に備えた新たな医療技術の開発
丹原 圭一	医学研究科・心臓血管外科学・教授	災害時心肺停止患者における早期PCPS導入の有用性に関する検討	災害に備えた新たな医療技術の開発
岡崎 敦	医学研究科・麻酔科学・教授	災害時の手術運営に関する情報共有法の検討	災害に備えた新たな医療技術の開発
菅尾 高裕	医学部附属静岡病院・薬剤科・課長補佐	大規模災害時を想定した薬剤備蓄と効果的な処分について	災害に備えた新たな医療技術の開発
佐藤 浩一	医学研究科・消化器外科学・教授	腹部重症感染症による臓器障害におけるエンドトキシンおよび HMGB-1 の関与の検討	研究全般の総括、テーマ2 研究総括 災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
折田 創	医学研究科・消化器外科学・准教授	ストレスによる消化管機能異常に対する腸炎モデルマウスを用いた検討	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
前川 博	医学研究科・消化器外科学・先任准教授	災害避難民らにおける栄養状況把握に関する血清脂肪酸を用いた検討	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
寒竹 正人	医学研究科・小児科学・先任准教授	災害時の経験が被災者(児)のDNAにトラウマとして刻まれる機構の解析	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
土至田 宏	医学研究科・眼科学・准教授	災害時の断水による衛生環境悪化を想定したコンタクトレンズ着用者の手指および角結膜汚染	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
松崎 有修	医学研究科・眼科学・助手	火山性粉塵が眼表面へ及ぼす影響	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
神田 章男	医学研究科・整形外科・准教授	災害・救急医療で使用可能な画期的な駆血装置の開発	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
諸橋 達	医学研究科・整形外科・准教授	クラッシュ・シンドロームにおける血流循環改善の治療法の検討	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
古元 将和	医学研究科・形成外科学・非常勤助手	災害時の外傷や熱傷の皮膚欠損に対する交換頻度の少ない被覆材とDDS (drug delivery system)の研究	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
佐藤 俊輔	医学研究科・消化器内科学・助教	プロテオーム解析からみた多臓器不全時の肝臓をめぐる臓器相関の病態	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明
(共同研究機関等)			
城石 俊彦	情報システム研究機構 国立遺伝学研究所・教授	ストレスによる消化管機能異常に対する腸炎モデルマウスを用いた検討	ノックアウトマウスの提供、研究指導
三井 和幸	東京電機大学・教授	災害・救急医療で使用可能な画期的な駆血装置の開発	EHD ポンプシステムの作製

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

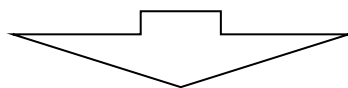
佐藤 太一	東京電機大学・教授	災害時被災者のロコモティブシンドローム及び運動器不安定症患者の運動機能評価	3D 動作解析
柳川 良子	伊豆保健医療センター・看護師	災害教育とその効果の検証民間災害拠点病院における civilian-military co-operation の実現	データ収集、分析
Malcolm Brock	Johns Hopkins 大学・外科	ストレスによる消化管機能異常に対する腸炎モデルマウスを用いた検討	エビデネティックに関する研究指導、立案、肺疾患に関する責任者
Kathleen Gabrileson	Johns Hopkins 大学・内科	ストレスによる消化管機能異常に対する腸炎モデルマウスを用いた検討	エビデネティックに関する研究指導、立案、心疾患に関する責任者
伊藤 智彰	Johns Hopkins 大学・外科	ストレスによる消化管機能異常に対する腸炎モデルマウスを用いた検討	動物実験。Hopkins 大での遺伝子研究。
的場 亮	DNAchip 研究所・社長	ストレスによる消化管機能異常に対する腸炎モデルマウスを用いた検討	研究の指導、試料の提供

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
災害時への早期メンタルヘルス介入は PTSD を減少させるか？	医学研究科・救急・災害医学・助手	三島 健太郎	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証

(変更の時期:平成 28 年 4 月 1 日)



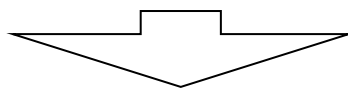
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	医学研究科・救急・災害医学・教授	柳川 洋一	テーマ1 研究総括 災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
災害派遣時の特殊車両モデルの作成と運用	医学研究科・救急・災害医学・講師	大出 靖将	災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証

(変更の時期:平成 28 年 7 月 1 日)



新

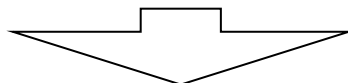
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	医学研究科・救急・災害医学・教授	柳川 洋一	テーマ1 研究統括 災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
災害時に生じる皮膚潰瘍に対する早期ならびに中期簡便治療について	医学研究科・皮膚科学・教授	吉池 高志	災害に備えた新たな医療技術の開発

(変更の時期:平成 30 年 2 月 1 日)



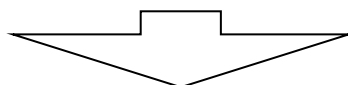
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	医学研究科・皮膚科学・先任准教授	長谷川 敏男	災害に備えた新たな医療技術の開発

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
災害時の外傷や熱傷の皮膚欠損に対する交換頻度の少ない被覆材とDDS(drug delivery system)の研究	医学研究科・形成外科学・助手	古元 将和	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明

(変更の時期:平成 29 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	医学研究科・形成外科学・助教	松本 茂	災害時における疾病・合併症の病因・病態解明

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

11 研究進捗状況(※ 5枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

静岡県東部は、南海トラフ巨大地震や津波、富士山噴火等の自然災害による甚大な被害が想定されている地域である。伊豆半島に位置する順天堂大学医学部附属静岡病院はドクターヘリを有する災害拠点病院であり、災害時には物資の受入や救急患者の搬送などのシステム運用から救急患者及び避難者の傷病の診療・治療まで中心的な機能を保持する必要がある。本プロジェクトは、大規模災害に備えた組織体制構築から、災害・救急時の傷病に対する予防・治療開発に関する基礎研究まで含んだ研究基盤の拠点形成を行ない、災害に強いシステム及び医療技術を発信し、優秀な人材を育成することを通じて防災、減災に貢献することが目的である。また、災害拠点病院に研究拠点を置くことは、トランスレーショナル・リサーチが即時可能である点や、大規模災害が緊急且つ重要な課題となっている静岡県、ひいては災害の多い日本にとって大変意義がある。

(2) 研究組織

本研究プロジェクトは、本学医学部附属静岡病院内に附置する「静岡災害医学研究センター」を整備して実施している。研究代表者の佐藤浩一をセンター長として、災害医学関連31の研究課題を2研究テーマに分け実施している。平成29年度現在、①災害に備えた組織体制構築関連課題については柳川洋一(救急・災害医学)を代表として20課題、②災害時における疾病・合併症の病因・病態解明関連課題は佐藤浩一(消化器外科学)を研究代表として10課題、総勢35名の研究者で実施している。専門分野は、救急災害医学研究全般にわたり、救急医学、災害医学、呼吸器内科学、循環器内科学、消化器内科学、血液学、外科学、整形外科学、形成外科学、心臓血管外科学、呼吸器外科学、産婦人科学、小児科学、麻酔科学、眼科学、皮膚科学、脳神経外科学などが主な分野となる。平成27年度はPD1名、平成28年度から平成29年度までPD2名、研究支援者2名がプロジェクトに参加している。拠点構築に当たっては、本学の教育研究資源を有効活用し、人材育成の傍ら、地域の行政、消防、警察、自衛隊、住民らと相互に交流・情報共有を可能となる協力体制を組んでいる。研究の連携体制については、国立遺伝学研究所、東京電機大学およびJohn's Hopkins大学などの国内外で共同実験を実施している。John's Hopkins大学とは定期的にWebミーティングを行い、情報共有を行う体制をとっている。

(3) 研究施設・設備等

当該拠点は、順天堂大学附属静岡病院管理棟内に併設する静岡災害医学研究センター内の総面積251㎡の生化学実験室及び動物実験室を再整備し、約50名の研究者が当該プロジェクトの実現を図っている。本研究のために平成27年度以降に設置された主な設備は、実験動物飼育システム(通年稼働)、DKH 3次元動作解析/床反力計測システム(380時間)、Illumina 次世代シーケンサー next seq 500(250時間)である。

(4) 進捗状況・研究成果等 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

< 現在までの進捗状況及び達成度 >

当研究センターは災害医学関連の各研究課題を、①災害に備えた組織体制構築及び新たな医療技術の開発関連課題と、②災害時における疾病・合併症の病因・病態解明関連課題の大きく2つのテーマに分け実施している。

()内は対応する13,14の番号で、それぞれ論文(*)、学会発表(**)、図書(***)、特許等(****)を付した。

テーマ1-1(災害に備えた組織体制構築、システム運用、教育・訓練の普及検証)

柳川らは、「災害教育とその効果の検証」において、様々な災害教育や訓練を行ってきた(*2, *27, *28, *41, *47, *69, *83)。災害に対する教育を行うと訓練を受けていない者と比較し、トリアージや災害現場の総合判断に関して有益であることを証明した(*101)。また熊本地震時には静岡県庁、熊本県庁、陸上自衛隊と調整を行い、被災地における災害診療の支援を行った(*32, *78)。陸上自衛隊の重症例は当院で診療を行い、顔に見える関係作りを行っている(*63, *106)。また、テロによる特殊災害(化学・生物・放射性物質・核・爆発物)ではヘリパイロットに悪影響を及ぼし、重大な航空機事故につながる可能性があり、少なくともドクターヘリはその運用に関わるべきでないことを提言し、日本航空医療学会の指針に盛り込まれた(*105)。

柳川らは、来院患者の確定診断に影響を与える因子の後方視的検討の外傷画像診断において、外力が加わった個所に微小なガスが発生するため、この解析が受傷機転の解明に有用であること、減圧症の発生メカニズムに関与している可能性があること、この微小ガスを消化管穿孔と誤認し、開腹される症例があることを示した(*6 *21, *38, *44, *54, *102)。心停止症例における原疾患の違いによるクリニカルプロフィールの検討では、大動脈解離は高齢女性で現場心電図は無脈性電気活動で心拍再開を得られにくいこと、くも膜下出血は中年女性で現場心電図は非ショックリズムで心拍再開を得られやすいことを示した(*71, *79)。アナフィラキシー患者では100人に2%程度で急性冠症候群を合併する症例があり、心電図検査の重要性を強調した(*77)。静岡県東部における開渠側溝の危険性を示した(*24, *43)。車やバイクで走行中、鹿と遭遇した場合、避けずに衝突したほうが、重傷になりにくい可能性を示した(*107)。

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

大坂らは、「ドクヘリ搬送による内因性疾患の検証」において、くも膜下出血症例では現場から直接当院に搬送された者の転帰が、一旦他院に収容され、診断がなされてから搬送されるより、良好であることを示した (*49)。急性冠症候群でも現場から直接当院に搬送された者の転帰が、一旦他院に収容され、診断がなされてから搬送されるより、良好であることを示した (*73)。また高山病や高所での心停止症例でもヘリを用いた救命の連鎖が患者の転帰に影響した事例を示した (*34, *59)。ドクターヘリで搬送した中毒症例では意識水準、血圧値が入院に関わる因子であることを示した (*103)

大森らは、「多数傷病者発生時案における効果的なドクヘリ運用の検討」において、当院は静岡県東部ドクターヘリの基地であるが、ドクターヘリ以外にドクターカーを用いた病院前の多数傷病者事案に関わり、運用を行っている。静岡県東部ドクターヘリは、県内で西部ドクターヘリと協働し多数傷病者のマネージメントに関わっている。また静岡県東部ドクターヘリは山梨県、神奈川県ドクターヘリと隣県協定を締結している。マイクロバス横転や電撃症による多数傷病者発生事案では静岡県東部ドクターヘリ、神奈川県ドクターヘリ、ドクターカーを用いての傷病者対応を報告した (*29, *72)。陸上自衛隊行軍中による熱中症多数発生事案では静岡県東部ドクターヘリ複数回運用と神奈川県ドクターヘリの協働により傷病者搬送を行った (*106)。以上のように手持ちの医療資源を柔軟に運用し、病院前の多数傷病者事案のマネージメントの方法を開発している。

石川らは、「海難事故発生防止を目的とした医学的介入」において、減圧症に対する取り組みとして、溺水と減圧症の鑑別に超音波を用いた下大静脈内の気泡の有無が単純な溺水と減圧症との鑑別に有用である可能性を示した事例を報告した (*35)。減圧症が発生後、ヘリ搬送による症状悪化の懸念があるが、輸液路確保による脱水の補正、高度 300m 以下で減圧症患者搬送を行えば、症状は悪化することなく、むしろ改善傾向を示すことを示した (*51)。減圧症症例では微小な窒素ガスが体内に発生するが、それは 外傷性空洞現象と同様、運動による外力が発生した箇所が生じやすいことを CT 画像を用いて提示した (*18, *38)。ボディボード損傷に関しては、浅瀬で波に揉まれて回転した際に頭部を海底に打ち付け、頸部が過伸展を強いられたときに上肢を中心とした麻痺や痺れ、すなわち中心性頸髄損傷を生じやすいことを疫学的調査を含め、提示した。

三島らは、「災害時への早期メンタルヘルス介入は PTSD を減少させるか？」において、1,2 年目は院内における体制づくり、メンタルヘルス介入内容の検討、倫理委員会承認の取得、3 年目は臨床試験を開始し、現在データを収集・解析中。

大出らは、多数傷病者事案発生時にはドクターヘリとドクターカーの協働 による対応、ドクターヘリが飛行不能な悪天候時には代替手段として、ドクターカーを使用している (*29, *72)。また、院外で新生児に問題が生じた際に、新生児科医師が新生児救急車に同乗し、往診・搬送を行い、地域の周産期医療に貢献している。

小池らは、「災害時の輸血療法」において、クリオプレシピテートによる救急医療の治療向上を目的として研究実施した。クリオプレシピテートの作成の体制を整え、現在は主に心臓血管外科の手術において 20 件ほどの使用経験を積み、救急の場ではまだ1件のみの使用であった。その他、災害時の輸血療法に関する講演会、シンポジウムに出席して(名古屋、大分等)、災害時の輸血療法に関する問題点を抽出して、静岡県内の施設を対象にアンケート調査を 2017 年4月に行った。その結果を基に、特に災害時の輸血療法の準備をしている、静岡市立清水病院を 2017 年 12 月 13 日に視察した。

岩神らは、「自然災害発生時における在宅酸素療法患者に対する地域ネットワーク構築に関する検討」において、在宅酸素療法を行っている患者 20 名に対し、災害時の意識調査を行った。その結果、災害発生時に電力が喪失していなければ 17 名は自宅に在ることを希望されているが、自宅が停電など住めない状態になった時にどこで酸素吸入ができるか、行政から指示があるかに関しては、ほとんどの方(19 名)が知らないという結果だった。以上から、災害時の課題としては、近隣の医療施設や地元自治体への働き掛けが必要となるため、地元医師会と協議を行う必要性が考えられた。

田中らは、「災害時における妊婦の適切なトリアージの構築」において、①産科救急母体搬送症例 821 例を対象とした検討を行った。その結果、トリアージ「赤タグ」の中で、母児の危機的症例は 37%(217 / 580 例)であり、現状の妊婦トリアージは妥当であることが示唆された。②災害時に増加することが予想され、かつ早期対応が必要な常位胎盤早期剥離について、母体の背景、搬送までの経過、搬送時の状況と症状、バイタルサイン、採血結果、産科 DIC の有無、診断と重症度、治療計画、治療効果、転帰を検討した。その結果、発症から治療開始までの時間と児の予後との明らかな相関は認めなかったが、より早期(1 時間以内)に娩出することにより、子宮内胎児死亡を減少できる可能性が示唆された。救急搬送時のトリアージのために、超音波検査の有用性が示唆された。また常位胎盤早期剥離では、早期対応が母児の予後を改善するため、本疾患が疑われる場合には最優先に対応する必要があると思われる(*140, *141)。

テーマ 1-2(災害に備えた新たな医療技術の開発)

市之川らは、臍胸に対する胸腔鏡下手術と開胸手術の比較したところ、胸腔鏡下手術は急性臍胸に対して開胸とほぼ同等の効果をもち、また、男性、既往歴が有る患者、術前 Alb が低値の患者は周術期に合併症を減らす努力が必要と考えられることを見出した (**143)。

楠らは、3 ヶ月以上経過観察しえた炎症性喉頭疾患肉芽腫症例を対象として本音声治療を施行した。結果は、本音声訓練により、声帯結節は3ヵ月以内に 27 例全例消失した。声帯ポリープでは16 例中 13 例が消失した。PPI 無効の喉頭肉芽腫症例については、20 例中 18 例に消失および縮小を認めた。

大林らは、ロコモティブシンドロームと運動器不安定症を安全・簡便かつ確実に評価する方法を、障害物のまたぎ動作、椅子からの立ち上がり動作で解析を行い検討した結果、健康者とロコモ群との差を見出し、説明変数の絞り込みに主成分分析が有効であることを示した。

諏訪らによれば、災害発生時には災害による直接的な生命への危機が及ぶ場合と、災害発生直後の危機を乗り越えた後の避難所等の環境を誘因とする災害関連死による生命への危害が知られている。後者の代表的な例として深部静脈血栓症及び肺血栓塞栓症(エコノミークラス症候群)が挙げられる。通常の診療において深部静脈血栓症および肺血栓塞栓症の症例を蓄積し、発症に至る生活様式等病態の解明を行っている。

最上らは、「骨盤骨折への新しい後方固定法の開発」について、骨盤骨折において、手術手技が容易で、腰部の生理的

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

可動性を温存可能な Sacroiliac rod fixation (SIRF)固定を考案した。骨折固定をシミュレーションした力学的評価の結果、恥骨プレートを追加することにより従来の方法と遜色が無い固定性が得られることを解明した。

岡崎らは、災害時の混乱の中でも効率的な手術室運営ができる要因を検証するため、阪神淡路地震の被災地の病院のうち、当院の規模に近い2病院について、災害時から復興に至るまでの様子を調査した。1つは建物崩壊によって病院としての機能がほとんど停止した神戸市立医療センター西市民病院と、水道以外のインフラが残った神戸大学附属病院について、震災後初期の病院機能を再開・再建までを担当した医師にインタビューを行った。病院の被害では対照的な2病院は、震災初期の病院機能に大きな相違があり、建物障害の程度がその後の機能再開に大きく影響することが分かった。

菅尾らは、2016年4月1日から2017年3月31日の期間を対象に以下の調査を完了した。伊豆半島東部地区におけるインスリン治療中の患者数調査（順天堂静岡病院に通院中患者）、同地区における順天堂静岡病院以外に通院中のインスリン治療中の患者数想定。順天堂静岡病院に通院するインスリン治療中の患者の分布状況調査。

テーマ2(災害時における疾病・合併症の病因・病態解明)

佐藤浩らは、災害時の検体保存の指標を作成するため、血液検体放置による HMGB-1 の安定性評価を行い、遠心分離をせずに保存した血清よりも、採血後直ちに遠心分離した状態で保存した血清では、HMGB-1 濃度は採血から72時間経過時においても上昇しないことを見いだした。これにより採取後直ちに遠心分離すれば3日間は使用可能であることが判明した。また、大腸穿孔による汎発性腹膜炎、敗血症性ショック患者の血清および腹水中の HMGB-1 濃度および PMX-DHP の効果の検討した結果、術前の HMGB-1 は 26.4 ng/ml と高値を示し、腹水 HMGB-1 も 58.29 ng/ml と著明な高値を示した。PMX-DHP 施行直後、血清 HMGB-1 は 12.3 ng/ml と半減し、24、48 時間後と漸減したことを示した。これにより HMGB-1 が汎発性腹膜炎のマーカーとして有用であることを確認した。

折田らは、大災害発生時のストレスによる胃腸炎の制御を目的とし、炎症によるプログラム細胞死の重要因子 GSDMD に着目し、これのノックアウト(KO)腸炎モデルマウスを作成し検討を行った。その結果、GSDMD-KO マウスにおいては炎症の度合いがかなり抑制されていたことから GSDMD は大腸炎を促進するはたらきを持つことが示唆された。さらに炎症性大腸腫瘍モデルを作成したところ、GSDMD-KO マウスにおいてより早期に巨大な大腸癌を発症することを見出した。(****1)

寒竹らは、災害時のストレスモデルとして、早期に出産に至り新生児集中治療室へ入室となったうえ長期にわたる母子分離、様々な侵襲的医療行為を受ける新生児を用いて、ストレスが DNA メチル化に及ぼす影響を検討した。新生児の血清から分離した cell free DNA を用いてグルココルチコイドレセプター遺伝子のメチル化を測定した結果、DNA がメチル化されるのは生後1か月を過ぎてから2か月にかけてであった。これによる PTSD や腎発育障害の懸念が高まった。また、メチル化に強い影響を与える因子について、多変量解析を行ったところ、出生後の副腎不全と子宮内発育不全が影響していることが判明した(*184, **270, **271, ***8, ***9)。また、伊藤らの Johns Hopkins 大学での動物実験では、妊娠マウスにストレスを与えたところ出生マウスにおいて有意差を持って、動脈硬化、肺がんになりやすい結果が得られた。

土至田らは、災害時、洗浄困難なコンタクトレンズの取り扱いについて検討を行った。コンタクトレンズのケース内保存液の残液量と蛋白濃度を比較、調査したところ、液量が少ないほど蛋白濃度が高くなる傾向が示された(*185)。

松崎らは、火山性粉塵が眼表面へ及ぼす影響を調査した。火山灰の眼内飛入を想定した家兎を用いた麻酔下での実験では、ソフトコンタクトレンズを装着させた眼では眼障害が少ない傾向がみられた。

神田らは、「災害・救急医療で使用可能な画期的な駆血装置の開発」において、動物を用いたターニケット駆血による合併症の評価を行い、新型駆血システムの開発に必要な生理的・生化学的情報を得た結果、駆血状態を保ちながら圧力をコントロールできれば、筋へのダメージや痛みを軽減できることを究明した。

諸橋らは、「災害時クラッシュ・シンドロームの病態の解明のため動物によるクラッシュモデルの作成」において、震災や事故現場で重量物の下敷きになり、四肢骨格筋が強く長時間圧迫された後、血流が再灌流されることにより生じるクラッシュ・シンドロームは、重篤な病態へ移行し致死率も高いことから、その病態の解明のため動物によるクラッシュモデルを作成した。筋組織へのダメージの再現が可能であった。

佐藤俊らは、肝線維化を伴わない急性肝障害における血清 M2BPGi 値の変動について調査し、血清 M2BPGi 値に影響を与える肝線維化以外の要因について解析した。その結果、M2BPGi は肝線維化をほとんど伴わない急性肝障害でも上昇することが明らかとなった。特に肝炎例では ALT 値との相関が認められたことから、肝内における壊死炎症反応が血清 M2BPGi 値に影響を与えるものと考えられた。しかしながら肝炎を伴わない循環不全などでも血清 M2BPGi 値上昇が認められたことから、炎症反応以外の未知の要因が影響する可能性も考えられた。今後災害時に発症しうる急性肝障害において血清 M2BPGi 測定が診断・治療に役立つ可能性が考えられた。

<特に優れた研究成果>

テーマ 1-1: くも膜下出血、急性冠症候群症例では、ドクターヘリによる現場からの早期搬送が有用であることを世界で初めて示した。減圧症のドクターヘリ搬送の安全性を世界で初めて示した。テロによる特殊災害(化学・生物・放射性物質・核・爆発物)ではヘリパイロットに悪影響を及ぼし、重大な航空機事故につながる可能性があり、少なくともドクターヘリはその運用に関わるべきでないことを提言し、日本航空医療学会の指針に盛り込まれた。多数傷病事案における複数機ドクターヘリやドクターカー運用の有用性を示した。急性大動脈解離やくも膜下出血による心停止症例のクリニカルプロフィールを世界で初めて示した。CT 画像上、外傷が加わった部位に発生する窒素ガス分析により、様々な外傷診断における臨床例を報告し、日本外傷学会では優秀演題賞を獲得した。ボディボード損傷に関しては、浅瀬で波に揉まれて回転した際に頭部を海底に打ち付け、頸部が過伸展を強いられたときに上肢を中心とした麻痺や痺れ、すなわち中心性頸髄損傷を生じやすいことを世界で初めて示した。静岡県東部における開渠側溝の危険性を示した。車やバイクで走行中、鹿と遭遇した場合、避けずに衝突したほうが、重傷になりにくい可能性を示した(柳川)。

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

テーマ1-2: 急性膿胸に対し、胸腔鏡下手術と開胸手術と同等の効果があることを発見した。急性膿胸患者は、男性、既往歴が有る患者、術前 Alb が低値の患者は周術期に合併症を減らす努力が必要であることを発見。外傷性血気胸に対し、入院後早期は血胸コントロール中心の管理をし、入院1週間後は気胸、膿胸コントロール中心の管理が必要と考えることを発見した(市之川)。ロコモティブシンドロームの診断に必要な評価項目の決定に、多変量解析(主成分分析)が有用であることを見出した。クラッシュシンドロームモデルとして、EHD(electrohydrodynamics)現象を応用したポンプを試作し、駆血圧の駆動として動物に用いたのは本邦初であり、加圧特性の安定化も進んでいる。骨盤骨折においてより少ない手技操作で、最大の骨折固定効果が得られる SIRF 法は、災害時などマンパワーが得られにくい場面で有用な方法で有ることが解った。(大林・最上・神田・諸橋)

テーマ 2: HMGB-1 を用いて、採取した血清は遠心分離さえしておけば、3日間は有効であると確認、血液・腹水の HMGB-1 の上昇は、腹膜炎のマーカーとして有用であり、さらに、血清 HMGB-1 の上昇の遷延は予後不良因子であることを示した(佐藤浩)。炎症性プログラム細胞死パイロトーシスのメディエーターGSDMD の欠損が短期的には炎症の早期終焉を誘導するが長期的には癌化を加速することに着目し、GSDMDKOによる炎症性大腸癌モデルマウスの発明を行えた(特許取得済み)(折田)。肉眼では見ることが出来ないコンタクトレンズやレンズケース内保存液の汚染状況は、蛋白濃度を測定する事でその汚染度が推測できる事が示唆された(土至田)。火山灰の眼内飛入ではソフトコンタクトレンズ装用眼で眼障害が少ない傾向がみられた。開放性眼外傷例の傾向としては労働者の男性が多い傾向がみられた(松崎)。

<問題点とその克服方法>

テーマ 1-1: 災害教育がどの程度、実災害に有用となっているかを具体的に検証することは困難であるが、訓練結果などの評価により、検討を行っている(柳川)。消防の救急車による陸路搬送との直接比較は困難であるが、日本航空医療学会が主導のドクターヘリレジストリに加入し、現在、本邦におけるドクターヘリと陸路搬送の比較検討解析を実施中である(大坂)。広域災害に対して長期にドクターヘリによる支援を行うと、本来業務が実施できなくなる問題点が指摘されている(大森)。地元市民にはボディーボード外傷の注意を喚起できているが、県外からの遊戯者にどのように伝えるかが問題であり、マスコミを通じて注意喚起を行う予定である(石川)。配布したストレス反応を解説したパンフレットの影響をどのように調査するかが問題となったが、電話調査により反応を確認し、必要に応じて病院受診を勧めることとした(三島)。

特殊車両としての機能追加はできない。現時点では必要に応じて、救急外来にある医療資材を積み込むことで対応を行っている(大出)。

テーマ 1-2: 胎児には限られた検査しかできないため、出生後の予後も含め関連科と協力し、共同研究を展開する(田中)。急性膿胸に限らず胸部外科疾患患者は、既往歴や生活歴など多様であり、互いの関連性についての解析は必ずしも進んでいない。今後は、定期会合において互いの研究成果の関連性についての検討を実施するなどにより、研究者間の連携をより高めることで研究成果を統合し、予防・治療法の開発に向けて標的を絞った研究を展開する(市之川)。

簡便・確実に運動器不安定症を評価す手法の確立には、より多くの基礎的データが必要であるので、効率の良い解析システムを構築する必要がある。新型ターニケットシステム製品開発・作製にあたっては、順天堂大学と東京電機大学工学部で共同研究を行っているが、先端産業支援センターなどによる仲介で、実際に製作に携わる企業を選考している。動物におけるクラッシュシンドロームモデルにおいて、筋へのダメージの再現は可能だったが、再灌流による血栓モデルの再現はできていない。モデル実験のストラテジーの再考が必要である(大林・最上・神田・諸橋)。患者数の調査は交付されている自己血糖測定用電極の数量から想定している。順天堂静岡病院に通院中のインスリン治療中の患者数に交付されている自己血糖測定用電極は一人あたり1日2個を使用していると仮定すると、インスリン治療中患者数と一致した。順天堂静岡病院以外の施設で交付されている電極数は伊豆半島各地区の施設の電極の購入量情報を入手し、上記の1人あたり1日2個を使用するとして患者数を想定した。(菅尾)

テーマ 2: ストレスが DNA に与える影響については、母体の末梢血から胎児細胞を効率的に分離する方法の確立が困難なため、母体血中に存在する胎児の cell free DNA を用いる。胎児細胞由来 DNA は母の細胞由来の DNA よりかなり小さいことを利用し濃縮できるため、胎児 DNA の目的とする領域のメチル化の解析を試みる(寒竹)。コンタクトレンズ付着の蛋白濃度測定は研究室レベルで行える Bradford 法であったが、その普及にはキット化が可能な、より簡便な方法を見出す必要がある(土至田)。火山灰の飛入時はソフトコンタクトレンズ装用者では直ちに外す事が推奨されているが、それよりもまず安全な場所に避難する事が重要と考えられた。不慮の事故等による症例の視力予後改善や外傷発生予防が今後の課題と思われた(松崎)。

<研究成果の副次的効果(実用化や特許の申請など研究成果の活用の見通しを含む。)>

テーマ 1-1: 臨床検討結果は学会発表や地域の講演、マスコミを通じて随時、社会に還元している。マスコミが当研究センターに興味を示し、情報発信の支援を頂いている。当科から世界に発信した情報を見て、国際学会からの発表依頼、また、当院で研修を望む外国人が生まれている(柳川)。

テーマ 1-2: 簡便かつ確実なロコモティブシンドロームの診断方法が確立されれば、専門的な医療機関などに行かなくても、健康診断さらに家庭においてロコモの診断が可能となる。スマートフォンのアプリへの応用も可能である。EHDポンプによる駆血システムは小型、無音・無振動、かつ低電力でバッテリー駆動が可能であるため、手術中での使用はもとより救急の場や災害時でも有用になる(特許出願を検討中)。(大林・最上・神田・諸橋)

非災害時においても深部静脈血栓症及び肺血栓塞栓症の診断治療及び危険予測因子の解明に繋がる(諏訪)。

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

テーマ 2: 炎症性プログラム細胞死に欠かせない Key mediator GSDM D の欠損が短期的には炎症を早期に消退させるものの、腫瘍形成を伴い、長期的に癌化を促進することを発見。AOM/DSS を用いた炎症性大腸腫瘍作成を GSDM D KOマウスで行ったところ、早期(約3ヶ月)に大きな腫瘍を作ること成功した。特許取得済み(下記に記載)(折田)。

<今後の研究方針>

テーマ 1-1: 災害に関する教育、訓練を行いながら、日常災害や大規模災害勃発時の事例を検討する(柳川)。検討がなされていない内因性疾患のドクターヘリ搬送の有用性を検証していく(大坂)。複数機ドクターヘリ、ドクターカーを用いた運用の効果を検証していく(大森)。平成31年度には日本高気圧環境学会関東地方会を主催し、海難事故の現状とその発生予防の取り組みに関して討論を行う(石川)。現在、救急外来でのストレスについて収集/解析している情報をまとめ、その結果を発信していく(三島)。ドクターヘリの代替/補完として用いられるドクターカー運用の検証を行う(大出)。救急医療におけるクリオプレシテートの有用性を検証する(小池)。地元医師会と、本研究に関して、共同で行政に働きかけを行う(岩神)。

テーマ 1-2: 災害時における胸部外科疾患の新規治療法の研究と共に、遠隔支援ロボット手術の導入を行い、医師派遣が困難な地域での外傷例などについての検討を行う(市之川)。EHDポンプによる新型ターニケットシステムはクラッシュ症候群モデルの、実用にむけて安定性・安全性を確立する。力学的なシミュレーションだけでは再現することが難しい種々の骨盤骨折に対する固定性の評価を、3次元有限要素計算ソフトウェアを用い解析し、より固定が優れた治療法を吟味する(大林・最上・神田・諸橋)。災害時における母体・胎児のストレスによる遺伝子レベルでの変化を、次世代シーケンサーを用いて研究を行う(田中)。高齢者も多い地域であり、心疾患事例の臨床データの集積を行い、災害時治療計画、トリアージ等の検討を行う(諏訪)。麻酔については、文献的考察を中心に、当地区の特徴も盛り込んだ実践可能な計画を作成する(岡崎)。当院に来院する各慢性疾患患者数の想定から備蓄薬品量を設定し、数か月孤立しても大丈夫なように準備を行う。さらに、治療薬の情報が無い患者のための治療マニュアルの作成を行う(菅尾)。

テーマ 2: 腹部鈍的外傷、上部消化管穿孔、大腸穿孔症例の蓄積と血中・腹水中ヒストンの動態と治療効果との関連について引き続き検討していく(佐藤浩)。ω3飽和脂肪酸(エパデル)や抗炎症効果のある薬物が、腸炎に与える影響を GSDM D を通じて検討し、災害時の下痢、腸炎などの予防について検討を行う(折田)。災害時ストレスの胎児や小児に与える影響について、集中治療室(NICU)で得られた結果を子宮内と思春期まで拡大して追跡調査を行う。さらに、マウスモデルについて、Johns Hopkins 大学と共同でそのメカニズムの検証を行う(寒竹)。より簡便なコンタクトレンズの汚染検査方法の開発をめざす。上述の Bradford を応用する事で蛋白濃度別に色に変色するようなキット製作のためのプロトタイプ作りと、実際の濃度との整合性を調査・研究する(土至田)。火山灰の降灰が日常的な地域での実態調査を行い、これまでの基礎研究結果との整合性について検証する(松崎)。

<今後期待される研究成果>

テーマ 1-1: 大規模災害に対応可能な組織体制の構築、システム運用の開発、効率的な搬送手段の確立、迅速なトリアージ法と治療法の確立による、防ぎ得た災害死の減少。同時に、平時における疾患死の減少(柳川)。また、市民公開講座などで地域住民に情報発信をし、特に静岡県民のさらなる防災意識の向上だけでなく、安心な地域づくりへの貢献(柳川)。地震、津波、火山など多様な災害に対応するべく世界的な医学的研究拠点を静岡県東部に設置することで、国内外からの研究者の集中や、人口の都市部流出を防ぐ事による、地域経済への波及効果(柳川)。

テーマ 1-2: 腹式呼吸が、音声のみならず、肺機能、嚥下機能に寄与する機序の解明(楠)。EHDポンプによる駆血システムの、従来の空気圧ポンプとの対比、置き換わる可能性を証明(大林・最上・神田・諸橋)。災害時の深部静脈血栓症及び肺血栓塞栓症の予防及び早期診断と治療法の開発(諏訪)。即戦力の災害時手術室運用計画の作成(岡崎)。備蓄すべきインスリンの数量や種類を算出。治療情報の乏しい患者に対する安全な治療マニュアルの作成(菅尾)。

テーマ 2: 災害時の外傷・ストレスによる消化管穿孔に起因する重症感染症による臓器障害における HMGB-1 およびヒストンの関与の研究により、Polymyxin B-immobilized fiber column による血液浄化(PMX-DHP)やトロンボモジュリンの治療効果を明らかにできる(佐藤浩)。腸炎の研究では、GSDM D 遺伝子の更なる解明、および飽和脂肪酸などの抗炎症効果。災害時における備蓄の提言。さらには、長期的な視野で、癌化についての解明(折田)。ストレスがDNAに与える影響については、胎児におけるストレスをリアルタイムに測定可能にし、小児精神発達遅滞児の分子学的な診断、各種治療法の効果判定などへの応用。さらに、胎児期に災害を経験した小児への動脈硬化、肺がん予防のための啓蒙(寒竹)。眼科では、コンタクトレンズ、レンズケース内汚染を検出するキット開発と、これによるトラブルのリスク軽減(土至田)。富士山の噴火などの、火山灰の降灰時やその他の眼外傷時の眼障害軽減法、予防法の開発(松崎)。

<自己評価の実施結果及び対応状況>

定期的なラボミーティングで研究進捗状況を報告し、自己相互評価を行っている。また、佐藤センター長のもと、毎月一回運営委員会を開催し随時情報の共有を行っている。研究の進捗状況及び計画内容や将来性に応じて各研究の予算配分を行い、評価を行っている。

<外部(第三者)評価の実施結果及び対応状況>

外部評価は、国立がん研究センター 先端医療開発センター免疫療法開発分野 分野長 吉村清先生、藤田保健衛生大学 松尾浩一郎教授に委嘱し、プログレスミーティングにて評価を得ている。(資料1)

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

い。)

- (1) 災害医学 (2) 大規模災害 (3) ドクターヘリコプター
 (4) 災害ストレス (5) メンタルヘルス (6) 輸血療法
 (7) 災害疾患モデル (8) 災害時の手術運営

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

【英文論文】

柳川洋一、大坂裕通、大森一彦、石川浩平、三島健太郎、大出靖将

1. Omori K, Yanagawa Y, Inoue T, Okamoto K, Ito H. A case of pulmonary edema induced after being buried alive. *Am J Emerg Med.* 2015: S0735-6757.
2. *Yanagawa Y, Omori K, Obinata M, Mishima K, Ishikawa K, Osaka H, Oode Y, Sakurada M, Muramatsu S. Shizuoka Prefecture Disaster Drill Involving the Japanese and US Military. *Disaster Med Public Health Prep.* 2015 Jun 4:1-2.
3. Ohsaka H, Yanagawa Y, Miyasaka Y, Okamoto K. Successful treatment of a penetrating pulmonary artery injury caused by a Japanese sword in a patient transported by a physician-staffed helicopter. *J Emerg Trauma Shock.* 2015 Apr-Jun;8(2):125-6.
4. Obinata M, Omori K, Ishikawa K, Osaka H, Oode Y, Yanagawa Y. Significance of pneumorrhachis detected by single-pass whole-body computed tomography in patients with trauma. *J Emerg Trauma Shock.* 2015 Apr-Jun;8(2):120-1.
5. Omori K, Jitsuiki K, Ohsaka H, Mishima K, Ishikawa K, Obinata M, Oode Y, Yanagawa Y. Recurrent idiopathic ventricular fibrillation induced by high fever. *Am J Emerg Med.* 2015: S0735-6757.
6. *Mishima K, Omori K, Ohsaka H, Takeda J, Ishikawa K, Obinata M, Oode Y, Sugita M, Yanagawa Y. A case of the vacuum phenomenon as a mechanism of gas production in the abdominal wall. *Am J Emerg Med.* 2015 Jun;33(6):863.e1-2.
7. Obinata M, Ishikawa K, Osaka H, Mishima K, Omori K, Oode Y, Yanagawa Y. A patient with refractory shock induced by several factors, including obstruction because of a posterior mediastinal hematoma. *Am J Emerg Med.* 2015 Jun;33(6):859.e1-2.
8. Oode Y, Maruyama T, Kimura M, Fukunaga T, Omori K, Yanagawa Y. Horse kick injury mimicking a handle bar injury or a hidden speared injury. *Acute Med Surg* 30 JUN 2015.
9. Ishikawa K, Fujii M, Omori K, Jitsuiki K, Iwakami S, Yanagawa Y. Chest pain due to bowel adhesion accompanying diaphragmatic eventration. *J Emerg Med.* 2015;3:88-91.
10. *Emergency Medicine in Juntendo Hospitals. Juntendo Med J* 2015;61:182-3.
11. Palungwachira P, Bundit C, Vatcharothayangul C, Sumi Y, Yanagawa Y, Iba T, Tanaka H. Clinical elective study report at the department of emergency and critical care medicine in Juntendo University faculty of medicine. *Juntendo Med J* 2015;61:166-70.
12. Yanagawa Y, Oode Y, Kunimoto M, Kubota N, Ohsaka H, Obinata M, Mishima K, Omori K, Ishikawa K, Suwa S. A case of Kounis syndrome induced by food allergies. *Sch J Med Case Rep* 2015;3(9A):834-837.
13. Omori K, Jitsuiki K, Ohsaka H, Obinata M, Ishikawa K, Yanagawa Y. A patient with resistant Chromobacter

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- iumviolaceum infection. Sch J Med Case Rep 2015; 3(8A):785-788.
14. Oode Y, Ohsaka H, Ishikawa K, Jitsuiki K, Obinata M, Mishima K, Omori K, Yanagawa Y. Prospective investigation on the significance of carboxyhemoglobin level in out-of-hospital cardiopulmonary arrest. Jacobs J Intern Med 2015;1(2):010(1-4)
 15. Yoshizawa T, Jitsuiki K, Obinata M, Ishikawa K, Ohsaka H, Oode Y, Sugita M, Yanagawa Y. A patient with clear consciousness even with a glucose level of 5 mg/dL (0.2 mmol/L). Am J Emerg Med. 2015 Oct 23.
 16. Ishikawa K, Ohsaka H, Omori K, Obinata M, Mishima K, Oode Y, Yanagawa Y. Pregnant Woman Bitten by a Japanese Mamushi (Gloydius blomhoffii). Intern Med. 2015;54(19):2517-20.
 17. Yanagawa Y, Ohsaka H, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K. Pulmonary embolism in a patient complaining of a cough symptoms. Sch J Med Case Rep 2015; 3(12):1226-7.
 18. *Jitsuiki K, Takeuchi I, Ishikawa K, Yoshizawa T, Ohsaka H, Yanagawa Y. A cutis marmorata in which the presence of intravascular air was confirmed by CT: A case report. Undersea Hyperb Med. 2015 Sep-Oct;42(5):527-8.
 19. Ohsaka H, Ishikawa K, Jitsuiki K, Yanagawa Y. Factors affecting difficulty in extubation after initial successful resuscitation in cardiopulmonary arrest patients. J Emerg Trauma Shock. 2016 Apr-Jun;9(2):88-9.
 20. Mishima K, Itoi A, Sugita M, Yanagawa Y. A case of fracture through fused cervical segments following trauma in a patient with Klippel-Feil syndrome. J Emerg Trauma Shock. 2016 Apr-Jun;9(2):85-6.
 21. *Yanagawa Y, Ohsaka H, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Takeuchi I, Omori K, Oode Y, Ishikawa K. Vacuum phenomenon. Emerg Radiol. 2016 Aug;23(4):377-82.
 22. Yoshizawa T, Jitsuiki K, Obinata M, Ishikawa K, Ohsaka H, Oode Y, Sugita M, Yanagawa Y. A patient with clear consciousness even with a glucose level of 5 mg/dL (0.2 mmol/L). Am J Emerg Med. 2016 May;34(5):941.e3-4.
 23. Ohsaka H, Yoshizawa T, Ishikawa K, Jitsuiki K, Suwa S, Saito S, Tambara K, Yanagawa Y. A satisfactory recovery after emergency pericardiocentesis in type an acute aortic dissection with cardiac arrest. Sch J Med Case Rep, April 2016; 4(4):200-202.
 24. *Jitsuiki K, Ohsaka H, Ishikawa K, Yoshizawa T, Omori K, Yasumasa Oode Y, Yanagawa Y. Characteristics of patients who fell into open drains: a report from a single emergency center in East Shizuoka. Acute Med & Surg 2016 May 2;3(4):332-338.
 25. Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Omori K, Ishikawa K, Ohsaka H, Oode Y, Yanagawa Y. A blunt traumatic diaphragmatic hernia diagnosed at resuscitative thoracotomy. Sch J Med Case Rep, April 2016; 4(4):242-245.
 26. Jitsuiki K, Takeuchi I, Yoshizawa T, Ishikawa K, Omori K, Ohsaka H, Oode Y, Asahi K, Yanagawa Y. Splenic injury with right rib fractures. Sch J Med Case Rep, April 2016; 4(4):239-241.
 27. *Ishikawa K, Ohsaka H, Omori K, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Yanagawa Y, Oode Y, Yanagawa Y. Effective simulation training for advanced cardiopulmonary resuscitation for first year students of a nursing university. Sch. J. App. Med. Sci., 2016; 4(2A):339-342.
 28. *Yanagawa Y, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Omori K, Osaka H, Sato K, Mitsuhashi N, Mihara J, Ono K. Disaster Imagination Game at Izunokuni City for preparedness for a huge Nankai Trough earthquake. Sch. J. App. Med. Sci., 2016; 4(6D):2129-2132.
 29. *Ishikawa K, Jitsuiki K, Ohsaka H, Yoshizawa T, Obinata M, Omori K, Oode Y, Takahashi M, Yanagawa Y. Management of a Mass Casualty Event Caused by Electrocution Using Doctor Helicopters. Air Med J.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- 2016 May-Jun;35(3):180-2.
30. Ishikawa K, Omori K, Ohsaka H, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Oode Y, Sakurada M, Mogami A, Yanagawa Y. A system of delivering medical staff members by helicopter to manage severely wounded patients in an area where medical resources are limited. *Acute Med & Surg* 2016 Aug 5;4(1):89-92.
 31. Yanagawa Y, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ishikawa K, Omori K, Nakao Y, Yamamoto T. Hemiparesis due to subarachnoid hemorrhage. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(5):320-321.
 32. *Ohsaka H, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Omori K, Oode Y, Ishikawa K, Yanagawa Y. Activity of a medical relief team from Shizuoka Hospital during the 2016 Kumamoto Earthquake. *Juntendo Med J* 2016;1-3.
 33. Takeuchi I, Ohsaka H, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Omori K, Yanagawa Y. A case of an alcohol user complicated with both Wernicke's encephalopathy and Boerhaave syndrome. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(8):620-622.
 34. *Ishikawa K, Yoshizawa T, Fukase T, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ohsaka H, Omori K, Yanagawa Y. A case of mountain sickness with premature ventricular contraction improving while descending a mountain. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(8):616-619.
 35. *Ohsaka H, Jitsuiki K, Takeuchi I, Yoshizawa T, Omori K, Ishikawa K, Yanagawa Y. Ultrasound for diagnosing inner ear decompression sickness. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(8):605-606.
 36. Ohsaka H, Namiki Y, Matsuoka R, Tsuboi K, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Yanagawa Y. A case of thyroid storm where the CT findings were the first clue. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(8):602-604.
 37. Yanagawa Y, Kondo A, Yoshizawa T, Jitsuiki K, Miyake T, Ohsaka H, Sugita M. The migration of air into the aorta from a pneumothorax in a patient with a penetrating injury of the aorta. *Aorta* 2016;4(3):102-4.
 38. *Yanagawa Y, Omori K, Ishikawa K, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Takeuchi I, Ohsaka H. Hypothesis: the influence of cavitation or vacuum phenomenon for decompression sickness. *Diving and Hyperbaric Medicine* 2016;46(3): 190.
 39. Yoshizawa T, Ishikawa K, Takeuchi I, Jitsuiki T, Ohsaka H, Omori K, Sugita M, Yanagawa Y. A case of essential thrombocythemia complicated with spontaneous chest wall Hematoma. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(9):657-659.
 40. Jitsuiki K, Yanagawa Y, Ohsaka H, Ishikawa K, Takeuchi I, Yoshizawa T, Omori K, Yoshiike T. A case that developed Stevens-Johnson syndrome as a complication during treatment for Methicillin resistant *Staphylococcus aureus*. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(9):675-677.
 41. *Yanagawa Y, Anan H, Oshiro K, Yasuhiro Otomo Y. An evaluation of a mass casualty life support course for chemical, biological, radiological, nuclear, and explosive incidents. *SAS J. Med.*, 2016;2(5): 110-114.
 42. Ishikawa K, Jitsuiki K, Takeuchi I, Yoshizawa T, Omori K, Ohsaka H, Yanagawa Y. A lethal case of gastroenterobronchial fistula. *Am J Emerg Med*. 2016 Sep 22.
 43. *Jitsuiki K, Omori K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Ohsaka H, Yanagawa Y. Impact of Head and Spinal Lesions among Patients Who Fell Into Open Drains in Japan: A Systematic Review of Japanese Literature. *SAS J Med* 2016;2(5):115-117.
 44. *Yanagawa Y, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Ohsaka H. Traumatic pneumosyrinx and pneumorrhachis. *J Neuroradiol*. 2016 Oct;43(5):358-9.
 45. Jitsuiki K, Ohsaka H, Takeuchi I, Yoshizawa T, Ishikawa K, Omori K, Yanagawa Y. A Case of Emphysematous Cystitis after Treatment for Depression. *Sch J Med Case Rep* 2016; 4(10):765-767.
 46. Jitsuiki K, Yoshizawa T, Nakamura Y, Ishikawa K, Omori K, Ohsaka H, Yanagawa Y. A case of thrombocytopenia mimicking thrombotic thrombocytopenic purpura. *Sch J Med Case Rep* 2016;

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

4(10):777-781.

47. *Yanagawa Y, Sonobe M, Suzuki H, Hayashi K, Matsuoka R, Takahashi Y, Yoshino A, Hayakawa T. The introduction of a mass casualty life support management course in Shizuoka. *SAS J. Med* 2016;2:121-5.
48. Yoshizawa T, Omori K, Takeuchi I, Miyoshi Y, Kido H, Takahashi E, Jitsuiki K, Ishikawa K, Ohsaka H, Sugita M, Yanagawa Y. Heat stroke with bimodal rhabdomyolysis: a case report and review of the literature. *J Intensive Care* 2016, 4 :71
49. *Ishikawa K, Omori K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ohsaka H, Nakao Y, Yamamoto T, Yanagawa Y. A comparison between evacuation from the scene and interhospital transportation using a helicopter for subarachnoid hemorrhage. *Am J Emerg Med.* 2016 Dec 10. pii: S0735-6757(16)30906-8.
50. Takeuchi I, Jitsuiki K, Ohsaka H, Yanagawa Y. A case of subarachnoid hemorrhage that a fire department first reported as an inhalation burn injury. *J Emerg Trauma Shock.* 2016 Oct-Dec;9(4):158-159.
51. *Yanagawa Y, Omori K, Ishikawa K, Ohsaka H. A second analysis of patients with decompression illness transported via physician-staffed emergency helicopters. *J Emerg Trauma Shock.* 2017;10(1):50-51.
52. Ohsaka H, Omori K, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Yanagawa Y. A case of massive subcutaneous emphysema in comparison to pneumothorax due to lung injury, following laryngeal edema. *Sch J Med Case Rep* 2017; 5(3):190-1.
53. Ishikawa K, Jitsuiki K, Takeuchi I, Yoshizawa T, Omori K, Ohsaka H, Yanagawa Y. A lethal case of gastroenterobronchial fistula. *Am J Emerg Med.* 2017 Mar;35(3):518.e3-518.e4.
54. *Oode Y, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ohsaka H, Ishikawa K, Obinata M, Yanagawa Y. Vacuum Phenomenon as a Mechanism of Gas Production in the Abdominal Wall. *J Emerg Med.* 2017 Feb;52(2):e51-e52.
55. Ishikawa K, Omori K, Jitsuiki K, Ohsaka H, Ito H, Shimoyama K, Fukunaga T, Urabe N, Kitamura S, Yanagawa Y. Clinical significance of fibrinogen degradation product among traumatized patients. *Air Medical Journal* 2017; 36:59-61.
56. Yanagawa Y, Ishikawa K, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Oode Y, Omori K, Ohsaka H. Fibrinogen degradation product levels on arrival for trauma patients requiring a transfusion even without head injury. *World J Emerg Med* 2017;8(1):1-4.
57. Nagasawa H, Omori K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ohsaka H, Ishikawa K, Yanagawa Y. A patient suffering traumatic injury due to swerving to avoid hitting a deer. *Sch J Med Case Rep* 2017; 5(1):11-3.
58. Jitsuiki K, Yoshizawa T, Takeuchi I, Hayashi C, Ohsaka H, Ishikawa K, Omori K, Yanagawa Y. Prolonged hypoglycemia after an insulin glargine overdose in a patient with type 2 diabetes mellitus. *Sch J Med Case Rep* 2017; 5(1):24-7.
59. *Yanagawa Y, Omori K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Kando Y, Fukata M, Ohsaka H. Cardiac arrest at high elevation with a favorable outcome. *Ame J Emerg Med* 2017; 35: e7.
60. Yanagawa Y, Omori K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ishikawa K, Ohsaka H, Saito K. A case in which a patient intoxicated by synthetic cannabinoids was diagnosed by a mass spectrometry analysis. *Sch J Med Case Rep* 2017; 5(4):280-281.
61. Jitsuiki K, Hashimoto A, Yoshizawa T, Yanagawa Y. An infant case of intraoral penetrating injury with a toothbrush causing retropharyngeal and upper mediastinal emphysema. *J Indian Soc Pedod Prev Dent.* 2017 Apr-Jun;35(2):181-183.
62. Yoshizawa T, Iwazaki M, Jitsuiki K, Ishikawa K, Ohsaka H, Yanagawa Y. Suffocation due to Thoracic Deformity Caused by Acromegaly. *Intern Med.* 2017;56(8):949-951.
63. *Jitsuiki K, Ishikawa K, Koike K, Yanagawa Y. Oral injury due to blank shot of a rifle. *J Emerg Trauma*

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- Shock. 2017 Apr-Jun;10(2):84-85.
64. Yanagawa Y, Omori K, Kando Y, Kitamura S. Acute type A aortic dissection mimicking hemorrhagic stroke. Sch J Med Case Rep 2017; 5(5):324-326.
 65. Omori K, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Iso T, Ishikawa K, Ohsaka H, Yanagawa Y. Lethal non-occlusive mesenteric ischemia after pelvic fracture due to falling down. Sch J Med Case Rep 2017; 5(5):314-316.
 66. Yoshizawa T, Yanagawa Y, Ishikawa K, Ohsaka H, Jitsuiki K, Omori K, Ito H, Sugita M. An analysis of the factors associated with the outcomes of acute non traumatic aortic disease in patients transported to the emergency department. SAS J. Med., 2017;3:87-92.
 67. Nagasawa H, Ishikawa K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Takahashi R, Iso T, Kondo A, Omori K, Yanagawa Y. Lethal aortic injury after falling while paragliding. Sch J Med Case Rep 2017; 5(6):385-386
 68. Omori K, Jitsuiki K, Majima T, Takeuchi I, Yoshizawa T, Ishikawa K, Ohsaka H, Tambara K, Yanagawa Y. Aortic injury due to paragliding: case report. Int J Sports Phys Ther. 2017 Jun;12(3):390-401.
 69. *Omori K, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ishikawa K, Ohsaka H, Koike H, Yanagawa Y. A report concerning nocturnal landing and take-off training in cases where VIPs suddenly become severely ill. SAS J. Med., 2017;3 (8):223-225.
 70. Nagasawa H, Ishikawa K, Takahashi R, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ohsaka H, Omori K, Yanagawa Y. A case of real spinal cord injury without radiologic abnormality in a pediatric patient with spinal cord concussion. Spinal Cord Ser Cases. 2017 Aug 17;3:17051.
 71. *Jitsuiki K, Ishikawa K, Nagasawa H, Takeuchi I, Iso T, Kondo A, Ohsaka H, Omori K, Yanagawa Y. Clinical profile of patients with cardiac arrest induced by aortic disease. Resuscitation. 2017 Aug 19. pii: S0300-9572(17)30343-X.
 72. *Ohsaka H, Ishikawa K, Omori K, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Yanagawa Y. Management of Mass Casualties Using Doctor Helicopters and Doctor Cars. Air Med J. 2017 Jul - Aug;36(4):203-207.
 73. *Ohsaka H, Omori K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Isoda K, Suwa S, Yanagawa Y. Acute Coronary Syndrome Evacuated by a Helicopter From the Scene. Air Med J. 2017 Jul - Aug;36(4):179-181.
 74. Takeuchi I, Ishikawa K, Nagasawa H, Takahashi R, Jitsuiki K, Iso T, Kondo A, Ohsaka H, Omori K, Yanagawa Y. A case of delayed onset of pneumothorax after a stab injury to the neck. Sch J Med Case Rep 2017; 5(7):448-449.
 75. Kondo A, Omori K, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ohsaka H, Ishikawa K, Yanagawa Y. Multiple purulent arthritis, epidural Abscess, and panophthalmitis Induced by Streptococcus dysgalactiae subsp. Equisimilis infection. Sch J Med Case Rep 2017; 5(7):438-440.
 76. Jitsuiki K, Omori K, Nagasawa H, Takeuchi I, Iso T, Kondo A, Ohsaka H, Ishikawa K, Yanagawa Y. The smaller superior mesenteric vein sign in acute superior mesenteric artery ischemia. Sch J Med Case Rep 2017; 5(6):406-407.
 77. *Yanagawa Y, Kondo A, Ishikawa K, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ohsaka H, Omori K. Kounis syndrome should be excluded when physicians treat patients with anaphylaxis. Ann Allergy Asthma Immunol. 2017 Oct;119(4):392.
 78. *Yanagawa Y, Kondo H, Okawa T, Ochi F. Lessons learned from the total evacuation of a hospital after the 2016 Kumamoto Earthquake. J Emerg Manag. 2017 Jul/Aug;15(4):259-263.
 79. *Nagasawa H, Ishikawa K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Iso T, Kondo A, Ohsaka H, Omori K, Yanagawa Y. The clinical profile of patients with cardiac arrest induced by hemorrhagic stroke. Resuscitation. 2017 Sep 9. pii: S0300-9572(17)30604-4.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

80. Nagasawa H, Omori K, Maeda H, Takeuchi I, Kato S, Iso T, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Ohsaka H, Yanagawa Y. Bite Wounds Caused by a Wild Boar: A Case Report. Wilderness Environ Med. 2017 Aug 31. pii: S1080-6032(17)30191-6.
81. Jitsuiki K, Ishikawa K, Omori KK, Yanagawa Y. A Case of Tetraplegia after Proteus mirabilis Infection. J Emerg Trauma Shock. 2017 Jul-Sep;10(3):163-164.
82. Ishikawa K, Omori K, Ohsaka H, Yanagawa Y. A Pregnant Woman with Pneumomediastinum after Tooth Treatment. J Emerg Trauma Shock. 2017 Jul-Sep;10(3):162-163.
83. *Yanagawa Y, Jitsuiki K. The introduction of an education and training course for recruiting members for a local Disaster Medical Assistance Team in Shizuoka prefecture in 2017. Sch. J. App. Med. Sci., 2017; 5(10E):4151-4154.
84. Omori K, Jitsuiki K, Obinata M, Yoshizawa T, Ishikawa K, Osaka H, Oode Y, Yanagawa Y. A lethal case of thoracic aortic dissection with bilateral patellar subluxation likely due To Ehlers-Danlos syndrome. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):627-629.
85. Omori K, Ohsaka H, Iso T, Kato S, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Kanda A, Yanagawa Y. A case of sudden death due to aortic dissection in a 13-year-old patient. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):630-634.
86. Jitsuiki K, Omori K, Nagasawa H, Takeuchi I, Iso T, Kondo A, Ohsaka H, Ishikawa K, Yanagawa Y. Marchiafava-Bignami disease induced by chronic alcohol intake. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):639-641.
87. Takeuchi I, Nagasawa H, Jitsuiki K, Kondo A, Ohsaka H, Ishikawa K, Omori K, Yanagawa Y. A case of thrombotic microangiopathy induced by suspected bacterial infection. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):642-645.
88. Jitsuiki K, Yanagawa Y, Takahashi R, Itoi A, Matsunami T, Takeuchi I, Kondo A, Mogami A. The Successful Treatment of a Patient with Multiple Injuries, Including Unstable Thoracic Cage and Pelvic Fracture. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):648-651.
89. Kondo A, Nagasawa H, Takeuchi I, Ohsaka H, Jitsuiki K, Omori K, Ishikawa K, Yanagawa Y. Diabetes insipidus induced by sodium-glucose cotransporter-2 inhibitor treatment. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):646-647.
90. Ishikawa K, Omori K, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ohsaka H, Yanagawa Y. Rhinoceros horn: Hidden spread injury. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):613-614.
91. Nomura T, Yanagawa Y, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Kondo A, Ohsaka H, Ishikawa K, Omori K, Sugita M. Risk factors of occurrence of rib fracture or pneumothorax after chest compression for patients with cardiac arrest. Sch. J. App. Med. Sci., 2017; 5(10B):3897-3900.
92. Ohsaka H, Yanagawa Y, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Kondo A, Ishikawa K, Omori K, Wada R. Suffocation Due to Saburra in the Upper Esophagus as a Result of Achalasia. Sch J Med Case Rep 2017; 5(10):688-690.
93. Nagasawa H, Omori K, Takeuchi I, Takahashi R, Jitsuiki K, Kondo A, Ishikawa K, Ohsaka H, Ito H, Yanagawa Y. Accuracy of the prehospital diagnosis of pelvic fractures diagnosed by traumatic PAN scans. Sch. J. App. Med. Sci., 2017; 5(10F):4252-4256.
94. Takeuchi I, Kondo A, Nagasawa H, Jitsuiki K, Ohsaka H, Ishikawa K, Omori K, Yanagawa Y. A Fatal Case of Japanese Spotted Fever. Sch J Med Case Rep 2017; 5(11):801-804.
95. Jitsuiki K, Fujita N, Ishikawa K, Nagasawa H, Takeuchi I, Kondo A, Ohsaka H, Omori K, Yanagawa Y. Tonic Convulsion as the Initial Sign of Acute Cerebral Ischemia in an Adult. Sch J Med Case Rep 2017;

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- 5(11):792-794.
96. Nagasawa H, Kondo A, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ohsaka H, Ishikawa K, Omori K, Yanagawa Y. Usefulness of Gram Stain for Decision-Making Regarding Treatment for Disseminated Nocardiosis. Sch J Med Case Rep 2017; 5(11):786-788.
97. Fujiwara K, Yanagawa Y, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Kondo A, Ohsaka H, Ishikawa K, Omori K, Suwa S. Tetanus diagnosed by clinical symptoms based on its current status in Japan. Sch J Med Case Rep 2017; 5(11):783-785.
98. Ohsaka H, Ishikawa K, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Fujiwara K, Kondo A, Omori K, Yanagawa Y. A Case of Gastric Emphysema Accidentally Found By Computed Tomography for the Evaluation of Trauma. Sch J Med Case Rep 2017; 5(12):850-1.
99. Yanagawa Y, Omori K, Iwasaki H, Kitamura S. An Analysis of Patients with Traumatic Intracranial Hemorrhaging Transported By Private Car. Scholars Journal of Applied Medical Sciences, 2017; 5(11B):4402-4404.
100. Kondo A, Yanagawa Y, Ohsaka H, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Ishikawa K, Omori K, Sugita M. Relationship between the Occurrence of Hyponatremia and the Hormone Levels in the Emergency Department. Journal of Applied Medical Sciences, 2017; 5(12A): 4817-21.
- 101.*Yanagawa Y, Omori K, Ishikawa K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Sato J, Matsumoto H, Tsuchiya M, Osaka H. Difference in First Aid Activity During Mass Casualty Training Based on Having Taken an Educational Course. Disaster Med Public Health Prep. 2017 Nov 20:1-4.
- 102.*Ohsaka H, Hayashi C, Omori K, Yanagawa Y. A Case of Traumatic Vacuum Phenomenon in the Sleeve of a Nerve Root Due to Nerve Root Avulsions. J Emerg Trauma Shock. 2017 Oct-Dec;10(4):216-217.
- 103.*Takeuchi I, Omori K, Nagasawa H, Jitsuiki K, Iso T, Kondo A, Ishikawa K, Ohsaka H, Yanagawa Y. An Analysis of Intoxicated Patients Transported by a Doctor Helicopter. Air Med J. 2018 Jan - Feb;37(1):37-40.
104. Yoshizawa T, Ishikawa K, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Omori K, Ohsaka H, Yanagawa Y. A Fatal Case of Super-super Obesity (BMI >80) in a Patient with a Necrotic Soft Tissue Infection. Intern Med. 2018 Jan 11.
- 105.*Yanagawa Y, Ishikawa K, Takeuchi I, Nagasawa H, Jitsuiki K, Ohsaka H, Omori K. Should Helicopters Transport Patients Who Become Sick after a Chemical, Biological, Radiological, Nuclear, and Explosive Attack? Air Med J in press
- 106.*Ishikawa K, Yanagawa Y, Kato Y, Nozawa Y, Nagasawa H, Takeuchi I, Jitsuiki K, Kondo A, Ohsaka H, Omori K. Management of multiple burned patients with inhalation injuries. Air Med J in press.
- 107.*Nagasawa H, Omori K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ohsaka H, Ishikawa K, Yanagawa Y. A comparison of the outcomes of swerving to avoid deer and colliding with deer in the Izu peninsula. SJAMS-135-2018 in press
- 岩神真一郎**
108. Sekiya M, Yoshimi K, Muraki K, Iwakami S, Togo S, Tamaki S, Dambara T, Takahashi K. Do the respiratory co-morbidities limit the diagnostic usefulness of ultrasound-guided needle aspiration for subpleural lesions? Respiratory Investigation (2015), <http://dx.doi.org/10.1016/j.resinv.2014.12.002>
109. Iwakami S, Fujii M, Tsutsumi T, Sekimoto Y, Jo H, Hara M, Iwakami N, Takahashi K. Autoimmune pulmonary alveolar proteinosis with primary lung cancer in a patient of very advanced years. Geriatr Gerontol Int. 15:

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

666-667, 2015

110. Ishikawa K, Fujii M, Omori K, Iwakami S, Yanagawa Y. Chest pain due to bowel adhesion accompanying diaphragmatic eventration. *Sch J Med Case Rep* 3: 88-91, 2015(14と同じ)
111. Sasaki S, Yoshioka Y, Ko R, Katsura Y, Namba Y, Shukuya T, Kido K, Iwakami S, Tominaga S and Takahashi K. Diagnostic significance of cerebrospinal fluid EGFR mutation analysis for leptomeningeal metastasis in non-small-cell lung cancer patients harboring an active EGFR mutation following gefitinib therapy failure. *Respiratory Investigation* 54: 14-19, 2016
112. Hara M, Iwakami S, Matsumoto N, Miyawaki T, Wada R*, Takahashi K. Carcinomatous pleuritis and pericarditis accompanied by pulmonary tuberculosis. *Respirology Case Reports*, 4 (6), 2016, e00202 doi: 10.1002/rcr2.202
113. Yoshikawa H, Fujii M, Iwakami S, Takeda I, Hayakawa D, Takahashi K. Chylothorax ascribed to chronic heart failure in a woman of very advanced years. *Geriatr Gerontol Int*. 17: 1133-1135, 2017
114. Hara M, Iwakami S, Sasaki S, Fujii M, Takahashi K. A retrospective analysis of prognostic factors of nursing and healthcare-associated pneumonia. *Juntendo Medical Journal* 63: 354-361, 2017

山本拓史

115. Mori K, et al. Validation of effectiveness of keyhole clipping in nonfrail elderly patients with unruptured intracranial aneurysms. *J Neurosurg*, 2017. 127(6): p. 1307-1314.
116. Noda K, et al. Chronic subdural haematoma presenting as freezing of gait. *BMJ Case Rep*, 2017. 2017.
117. Otani N, et al. "Birdlime" technique using TachoSil tissue sealing sheet soaked with fibrin glue for sutureless vessel transposition in microvascular decompression: operative technique and nuances. *J Neurosurg*, 2017: p. 1-8.
118. Teramoto S, et al, Novel Anatomic Classification of Spontaneous Thalamic Hemorrhage Classified by Vascular Territory of Thalamus. *World Neurosurg*, 2017. 104: p. 452-458.
119. Toyooka T, et al. Effect of Fibrin Glue Injection Into the Cavernous Sinus for Hemostasis During Transcavernous Surgery on the Cerebral Venous Draining System. *Oper Neurosurg (Hagerstown)*, 2017. 13(2): p. 224-231.

大林治、最上敦彦、神田章男、諸橋達

120. Kanda A, Kaneko K, Obayashi O, Mogami A A 42-year-old patient presenting with femoral head migration after hemiarthroplasty performed 22 years earlier: a case report. *J. Medical Case Reports* 2015, 9:17 doi:10.1186/1752-1947-9-17.
121. Baba T, Honma Y, Momomura R, Kobayashi H, Matsumoto M, Futamura K, Mogami A, Kanda A, Morohashi I, Kaneko K: New classification focusing on implant designs useful for setting therapeutic strategy for periprosthetic femoral fracture. *Int. Orthop*. 39, 1-5, 2015. I.F.:2.019
122. Naito K, Sugiyama Y, Obata H, Aritomi K, Kaneko K, Obayashi O. Distal radius fracture after proximal row carpectomy. *Int. J Surg Case Rep*. 2015
123. Han C, Naito K, Sugiyama Y, Obayashi O, Kaneko K. Bony mallet finger without epiphyseal plate injury in childhood. *Int J Surg case rep*. 2015;14:172-174
124. Naito K, Sugiyama Y, Igeta Y, Kaneko K, Obayashi O. Thorough debridement and immediate primary wound closure for minimal bite injuries of the upper limbs. *Eur J Trauma Emerg Surg* 2015
125. Naito K, Sugiyama Y, Igeta Y, Kaneko K, Obayashi O. Thorough debridement and immediate primary wound closure for animal bite injuries of the upper limbs. *Eur J Trauma Emerg Surg* 42:213-217, 2016.
126. Naito K, Sugiyama Y, Aritomi K, Nagahama Y, Tomita Y, Obayashi O, Kaneko K. Assessment of dorsal

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- instability of the ulnar head in the distal radioulnar joint: comparison between normal wrist joints and cases of ruptured extensor tendons. *Eur J Orthop Surg Traumatol* 26(2) : 161–166, 2016.
127. Sugiyama Y, Naito K, Obata H, Kinoshita M, Aritomi K, Kaneko K, Obayashi O. Devising for a distal radius fracture fixation focus on the intra-articular volar dislocated fragment. *Ann Med Surg (Lond)*. Apr 14;8: 1–5, 2016.
128. Futamura K, Baba T, Homma Y, Mogami A, Kanda A, Obayashi O, Sato K, Ueda Y, Kurata Y, Tsuji H, Kaneko K. New classification focusing on the relationship between the attachment of the iliofemoral ligament and the course of the fracture line for intertrochanteric fractures. *Injury* 47(8): 1685–1691, 2016.
129. Obayashi O, Obata H, Naito K, Kanda A, Itoi A, Morohashi I, Mogami A, Kaneko K. Recurrence of acute myelogenous leukemia with granulocytic sarcoma-associated tarsal tunnel syndrome in an elderly patient. *Journal of Orthopaedic Science*. . Online publication date: 1–Jul–2016
130. Morohashi I, Iwase H, Kanda A, Sato T, Homma Y, Mogami A, Obayashi O, Kaneko K. Acoustic pattern evaluation during cementless hip arthroplasty surgery may be a new method for predicting complications. *SICOT J*. 2017;3:13. doi: 10.1051/sicotj/2016049. Epub 2017 Feb 13. PMID:28186872
131. Kanda A, Kaneko K, Obayashi O, Mogami A, Morohashi I. Treatment of postoperative sciatic nerve palsy after total hip arthroplasty for postoperative acetabular fracture: A case report. *Ann Med Surg (Lond)*. 2016 Sep 10;11:39–41. doi: 10.1016/j.amsu.2016.08.017. eCollection 2016 Nov. PMID:27672438
132. Komatsu J, Nagura N, Iwase H, Igarashi M, Obayashi O, Nagaoka I, Kaneko K. Effect of intermittent administration of teriparatide on the mechanical and histological changes in bone grafted with β -tricalcium phosphate using a rabbit bone defect model. *Experimental and Therapeutic Medicine* 15, 19–30, 2018. Doi: 10.3892/etm.2017.5424
133. Maeda H, Iwase H, Kanda A, Morohashi I, Kaneko K, Maeda M, Kakinuma Y, Takei Y, Amemiya S, Mitsui K. A study of the blood flow restriction pressure of a tourniquet system to facilitate development of a system that can prevent musculoskeletal complications. *Am J Disaster Med*. 2017 Summer;12(3):139–145. doi: 10.5055/ajdm.2017.0267.
134. Futamura K, Baba T, Mogami A, Morohashi I, Kanda A, Obayashi O, Sato K, Ueda Y, Kurata Y, Tsuji H, Kaneko K. Malreduction of syndesmosis injury associated with malleolar ankle fracture can be avoided using Weber's three indexes in the mortise view. *Injury*. 2017 Apr;48(4):954–959. doi: 10.1016/j.injury.2017.02.004. Epub 2017 Feb 14. PMID:28219637
135. Futamura K, Baba T, Mogami A, Morohashi I, Obayashi O, Iwase H, Kaneko K. A biomechanical study of sacroiliac rod fixation for unstable pelvic ring injuries: verification of the “within ring” concept. *International Orthopaedics*. 2017 Dec 15. doi: 10.1007/s00264-017-3713-x. [Epub ahead of print]

諏訪哲

136. Watanabe H, Morimoto T, Natsuaki M, Furukawa Y, Nakagawa Y, Kadota K, Yamaji K, Ando K, Shizuta S, Shiomi H, Tada T, Tazaki J, Kato Y, Hayano M, Abe M, Tamura T, Shirotani M, Miki S, Matsuda M, Takahashi M, Ishii K, Tanaka M, Aoyama T, Doi O, Hattori R, Kato M, Suwa S, Takizawa A, Takatsu Y, Shinoda E, Eizawa H, Takeda T, Lee JD, Inoko M, Ogawa H, Hamasaki S, Horie M, Nohara R, Kambara H, Fujiwara H, Mitsudo K, Nobuyoshi M, Kita T, Kastrati A, Kimura T. CREDO–Kyoto PCI/CABG registry cohort–2 investigators. Antiplatelet therapy discontinuation and the risk of serious cardiovascular events after coronary stenting: observations from the CREDO–Kyoto Registry Cohort–2. *PLoS One*. 2015 Apr 8;10(4):e0124314. doi: 10.1371/journal.pone.0124314. eCollection 2015.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

137. Watanabe H, Shiomi H, Nakatsuma K, Morimoto T, Taniguchi T, Furukawa Y, Nakagawa Y, Horie M, Kimura T, CREDO-Kyoto AMI investigators, Kimura T, Sakata R, Marui A, Matsuda M, Mitsuoka H, Onoe M, Nakagawa Y, Yamanaka K, Fujiwara H, Takatsu Y, Ohno N, Nohara R, Murakami T, Takeda T, Nobuyoshi M, Iwabuchi M, Hanyu M, Tatami R, Matsushita T, Shirohara M, Nishiwaki N, Kita T, Furukawa Y, Okada Y, Kato H, Eizawa H, Is K, Tanaka M, Nakayama S, Lee JD, Nakano A, Koshiji T, Morioka K, Takizawa A, Shimamoto M, Yamazaki F, Takahashi M, Nishizawa J, Horie M, Takashima H, Tamura T, Aota M, Takahashi M, Tabata T, Tei C, Hamasaki S, Imoto Y, Yamamoto H, Kambara H, Doi O, Matsuda K, Nara M, Mitsudo K, Kadota K, Komiya T, Miki S, Mizoguchi T, Nakajima H, Ogawa H, Sugiyama S, Kawasuji M, Moriyama S, Hattori R, Aoyama T, Araki M, Suwa S, Tanbara K, Kitagawa K, Yamauchi M, Okamoto N, Fujino Y, Tezuka S, Saeki A, Hanazawa M, Sato Y, Hibi C, Sasae H, Takinami E, Uchida Y, Yamamoto Y, Nishida S, Yoshimoto M, Maeda S, Miki I, Minematsu S, Abe M, Shiomi H, Tada T, Tazaki J, Kato Y, Hayano M, Tokushige A, Natsuaki M, Nakajima T. Clinical efficacy of thrombus aspiration on 5-year clinical outcomes in patients with ST-segment elevation acute myocardial infarction undergoing percutaneous coronary intervention. *J Am Heart Assoc*. 2015 Jun 15;4(6):e001962.
138. Ishihara M, Fujino M, Ogawa H, Yasuda S, Noguchi T, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Tsujita K, Nishimura K, Miyamoto Y, J-MINUET investigators. CORRIGENDUM: Clinical Presentation, Management and Outcome of Japanese Patients With Acute Myocardial Infarction in the Troponin Era--Japanese Registry of Acute Myocardial Infarction Diagnosed by Universal Definition (J-MINUET). *Circ J*. 2015;79(7):1643.
139. Ogita M, Miyauchi K, Tsuboi S, Shitara J, Endo H, Wada H, Doi S, Naito R, Konishi H, Dohi T, Kasai T, Tamura H, Okazaki S, Suwa S, Daida H. Impact of Combined C-Reactive Protein and High-Density Lipoprotein Cholesterol Levels on Long-Term Outcomes in Patients With Coronary Artery Disease After a First Percutaneous Coronary Intervention. *Am J Cardiol*. 2015 Oct 1; 116(7):999-1002.
140. Yamaji K, Shiomi H, Morimoto T, Toyota T, Ono K, Furukawa Y, Nakagawa Y, Kadota K, Ando K, Shirai S, Kato M, Takatsu Y, Doi O, Kambara H, Suwa S, Onodera T, Watanabe H, Natsuaki M, Kimura T. Influence of Sex on Long-Term Outcomes After Implantation of Bare-Metal Stent: A Multicenter Report From the Coronary Revascularization Demonstrating Outcome Study-Kyoto (CREDO-Kyoto) Registry Cohort-1. *Circulation*. 2015 Dec 15; 132(24):2323-33.
141. Ogita M, Miyauchi K, Kasai T, Tsuboi S, Wada H, Naito R, Konishi H, Dohi T, Tamura H, Okazaki S, Yanagisawa N, Shimada K, Suwa S, Jiang M, Bujo H, Daida H. Prognostic impact of circulating soluble LR11 on long-term clinical outcomes in patients with coronary artery disease. *Atherosclerosis*. 2016 Jan; 244:216-21.
142. Nakamura M, Muramatsu T, Yokoi H, Okada H, Ochiai M, Suwa S, Hozawa H, Kawai K, Awata M, Mukawa H, Fujita H, Shiode N, Asano R, Tsukamoto Y, Yamada T, Yasumura Y, Ohira H, Miyamoto A, Takashima H, Ogawa T, Ito S, Matsuyama Y, Nanto S, J-DESsERT Investigators. Three-year follow-up outcomes of SES and PES in a randomized controlled study stratified by the presence of diabetes mellitus: J-DEsSERT trial. *Int J Cardiol*. 2016 Apr 1;208:4-12.
143. Nakatsuma K, Shiomi H, Morimoto T, Furukawa Y, Nakagawa Y, Ando K, Kadota K, Yamamoto T, Suwa S, Horie M, Kimura T, CREDO-Kyoto AMI investigators. Inter-Facility Transfer vs. Direct Admission of Patients With ST-Segment Elevation Acute Myocardial Infarction Undergoing Primary Percutaneous Coronary Intervention. *Circ J*. 2016 Jul 25;80(8):1764-72.
144. Wada H, Ogita M, Miyauchi K, Tsuboi S, Konishi H, Shitara J, Kunimoto M, Sonoda T, Iso T, Ebina H, Aoki E,

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- Kitamura K, Tamura H, Suwa S, Daida H. Contemporary sex differences among patients with acute coronary syndrome treated by emergency percutaneous coronary intervention. *Cardiovasc Interv Ther*. 2016 Aug 8.
145. Onda T, Inoue K, Suwa S, Nishizaki Y, Kasai T, Kimura Y, Fukuda K, Okai I, Fujiwara Y, Matsuoka J, Sumiyoshi M, Daida H. Reevaluation of cardiac risk scores and multiple biomarkers for the prediction of first major cardiovascular events and death in the drug-eluting stent era. *Int J Cardiol*. 2016 Sep 15;219:180–5. doi: 10.1016/j.ijcard.2016.06.014.
146. Iijima R, Nakamura M, Matsuyama Y, Muramatsu T, Yokoi H, Hara H, Okada H, Ochiai M, Suwa S, Hozawa H, Kawai K, Awata M, Mukawa H, Fujita H, Nanto S, J-DESSERT. Effect of Optimal Medical Therapy Before Procedures on Outcomes in Coronary Patients Treated With Drug-Eluting Stents. *Am J Cardiol*. 2016 Sep 15;118(6):790–6. doi: 10.1016/j.amjcard.2016.06.050.
147. Natsuaki M, Morimoto T, Furukawa Y, Nakagawa Y, Kadota K, Ando K, Shiomi H, Toyota T, Watanabe H, Ono K, Shizuta S, Tamura T, Inoko M, Inada T, Shirofumi M, Matsuda M, Aoyama T, Onodera T, Suwa S, Takeda T, Inoue K, Kimura T, CREDO-Kyoto. PCI/CABG registry cohort-2 investigators.: Short versus prolonged dual antiplatelet therapy duration after bare-metal stent implantation: 2-month landmark analysis from the CREDO-Kyoto registry cohort-2. *Cardiovasc Interv Ther*. 2016 Sep 19.
148. Fujino M, Ishihara M, Ogawa H, Nakao K, Yasuda S, Noguchi T, Ozaki Y, Kimura K, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Ako J, Nakai M, Nishimura K, Miyamoto Y, J-MINUET Investigators. Impact of symptom presentation on in-hospital outcomes in patients with acute myocardial infarction. *J Cardiol*. 2016 Nov 14. pii: S0914-5087(16)30240-4. doi: 10.1016/j.jjcc.2016.10.002.
149. Wada H, Ogita M, Miyauchi K, Suwa S, Yamano M, Daida H. Case report: Fulminant myocarditis associated with overwhelming pneumococcal infection. *Int J Cardiol*. 2016 Nov 15;223:706–707. doi: 10.1016/j.ijcard.2016.08.282.
150. Konishi H, Miyauchi K, Shitara J, Endo H, Wada H, Doi S, Naito R, Tsuboi S, Ogita M, Dohi T, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Impact of Lipoprotein(a) on Long-term Outcomes in Patients with Diabetes Mellitus Who Underwent Percutaneous Coronary Intervention. *Am J Cardiol*. 2016 Dec 15;118(12):1781–1785. doi: 10.1016/j.amjcard.2016.08.067.
151. Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Shitara J, Endo H, Doi S, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Hassan A, Okazaki S, Isoda K, Shimada K, Suwa S, Daida H. Preprocedural High-Sensitivity C-Reactive Protein Predicts Long-Term Outcome of Percutaneous Coronary Intervention. *Circ J*. 2016 Dec 22;81(1):90–95. doi: 10.1253/circj.CJ-16-0790.
152. Kuramitsu S, Miyauchi K, Yokoi H, Suwa S, Nishizaki Y, Yokoyama T, Nojiri S, Iwabuchi M, Shirai S, Ando K, Okazaki S, Tamura H, Watada H, Daida H. Effect of sitagliptin on plaque changes in coronary artery following acute coronary syndrome in diabetic patients: The ESPECIAL-ACS study. *J Cardiol*. 2017 Jan;69(1):369–376. doi: 10.1016/j.jjcc.2016.08.011.
153. Kuji S, Kosuge M, Kimura K, Nakao K, Ozaki Y, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Nishimura K, Miyamoto Y, Ishihara M; J-MINUET Investigators. Impact of Acute Kidney Injury on In-Hospital Outcomes of Patients With Acute Myocardial Infarction – Results From the Japanese Registry of Acute Myocardial Infarction Diagnosed by Universal Definition (J-MINUET) Substudy. *Circ J*. 2017 Feb 9. doi: 10.1253/circj.CJ-16-1094.
154. Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Shitara J, Endo H, Doi S, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Impact of serum albumin levels on long-term outcomes in patients undergoing

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

percutaneous coronary intervention. Heart Vessels. 2017 Apr 20

155. Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Doi S, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Independent and Combined Effects of Serum Albumin and C-Reactive Protein on Long-Term Outcomes of Patients Undergoing Percutaneous Coronary Intervention. Circ J. 2017 Aug 25;81(9):1293-1300

156. Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Doi S, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Hassan A, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Prognostic Impact of the Geriatric Nutritional Risk Index on Long-Term Outcomes in Patients Who Underwent Percutaneous Coronary Intervention. Am J Cardiol. 2017 Jun 1;119(11):1740-1745

157. Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Shitara J, Endo H, Doi S, Konishi H, Naito R, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Hassan A, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Pre-procedural neutrophil-to-lymphocyte ratio and long-term cardiac outcomes after percutaneous coronary intervention for stable coronary artery disease. Atherosclerosis. 2017 Oct; 265:35-40

158. Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Doi S, Konishi H, Naito R, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Prognostic impact of nutritional status assessed by the Controlling Nutritional Status score in patients with stable coronary artery disease undergoing percutaneous coronary intervention. Clin Res Cardiol. 2017 Nov;106(11):875-883

159. Suwa S, Ogita M, Miyauchi K, Sonoda T, Konishi H, Tsuboi S, Wada H, Naito R, Dohi T, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Daida H. Impact of Lipoprotein (a) on Long-Term Outcomes in Patients with Coronary Artery Disease Treated with Statin After a First Percutaneous Coronary Intervention. J Atheroscler Thromb. 2017 Nov 1;24(11):1125-1131

160. Wada H, Ogita M, Miyauchi K, Tsuboi S, Konishi H, Shitara J, Kunimoto M, Sonoda T, Iso T, Ebina H, Aoki E, Kitamura K, Tamura H, Suwa S, Daida H. Contemporary sex differences among patients with acute coronary syndrome treated by emergency percutaneous coronary intervention. Cardiovasc Interv Ther. 2017 Oct;32(4):333-340

161. Ohsaka H, Omori K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Ishikawa K, Isoda K, Suwa S, Yanagawa Y. Acute Coronary Syndrome Evacuated by a Helicopter From the Scene. Air Medical Journal, 2017; 36: 179-181 (78 と同じ)

162. Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Shitara J, Endo H, Doi S, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Hassan A, Okazaki S, Isoda K, Shimada K, Suwa S, Daida H. Preprocedural High-Sensitivity C-Reactive Protein Predicts Long-Term Outcome of Percutaneous Coronary Intervention. Circ J, 2017; 81:90-95

163. Fujino M, Ishihara M, Ogawa H, Nakao K, Yasuda S, Noguchi T, Ozaki Y, Kimura K, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Ako J, Nakai M, Nishimura K, Miyamoto Y, J-MINUET Investigators. Impact of symptom presentation on in-hospital outcomes in patients with acute myocardial infarction. J Cardiol. 2017;70:29-34

164. Kuji S, Kosuge M, Kimura K, Nakao K, Ozaki Y, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Nishimura K, Miyamoto Y, Ishihara M, J-MINUET Investigators. Impact of acute kidney injury on in-hospital outcomes of patients with acute myocardial infarction-Results from the J-MINUET substudy. Circ J. 2017;81:733-739

165. Ishihara M, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Fujino M, Yasuda S, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Hirata K, Tanabe K, Shibata Y, Owa M, Tsujita K, Funayama H, Kokubu N, Kozuma K, Tobaru T, Oshima S, Nakai M, Nishimura K,

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- Miyamoto Y, Ogawa H, J-MINUET Investigators. Long-term outcomes of non-ST-elevation myocardial infarction without creatine kinase elevation-The J-MINUET study. *Cir J.* 2017;81:958-965
166. Ogita M, Suwa S, Ebina H, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Hirata K, Tanabe K, Shibata Y, Owa M, Hokimoto S, Funayama H, Kokubo N, Kozuma K, Uemura S, Tobaru T, Saku K, Oshima S, Nishimura K, Miyamoto Y, Ishihara M, J-MINUET investigators. Off-hours presentation does not affect in-hospital mortality of Japanese patients with acute myocardial infarction: J-MINUET substudy. *J Cardiol.* 2017;70:553-558
167. Nishida K, Nakatsuma K, Shiomi H, Natsuaki M, Kawai K, Morimoto T, Kozuma K, Igarashi K, Kadota K, Tanabe K, Morino Y, Hibi K, Akasaka T, Abe M, Suwa S, Muramatsu T, Kobayashi M, Dai K, Nakao K, Tarutani Y, Fujii K, Kimura T, RESET and NEXT investigators. Second-Generation vs. First-Generation Drug-Eluting Stents in Patients With Calcified Coronary Lesions — Pooled Analysis From the RESET and NEXT Trials — *Circ J.* 2017
168. Shiozaki M, Inoue K, Suwa S, Lee CC, Chikata Y, Ishiura J, Kimura Y, Fukuda K, Tamura H, Fujiwara Y, Sumiyoshi M, Daida H. Utility of the 0-hour/1-hour high-sensitivity cardiac troponin T algorithm in Asian patients with suspected non-ST elevation myocardial infarction. *Int J Cardiol.* 2017;249:32-35
169. Hashimoto T, Ako J, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Uematsu M, Hirata K, Tanabe K, Shibata Y, Owa M, Tsujita K, Funayama H, Kokubo N, Kozuma K, Uemura S, Tobaru T, Saku K, Oshima S, Nakai M, Nishimura K, Miyamoto Y, Ogawa H, Ishihara M, J-MINUET investigators. A low eicosapentaenoic acid/arachidonic acid ratio is associated with in-hospital fatal arrhythmic events in patients with acute myocardial infarction: a J-MINUET substudy. *Heart Vessels.* 2017 [Epub ahead of print]
- 佐藤浩一、前川博、折田創**
170. Tokuda S, Orita H, Ito T, Sakurada M, Kushida T, Maekawa M, Yamano M, Wada R, Sato K. Hernia of the broad ligament of the uterus. *International Journal of Case Reports and Images*, Vol. 7 No.4, April 2016.
171. Hiroshi M, Tomoaki I, Kushida T, Orita H, Sakurada M, Wada R, Sato K. Clinicopathological significance of fatty acid synthase expression in extrahepatic cholangiocarcinoma. *Oncology and Cancer Case Reports* 2016, 2:2
172. Mizuguchi K, Maekawa H, Sakurada M, Orita H, Kushida T, Senuma K, Ito T, Matsuzawa H, Watanabe S, Tokuda S, Ueda S, Wada R, Sato S. A Case Report of Carbohydrate Antigen 19-9 Producing Advanced Gastric Cancer. *Cancer and Clinical Oncology*; Vol.5, No.2; 2016 ISSN 1927-4858,
173. Sakuraba S, Orita H, Ito T, Kushida T, Sakurada M, Maekawa M, Yamano M, Wada R, Sato K. A Case of Rectal Mucosa-Associated Lymphoid Tissue (MALT) Lymphoma Treated Twice with Antibiotic Therapy for *Helicobacter pylori*. *Journal of Gastrointestinal Cancer & Stromal Tumors*, 2016,1:1
174. Ito T, Kushida T, Sakurada M, Maekawa H, Orita H, Mizuguchi K, Sato K. Two cases of laparoscopic simultaneous resection of colorectal cancer and synchronous liver metastases in elderly patients : *international Journal of Surgery Case Reports* 2016 ; 7: 27
175. Tsuchiya Y, Ito T, Sakurada M, Kushida T, Orita H, Maekawa H, Yamano M, Wada R, Sato K. A case of giant leiomyosarcoma of the inferior vena cava with liver metastase : A surgical challenge : *Journal of Case Reports and Images in Surgery*, Vol 2 , 2016; 9:2
176. Iba T, Sasaki T, Ohshima K, Sato K, Magaoka I, Thachil J. The Comparison of the Protective Effects of α - and β -Antithrombin against Vascular Endothelial Cell Damage Induced by Histone in Vitro.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

Thrombosis Hemostasis Open 2017;1:e3-e10.

177. Iba T, Marcello Nisio D, Thachil J, Wada H, Asakura H, Sato K, Sato D. A Proposal of the Modification of Japanese Society on Thrombosis and Hemostasis (JSTH) Disseminated Intravascular Coagulation (DIC) Diagnostic Criteria for Sepsis-Associated DIC. Clinical and Applied Thrombosis/ Hemostasis, 1-7, 2017
178. Iba T, Hagiwara A, Saitoh D, Anan H, Ueki Y, Sato K, Gando S. Effects of combination therapy using antithrombin and thrombomodulin for sepsis-associated disseminated intravascular coagulation. Annals of Intensive Care (2017) 7: 110
179. Iba T, Hirota T, Sato K, Nagaoka I. Protective effect of a newly developed fucose-deficient recombinant antithrombin against histone-induced endothelial damage. Int J Hematol. 2018 May;107(5):528-534.
180. Ishimine M, Lee H, Nakaoka H, Orita H, Kobayashi T, Inoue I, Sato K, Yokomizo T. The relationship between TP53 gene Status and carboxylesterase 2 expression in human colorectal cancer. Dis Markers. 2018 Jan 31; 2018: 5280736.
181. Orita H, Tokuda S, Sakuraba S, Kushida K, Sakurada M, Maekawa H, Koshiba S, Sato K. Maintenance therapy for elder colorectal cancer patients with Bevacizumab: single center experience, Journal of cancer research, in press
182. Tokuda S, Orita H, Sakuraba S, Kushida K, Sakurada M, Maekawa H, Koshiba S, Sato K. Analysis of KRAS Gene Mutations by using of Circulating Tumor DNA Journal of cancer research, in press
183. Maekawa H, Shioya S, Orita H, Sakurada M, Kushida T, Sato K. Changes of plasma levels of adipocytokines during 120 hours of fasting after endoscopic treatment. J Nutr Disorders Ther 7:3, 2017

寒竹正人

- 184.* Kantake M, et al. Postnatal relative adrenal insufficiency results in methylation of the glucocorticoid receptor gene in preterm infants: a retrospective cohort study. Clinical Epigenetics 2018 *in press*.

土至田宏、松崎有修

- 185.* Toride A, Toshida H, Matsui A, Matsuzaki Y, Honda R, Ohta T, Murakami A. Visual outcome after emergency surgery for open globe eye injury in Japan. Clin Ophthalmol. 2016;10:1731-6.
186. Hayashi Y, Toshida H, Matsuzaki Y, Matsui A, Ohta T. Persistent corneal epithelial defect responding to rebamipide ophthalmic solution in a patient with diabetes. Int Med Case Rep J. ;9:113-6, 2016.
187. Toshida H, Funaki T, Ono K, Tabuchi N, Watanabe S, Seki T, Otake H, Kato T, Ebihara N, Murakami A. Efficacy and safety of retinol palmitate ophthalmic solution in the treatment of dry eye: a Japanese phase 2 clinical trial. Drug Design, Development and Therapy. 11 1871-1879, 2017.
188. Tabuchi N, Toshida H, Koike D, Odaka A, Suto C, Ohta T, Murakami A. Effect of Retinol Palmitate on Corneal and Conjunctival Mucin Gene Expression in a Rat Dry Eye Model After Injury. J Ocul Pharmacol Ther. 2017 Jan/Feb;33(1):24-33.

【和文論文】

柳川洋一、大坂裕通、大森一彦、石川浩平、三島健太郎、大出靖将

189. 前田浩行、大坂裕通、大森一彦、石川浩平、久保田直純、大林治、柳川洋一. 交通外傷により大動脈解離 (Stanford type B)を合併した多発外傷の一例. 日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:44-6.
190. 柳川洋一、吉田千紗、相原恒一郎、平野一興、永山正隆、竹本正明、山田京志、渡邊心、射場敏明. 家庭用洗剤使用後に咳喘息様発作をきたした一例. 日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:55-6.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

191. 柳川洋一、上野昌輝、下村巖、大森一彦、伊藤浩嗣。歩行失行で多発性脳転移腫瘍が判明した1例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:52-54.
192. 大坂裕通、福里晋、小日向麻里子、三島健太郎、石川浩平、大森一彦、大出靖将、柳川洋一。胸椎骨折に対する軟性コルセット装着が誘因となった上腸間膜動脈症候群の一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:57-59.
193. 柳川洋一。スイセン誤食による食中毒の一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:24-5.
194. 鷺巣佳奈、下山勝仁、堀口愛、大森一彦、柳川洋一。多断面再構成を用いた CT 画像で容易に診断が可能であった環椎後頭関節脱臼の一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:17-20.
195. 大森一彦、田代薫、小日向麻里子、大坂裕通、三島健太郎、石川浩平、大出靖将、柳川洋一。大酒家突然死症候群が疑われた一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:60-62.
196. 藤田尚人、大森一彦、浅井陽、伊藤浩嗣、柳川洋一。自転車ハンドルバー損傷による小児肝破裂の1例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2015;11:26-28.
197. 柳川洋一、大森一彦、石川浩平、大坂裕通、大出靖将、清水忠典、藤井佑二。静岡県東部ドクターヘリによる東京都大島町からの患者搬送。日本航空医療学会雑誌 2015;16(1):9-11.
198. 石川浩平、井上貴昭、角由佳、松田繁、岡本健、田中裕。電撃性紫斑病に対麻痺を合併した肺炎球菌感染症の1例。日救急医学会誌。2015; 26: 565-70.
199. 柳川洋一、今村友典、今関信夫。喀血を伴い心停止に至った胸部大動脈気管支瘻の1例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2016; 12:37-9.
200. 吉澤俊彦、日域佳、石川浩平、大坂裕通、大出靖将、柳川洋一。特発性大量心嚢液貯留を認めた一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2016; 12:47-9.
201. 柳川洋一、大森一彦、戸塚剛彰、岩崎浩司、北村惣一郎。脳動脈瘤切迫破裂徴候：眼瞼下垂で救急搬送された一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2016;12:50-2.
202. 大坂裕通、日域佳、吉澤俊彦、大森一彦、石川浩平、大出靖将、山本拓史、市川訓基、小池道明、柳川洋一。脳内出血発症に血管閉塞機転の関与が示唆された急性リンパ性白血病の一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2016; 12:58-61.
203. 栗栖美由希、石神智行、中川彰彦、柳川洋一。瞬仮性嚢胞内出血、大腸穿破に対して塞栓術で治癒した一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2016; 12:40-2.
204. 吉澤俊彦、日域佳、竹内郁人、小畑宏介、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、大出靖将、柳川洋一。特発性後腹膜血腫の一例。日本救急医学会中部地方会雑誌 2016; 12:47-9.
205. 柳川洋一、吉澤俊彦、日域佳、竹内郁人、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、大出靖将。鼠径部ヘルニアによる心窩部痛で医療機関に受診し、二度も見逃されていた一例：鼠径部診察の重要性。日本救急医学会中部地方会雑誌 2016; 12:53-4.
206. 柳川洋一。目で見るとトレーニング。Medicina 2016;53:558-561.
207. 石川浩平、竹内郁人、日域佳、近藤彰彦、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一。過疎地域における多数傷病者発生時の分散搬送の重要性。日本集団災害医学会雑誌 2017;22(2):232-7.

岩神真一郎

208. 藤井充弘、岩神真一郎、原宗央、石渡俊次、瀬山邦明、高橋和久。急速に増大した肺嚢胞切除後、長期間肺機能の改善を維持できた慢性閉塞性肺疾患の1例。日本呼吸器学会雑誌 4: 166-170、2015

田中利隆

209. 市山卓彦、田中利隆、佐藤杏奈、植木典和、平山貴士、山口貴史、菅沼牧知子、田中沙織、五十嵐優子、田口雄史、三橋直樹。超音波検査が診断に有用であった非癒痕子宮に発症した子宮破裂の2例。超音波医学 43; 587-592: 2016

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

210. 石田ゆり、田中利隆、北村絵里、篠原三津子、高橋奈々子、村田佳菜子、菅直子、矢田昌太郎、宮国泰香、山本祐華、金田容秀、三橋直樹. 超音波所見から子宮頸管延長および嵌頓子宮と診断した子宮筋腫合併妊娠の一例. 産婦人科手術 in 27; 55-61: 2016
211. 吉田恵美子、田中利隆、藤原里紗、石田ゆり、大野基晴、菅沼牧知子、田中沙織、宮国泰香、五十嵐優子、田口雄史、三橋直樹. 日本周産期新生児学会誌 52; 1144-1149: 2016
- 大林治、最上敦彦、神田章男、諸橋達**
212. 諸橋達、最上敦彦、神田章男、大林治、金子和夫. 人工股関節再置換術後に生じた腸腰筋インピンジメントに対して腸腰筋切離を行った1例. Hip Joint 41、850-853、2015.
213. 小畑宏介、大林治、最上敦彦、神田章男、金子和夫. 小児両側大腿骨骨幹部骨折に対する治療経験—Kirschner 鋼線を用いた髓内固定法を施行した2症例—骨折 37、738-744、2015.
214. 大林治、前田浩行、最上敦彦、小林敦郎、岩瀬秀明、金子和夫. TKA 術前と術後1年での重心動揺計による% COP 移動可能距離の検討. 臨床バイオメカニクス 37、295-300、2016.
215. 諸橋達、最上敦彦、神田章男、大林治、金子和夫. ショートステム Optimys の術中骨折および術後沈み込み症例から考える固定様式と応力集中部位の検討. Hip Joint 42、734-738、2016.
216. 武田純、最上敦彦、和田知樹、大林治、金子和夫. SCORPIO[®] NEO を用いた鎖骨遠位端骨折の治療経験. 骨折 38、396-600、2016.
217. 前田浩行、大林治、金子和夫、岩瀬秀明、神田章男、諸橋達、雨宮将太、武井裕輔、三井和幸、前田睦浩. EHD 現象を利用した新しいターニケットの開発—合併症がおきない至適圧力の検討—臨床バイオメカニクス 38、389-392、2017.

<図書>

岩神真一郎

1. 岩神直子、岩神真一郎. 肺分画症 高橋和久、児玉裕三編. EBM を活かす 呼吸器診療. メジカルビュー社、東京、394-398、2015

田中利隆

2. 田中利隆. 【助産師のための産婦人科診療ガイドライン産科編 2017 いいとこ取り 何が変わった? どこがポイント?】新規追加 CQ「選択的帝王切開時に注意することは?」ペリネイタルケア メディカ出版 36; 548-552: 2017
3. 田中利隆. 【「産科診療ガイドライン産科編 2017」の新規項目と改正点】CQ416(新規)選択的帝王切開時に注意することは? 臨床産科婦人科 医学書院 71; 744-748: 2017
4. 田中利隆、三橋直樹. 【子どもの生活習慣病-スクリーニングと早期予防】生活習慣病のスクリーニングと早期予防 周産期からの生活習慣病を予防するにはどうしたらよいか. 小児内科 東京医学社 49; 1459-1463: 2017

山本拓史

5. 山本拓史. 慢性硬膜下血腫と内科的疾患—特に抗血小板薬・抗凝固薬とその対策—慢性硬膜下血腫の診断・治療・手術, メディカ出版, 大阪 P36-42, 2017
6. 山本拓史. 内視鏡を用いた多房性慢性硬膜下血腫の治療 慢性硬膜下血腫の診断・治療・手術, メディカ出版, 大阪 P144-42152, 2017
7. 山本拓史. 猟銃(散弾銃)による頭部外傷 慢性硬膜下血腫の診断・治療・手術, メディカ出版, 大阪 P209-218, 2017

寒竹正人

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

8. * Kantake M. Stress, HPA Dysfunction, Inflammation, and Psychomotor Disability in Preterm Birth Infants. *Advances in medicine and Biology*. 115; pp13-22: 2017.
9. *寒竹正人. 専門領域とステロイド 新生児疾患; 今ここでステロイドを再考する—common disease から専門領域まで— 小児科診療 診断と治療社 東京、491-495, 2017

土至田宏

10. 土至田宏. コンタクトレンズによる角膜障害. 今日の眼疾患治療指針. p341-342.医学書院, 2016.
11. 土至田宏. 薬剤使用のイロハ. 眼科疾患 最新の治療 2016-2018. p69-78, 南江堂, 2016.
12. 土至田宏. 合併する全身疾患. どう診てどう治す? 円錐角膜. 島崎潤・前田直之・加藤直子編集. メジカルビュー社 p12-13, 2017

<学会発表>

【国際学会】

柳川洋一、大坂裕通、大森一彦、石川浩平、三島健太郎、大出靖将

1. Yanagawa Y, Ishikawa K, Omori K, Osaka H, Oode Y, Kubota A, Sakuraba K. A field survey of spinal cord injury in bodyboarders. The Global Spine Congress 2015 in Buenos Aires/Argentina.
2. Ishikawa K, Yanagawa Y, Oode Y, Sumi Y, Inoue Y, Tanaka H. 8th Asian Conference on Emergency Medicine 2015 Taiwan
3. Yanagawa Y. Coordinated and combined use of military and civilian resources for large-scale natural disasters in Japan. Disaster Response Workshop. 11th Asian Congress of Neurological Surgeons, Surabaya, Indonesia 2016.
4. Yanagawa Y. Coordinated and combined use of military and civilian resources for large-scale natural disasters in Japan. Neurotrauma section 2 11th Asian Congress of Neurological Surgeons, Surabaya, Indonesia 2016.
5. Yanagawa Y, Ohsaka H, Ishikawa K, Jitsuiki K, Yoshizawa T, Omori K. Factors affecting difficulty in extubation after initial successful resuscitation in cardiopulmonary arrest patients. EUSEM 2016 in Vienna (Austria) Congress Programme p55
6. Ishikawa K, Jitusiki K, Yoshizawa T, Omori K, Ohsaka H, Oode Y, Yanagawa Y. A case of spinal cord concussion induced by neck massage. The Annual World Congress of Neurotalk May 20-22, 2016 in Beijing, China.
7. Yanagawa Y, Omori K, Ishiwaka K, Yoshizawa T, Jitsuiki K, Takeuchi I, Osaka H. Analysis of patients with decompression illness transported via physician-staffed emergency helicopters. 14th international symposium on maritime health, Manila Phillipine March 22-24, 2017.
8. Yanagawa Y, Ishikawa K, Nagasawa H, Takeuchi I, Kato S, Jitsuiki K, Iso T, Yoshizawa T, Ohsaka H, Omori K. Risk factors for the occurrence of traumatic vacuum phenomenon after chest compression for patients with cardiac arrest. 2nd International Conference on: Applied Physics, System Science and Computers Dubrovnik, Croatia, September 27-29, 2017
9. Yanagawa Y. Chairman of section of clinical application, 2nd International Conference on: Applied Physics, System Science and Computers Dubrovnik, Croatia, September 27, 2017
10. Ishikawa K, Takeuchi I, Jitsuiki K, Kondo A, Omori K, Osaka H, Yanagawa Y. A Comparison between evacuation from the scene and interhospital transportation using a helicopter for subarachnoid hemorrhage. Air Medical Transport Conference (AMTC) 2017 Oct 16 - 18, 2017, Fort Worth, Texas

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

岩神真一郎

11. Miyawaki T, Yagishita S, Ko R, Suzuki Y, Matsumoto N, Hara M, Iwakami N, Fujii M, Iwakami S and Takahashi K. The impact of initial symptoms on survival time in advanced non-small cell lung cancer. *Ann Oncol* (2016) 27 (suppl_9): mdw594.043
12. Hara M, Iwakami S, Watanabe D, Toriya Y, Iwakami N, Miyawaki T, Yoshida T, Sumiyoshi I, Takahashi K. Early intervention of pulmonary rehabilitation for elderly patients with acute respiratory failure or exacerbation of chronic respiratory disease; a retrospective analysis. *Respirology* (2017) 22 (suppl.3): 88-278

田中利隆

13. Sukegawa S, Yamamoto Y, Sato K, Tanaka S, Tanaka T, Mitsuhashi N. Estimation of the prognosis for fetal critical aortic stenosis with atrium area and the Doppler patterns in pulmonary veins. ISUOG 27th World Congress on Ultrasound in Obstetrics and Gynecology. Vienna Austria, September 16-19, 2017

大林治、最上敦彦、神田章男、諸橋達

14. Maeda H, Maeda M, Iwase H, Morohashi I, Kanda A, Kaneko K, Kakinuma Y, Takei Y, Mitsui K. Investigation of Optimal Pressure and Evaluation of Tourniquet Avascularization to Prevent Motor complication -Development of a new Device. 38th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, Aug., 16-20, 2016. (Florida, USA)

諏訪哲

15. Shitara J, Wada H, Iso T, Sonoda T, Kunimoto M, Murata A, Endo H, Tsuboi S, Ogita M, Suwa S. A Case of Recurrent SFA Stent Occlusion. C3 2015(Complex Cardiovascular Catheter Therapeutics: Advanced Endovascular and Coronary Intervention Global Summit) Orlando, FL, USA 6.14-18, 2015
16. Wada H, Katsumi K, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Tamura H, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Gender differences in 5-year clinical outcomes following percutaneous coronary intervention. ESC Congress 2015, 29 August-02 September 2015, London
17. Ebina H, Suwa S, Mori M, Tanaka N, Hokama Y, Fukutomi M, Hashiba K, Fukuhara R, Ueki Y, Matsuura H, Matoba T, Tachibana E, Yonemoto N, Nagao K. Impact of onset to balloon time and short-term mortality in patients with cardiogenic shock complicating acute coronary syndrome treated with primary percutaneous coronary intervention: from JCS Shock Registry. American College of Cardiology 65th Annual Scientific Session, Chicago, USA, April 2-April 4, 2016
18. Shitara J, Ogita M, Miyauchi K, Wada H, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Dohi T, Kasai T, Tamura H, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Association between sustained increase of c-reactive protein (CRP) and long-term mortality in patients with coronary artery disease treated with percutaneous coronary intervention European Society of Cardiology 2016, Rome Italy, 2016/8/30
19. Shitara J, Tsuboi S, Miyauchi K, Ogita M, Kasai T, Dohi T, Konishi H, Naito R, Doi S, Wada H, Endo H, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Impact of red cell distribution width on long-term mortality in patients treated with statin after percutaneous coronary intervention American Heart Association's Scientific Sessions 2016, New Orleans, USA, 2016/11/14
20. Takahashi N, Wada H, Dohi T, Miyauchi K, Doi S, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Combined Serum Albumin and C-reactive Protein Levels Predict Long-term Outcomes in Patients with Coronary Artery Disease after a First Percutaneous Coronary Intervention American College of Cardiology's 66th Annual Scientific Session, March 17-19, 2017, Washington, DC, USA.
21. Sonoda T, Ogita M, Matoba T, Mohri M, Tanaka N, Hokama Y, Fukutomi M, Hashiba K, Fukuhara R, Ueki Y,

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- Matsuura H, Suwa S, Tachibana E, Yonemoto N, Nagao K. Association Between Presentation Time and Short-Term Mortality in Patients With Cardiogenic Shock Complicating Acute Coronary Syndrome: From JCS Shock Registry. American College of Cardiology's 66th Annual Scientific Session, March 17-19, 2017, Washington, DC, USA.
22. T. Sonoda, H. Wada, T. Dohi, K. Miyauchi, S. Doi, H. Konishi, R. Naito, S. Tsuboi, M. Ogita, T. Kasai, S. Okazaki, K. Isoda, S. Suwa, H. Daida. Preprocedural neutrophil-lymphocyte ratio and long-term cardiac outcomes after percutaneous coronary intervention for stable coronary artery disease. ESC Congress 2017, 27 Aug, 2017, Barcelona.
23. Takahashi N, Ogita M, Miyauchi K, Wada H, Naito R, Konishi H, Tsuboi S, Dohi T, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, H. Bujo, Daida H. Impact of LR11 as residual risk on long term clinical outcomes in patients with coronary artery disease treated with statin after first percutaneous coronary intervention. ESC Congress 2017, 29 Aug, 2017, Barcelona.
24. Ebina H, Ogita M, Suwa S, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Mano T, Hirata K, Tanabe K, Shibata Y, Owa M, Tsujita K, Funayama H, Kokubu N, Kozuma K, Uemura S, Toubaru T, Saku K, Oshima S, Nishimura K, Miyamoto Y, Ogawa H, and Ishihara M on behalf of J-MINUET investigators. Off-hours presentation does not affect long-term clinical outcomes of Japanese patients with acute myocardial infarction: J-MINUET Substudy AHA Scientific Sessions 2017, Anaheim, CA, November 12, 2017
25. Takeuchi M, Wada H, Dohi T, Tsuboi S, Ogita M, Kasai T, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Miyauchi K, Daida H. Relationship Between the Prognostic Nutritional Index and Long-Term Clinical Outcomes in Patients with Stable Coronary Artery Disease American College of Cardiology 67th Annual Scientific Sessions & Expo, March 12, 2018 Orlando, USA.
26. Takahashi N, Ogita M, Nakao K, Ozaki Y, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Suwa S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Shimizu W, Saito Y, Hirohata A, Morita Y, Inoue T, Okamura A, Mano T, Hirata K, Tanabe K, Nishimura K, Miyamoto Y, Ogawa H, Ishihara M. Prognostic Impact of B-Type Natriuretic Peptid on Long-Term Clinical Outcomes in Patients with Non-ST-Segment Elevation Acute Myocardial Infarction Without Creatine Kinase Elevation: Japanese Registry of Acute Myocardial Infarction Diagnosed by Universal Definition(J-MINUET) Substudy American College of Cardiology 67th Annual Scientific Sessions & Expo, March 12, 2018 Orlando, USA.

折田創

27. Orita H. The efficacy of Gasdermin gene family for tumor marker in colorectal cancer Biomarkers & Clinical Research 2017, Baltimore USA, 18th-20th Oct, 2017

土至田宏

28. Toshida H, Ohta T, Suto C, Shinji K, Karasawa M, Murakami A. Effect of 2% rebamipide ophthalmic suspension in dry eye rabbit model. 視覚と眼科学研究協会会議 (ARVO), シアトル(米国), 4月30日～5月5日
土至田宏: 副交感神経除神経家兔ドライアイモデルにおけるレバミピド点眼薬の角結膜所見改善効果. 角膜カンファランス 2016, 軽井沢, 2016年2月18日～20日.

【国内学会】

柳川洋一、大坂裕通、大森一彦、石川浩平、三島健太郎、大出靖将

29. 柳川洋一、石川浩平、大森一彦、鈴木浩史、佐藤直樹、八木達郎、清田松巨、中村知広、小日向麻里子、大坂裕通、大出靖将、窪田敦之、櫻庭景植ポディーボード遊戯者に対するアンケート調査. 日本脳神経

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

外傷学会プログラム・抄録集 2015;38 回:122.

30. 鷺巣佳奈、下山勝仁、堀口愛、大森一彦、柳川洋一. CT で判明した環椎後頭関節脱臼の一例. 日本救急医学会関東地方会雑誌 2015;36:128.
31. 柳川洋一、大森一彦、神田章男、諸橋達、櫻田睦、石橋基弘、山本拓史、高橋善明、村松聡. 災害と脳神経外科 平成 26 年 8 月 31 日に実施した静岡県の災害訓練概要. Neurosurgical Emergency 2015;19:327.
32. 石川浩平、柳川洋一、大森一彦、櫻田睦、大坂裕通、小日向麻里子、三島健太郎、大出靖将、最上敦彦、大林治、山本拓史. 院内外の医療連携により重症外傷を救命する ドクヘリ医療スタッフデリバリーシステム. 日本外傷学会雑誌 2015;29:311.
33. 柳川洋一、柳川良子、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、小日向麻里子、三島健太郎、大出靖将. 看護大学生 1 年生に対する心肺蘇生術講習(ICLS)が卒業後の心肺蘇生に関する知識水準にもたらしたもの. 日本臨床救急医学会雑誌 2015;18:444.
34. 今村友典、宮本大輔、村野光和、中野貴明、平野雅巳、中山祐介、伊藤敏孝、柳川洋一. みなと救急外来初期診療コースは他施設でも機能するか? 日本臨床救急医学会雑誌 2015;18:441.
35. 石川浩平、柳川洋一、大出靖将、大坂裕通、大森一彦、三島健太郎、小日向麻里子. 妊娠中にマムシに咬まれた一例. 日本臨床救急医学会雑誌 2015;18:398.
36. 大出靖将、小日向麻里子、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一. 来院時心肺機能停止患者に対する血中 CO-Hb 濃度測定の意義. 日本臨床救急医学会雑誌 2015;18:365.
37. 青木弘道、飯嶋将司、吉崎智恵美、三浦直也、佐藤俊樹、関知子、岩瀬史明、柳川洋一、中川儀英、猪口貞樹. ドクターヘリの運用と展開 神奈川県ドクターヘリの隣接県との過去の連携と 3 県連携体制後の課題と展望. 日本臨床救急医学会雑誌 2015;18:263.
38. 浅田優美、岩崎雄介、伊藤里恵、杉江謙、阿久津守、柳川洋一、斉藤貢一. ヘッドスペース-固相マイクロ抽出 GC/MS を用いた脱法ハーブ中合成カンナビノイドの迅速分析. 日本薬学会年会要旨集 2015;135 年会:305.
39. 藤澤美希、小鍛冶好恵、岩崎雄介、伊藤里恵、杉江健一、阿久津守、柳川洋一、斉藤貢一. LC/TOF-MS による脱法ハーブ中合成カンナビノイドの一斉分析および保持時間の線形予測解析. 日本薬学会年会要旨集 2015;135 年会:302.
40. 柳川洋一、日域佳、小日向麻里子、吉澤俊彦、小畑宏介、石川浩平、大坂裕通、大出靖将. Post Cardiac Arrest Syndrome 心肺機能停止蘇生術後の抜管困難症となる要因の検討. 日本集中治療医学会雑誌 2016;23:S271.
41. 石川浩平、柳川洋一、大出靖将、大坂裕通、吉澤俊彦、日域佳、小日向麻里子. 過疎地域における多数傷病者発生時の分散搬送の重要性 ドクターヘリを複数機使用した現場活動. Japanese Journal of Disaster Medicine 2016;20:571.
42. 吉澤俊彦、日域佳、竹内郁人、小畑宏介、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、大出靖将、柳川洋一. 特発性大量心嚢液貯留を認めた一例. 第 66 回日本救急医学会関東地方会学術集会 2016
43. 大坂裕通、日域佳、武田純、小日向麻里子、三島健太郎、石川浩平、大出靖将、柳川洋一. アルティメット競技中に脊髄震盪を呈した一例. 第 66 回日本救急医学会関東地方会学術集会 2016
44. 吉澤俊彦. 高乳酸並びに高濃度ケトン体血症が意識レベルの保持に寄与していたと考えられる高度低血糖の一例. 第 66 回日本救急医学会関東地方会学術集会 2016
45. 松田浩成、大坂裕通、日域佳、吉澤俊彦、小日向麻里子、石川浩平、大出靖将、内藤俊夫、柳川洋一. 減圧症における超音波検査の有用性. 日本病院総合診療医学会雑誌 2016;10:134.
46. 三宅喬人、吉澤俊彦、近藤彰彦、柳川洋一. 背部からの鈍的外傷から大動脈損傷を来し CPA となった一症例. 日本外傷学会雑誌 2016;30:273.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

47. 吉澤俊彦、日域佳、小日向麻里子、石川浩平、大坂裕通、大出靖将、柳川洋一. 特発性大量心嚢液貯留を認めた一例. 第 19 回日本臨床救急医学会総会・学術集会. 2016; 19: 111-83.
48. 柳川洋一、大坂裕通、吉澤俊彦、日域佳、石川浩平、大森一彦、大出靖将. 非典型症状が主訴であった循環器系急性疾患. 第 7 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会抄録集 p302. 2016
49. 日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、大出靖将、大熊泰之、柳川洋一. 転倒外傷を契機に筋強直性ジストロフィーの診断がなされた一例. 第 30 回日本神経救急学会総会学術集会. シンポジウム 1 「Common disease に潜む神経救急」 2016
50. 柳川洋一、日域佳、竹内郁人、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、斎藤頁一. 危険ドラッグ使用者の診断に当たっての問題点. 第 28 回日本中毒学会総会抄録集 P199. 2016
51. 石川浩平、大坂裕通、大森一彦、吉澤俊彦、日域佳、柳川洋一. 交通外傷後に遅発性小腸損傷を発症し、術後胆嚢炎を併発した一例. 第 31 回救命救急医療学会. 2016
52. 柳川洋一、佐藤浩一、三橋直樹、志賀清悟、小野憲、小池啓司、平井貴、露木克好、菊地豊. 東京オリンピック競技開催決定後の静岡県東部での取り組み. 第 44 回 日本救急医学会総会・学術集会 抄録集 p421 2016
53. 大坂裕通、日域佳、野澤陽子、森島克明、川口亮、石橋基弘、柳川洋一、三橋直樹. 静岡県救護班第 5 陣として Aso Disaster Recovery Organization 活動拠点本部の統括業務. 第 44 回 日本救急医学会総会・学術集会抄録集 p372. 2016
54. 日域佳、吉澤俊彦、大森一彦、石川浩平、大坂裕通、大出靖将、柳川洋一. 開渠側溝に潜む危険. 第 44 回 日本救急医学会総会・学術集会抄録集 p587. 2016
55. 三宅喬人、大林治、設楽準、諏訪哲、磯田菊生、大坂裕通、柳川洋一. 一過性脳虚血発作と診断された深部静脈血栓症を伴う肺血栓塞栓症の一例. 第 44 回 日本救急医学会総会・学術集会抄録集 p591. 2016
56. 石川浩平、柳川洋一、大坂裕通、大森一彦、吉澤俊彦、日域佳. 病院前診療において外傷性横隔膜損傷は診断可能であるか否か. 第 44 回 日本救急医学会総会・学術集会抄録集 p606 2016
57. 大坂裕通、石川浩平、大森一彦、大出靖将、柳川洋一. オリンピック開催地・サイクルスポーツセンターでの外傷対応- 静岡県東部ドクターヘリ- 第 44 回 日本救急医学会総会・学術集会抄録集 p607. 2016
58. 竹内郁人、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、大出靖、柳川洋一. アルコール関連疾患としてのウェルニッケ脳症と特発性食道破裂を合併した 1 例. 第 44 回 日本救急医学会総会・学術集会抄録集 p397. 2016
59. 大坂裕通、石川浩平、大森一彦、大出靖将、柳川洋一. 伊豆半島における内因性疾患の活動状況とドクターヘリ有効活用. 第 23 回日本航空医療学会総会抄録集 p149. 2016
60. 石川浩平、柳川洋一、大坂裕通、大森一彦、吉澤俊彦、日域佳. 当基地病院のフライトドクター養成までの取り組みと課題. 第 23 回日本航空医療学会総会抄録集 p114. 2016
61. 大坂裕通、石川浩平、大森一彦、大出靖将、柳川洋一. オリンピック開催場所とサイクルスポーツセンターに関するドクターヘリの活用. 第 23 回日本航空医療学会総会抄録集 p149. 2016
62. 大森一彦、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、市之川英臣、柳川洋一. 継続する血胸の原因が結果的に左心耳損傷であった 1 例. 第 19 回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会抄録集 p82 2016
63. 長澤宏樹、大森一彦、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. 早期治療介入と円滑な組織間連携にて救命した日本刀による胸部刺創の 1 例. 第 19 回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会抄録集 p59 2016
64. 鶴上浩規、大森一彦、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. CT 画像が甲状腺クリーゼ診断の一助となった症例. 第 19 回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会抄録集 p25 2016
65. 堂垂大志、大森一彦、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. 巨人症による胸郭変形により

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- 窒息症状を呈した一例. 第 19 回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会抄録集 p58 2016
66. 三好悠斗、大森一彦、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. Ⅲ度熱中症による急性肝不全と回復期、再燃性横紋筋融解症を認め遺伝子解析まで至った症例. 第 19 回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会抄録集 p26 2016
67. 小笠大起、大森一彦、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. 介達外力で脾臓損傷を合併した一例. 第 19 回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会抄録集, p24 2016
68. 柳川洋一. 災害時における静岡県東部の現状と課題. 第 19 回日本救急医学会中部地方会総会・学術集会抄録集, p19 2016
69. 柳川洋一. 37 歳・男性. 咽頭痛で 119 コール。どう対処する? 第 33 回静岡県東部循環器救急医学会. 平成 28 年 1 月 18 日
70. 日域佳. 歯ブラシによる口腔内損傷で咽頭来した小児の 1 例. 東部地区救命救急医学研修会. 平成 28 年 1 月 20 日
71. 日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一. 開渠側溝に潜む危険. 日本脳神経外科救急学会雑誌 2017;21 (3): 315.
72. 柳川洋一、日域佳、竹内郁人、吉澤俊彦、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、佐藤潤、松本英之、土屋勝. 日本集団災害医学会雑誌 2017; 21(3): 462.
73. 石川浩平、竹内郁人、日域佳、吉澤俊彦、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一. 遷延するショックの原因として後縦隔血腫による心外閉塞性因子が考えられた多発性外傷例. 日本集中治療医学会 2017; 24: 132.
74. 大森一彦、竹内郁人、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. パラグライダー墜落による外傷性大動脈損傷を含めた多発外傷の 1 例. 日本集中治療医学会 2017; 24: 147.
75. 日域桂、柳川洋一、吉澤俊彦、石川浩平、竹内郁人、大森一彦、大坂裕通、作田梨奈、吉池高志. ステロイドパルス療法と免疫グロブリン大量静注療法が著効した重症薬疹の一例. 日本集中治療医学会 2017; 24: 168.
76. 竹内郁人、日域佳、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、大出靖将、中尾保秋、山本拓史、柳川洋一. 熱傷を主訴に来院したくも膜下出血の 1 例. 日本臨床救急医学会雑誌 2017;20(2):424.
77. 佐々木洋介、大森一彦、磯隆史、加藤英、長澤宏樹、竹内郁人、日域佳、大坂裕通、石川浩平、柳川洋一. 大動脈解離で突然死した 13 歳男児の一例. 日本臨床救急医学会雑誌 2017;20(2):394.
78. 柳川洋一、石川浩平、竹内郁人、日域佳、吉澤俊彦、大森一彦、大坂裕通. 遷延するショックの原因として後縦隔血腫による心外閉塞性因子が考えられた多発外傷例. 日本集中治療医学会雑誌 2017;24:S82-2.
79. 長澤宏樹、大森一彦、竹内郁人、日域佳、吉澤俊彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. 鹿との遭遇で受傷した自動車交通外傷の一例. 日本外傷学会雑誌 2017;31(2):279.
80. 柳川洋一、長澤宏樹、竹内郁人、日域佳、近藤彰彦、磯隆史、石川浩平、大坂裕通、大森一彦. 外傷画像診断におけるピットフォール Traumatic vacuum phenomenon. 日本外傷学会雑誌 2017;31(2):243.
81. 柳川洋一、石川浩平、長澤宏樹、竹内郁人、日域佳、近藤彰彦、大坂裕通、大森一彦. 災害・集団発生中毒 CBRNE を疑われた事案に関して、ドクヘリは患者搬送に関わるべきなのか? 日本中毒学会、中毒研究 2017;30(2):169.
82. 長澤宏樹、近藤彰彦、竹内郁人、日域佳、磯隆史、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一. 早期ドレナージが診断、治療に有用であった Nocardia 感染症の一例. 第 20 回日本救急医学会中部地方会プログラム p20. 2017
83. 竹内郁人、長澤宏樹、高橋良介、日域佳、磯隆史、近藤彰彦、大森一彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一. 一口の有機リン系農薬の誤飲により CH-E1IU/L まで低下した一例. 第 20 回日本救急医学会中部地方会プログラム P21. 2017

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

84. 柳川洋一、長澤宏樹、竹内郁人、日域佳、近藤彰彦、大坂裕通、石川浩平、大森一彦。救急医療人の確保と育成：医療過疎地域にあっても、都心部では学ぶことのできない幅広く濃厚な臨床研修機会を提供する。第20回日本救急医学会中部地方会プログラム P15 シンポジスト 2017
85. 石川浩平、竹内郁人、日域佳、近藤彰彦、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一。“サウナ”は重症熱中症となる重要なキーワードとなり得るか。日本救急医学会雑誌 P 116 2017
86. 柳川洋一、長澤宏樹、竹内郁人、高橋良介、日域佳、磯隆史、近藤彰彦、大坂裕通、石川浩平、大森一彦。FAST:high echoic(avascular)area を探せ。日本救急医学会雑誌 2017; 28 (9): 503.
87. 長澤宏樹、石川浩平、竹内郁人、日域佳、高橋良介、磯隆史、近藤彰彦、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一。パラグライダー中の高所墜落から大動脈損傷を負い、救命し得なかった一例。日本救急医学会雑誌 2017; 28 (9): 631.
88. 竹内郁人、石川浩平、長澤宏樹、日域佳、近藤彰彦、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一。縦隔気腫から遅発性に気胸が生じた頸部刺創の一例。日本救急医学会雑誌 2017; 28 (9): 688.
89. 近藤彰彦、高橋良介、竹内郁人、日域佳、石川浩平、大坂裕通、大森一彦、柳川洋一。搬送時や入院時の体勢に留意すべき reverse chance fracture の一例。日本救急医学会雑誌 2017; 28 (9): 724.
90. 杉山由希乃、鈴木めぐみ、鬼塚味、田上佑一、中村沙織、森島克明、松尾正人、多田真也、石倉美穂子、勝間田敏宏、日域佳、石川浩平、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一。富士山登山中に心肺停止状態から救命できた事例。日本航空医療学会雑誌 2017;18(2): 225.
91. 大坂裕通、大森一彦、石川浩平、近藤彰彦、柳川洋一。静岡県東部における消防防災ヘリからドクターヘリの連携。日本航空医療学会雑誌 2017;18(2): 242.
92. 石川浩平、竹内郁人、日域佳、近藤彰彦、大森一彦、大坂裕通、柳川洋一。有機化学物質に暴露された患者のドクターヘリ搬送は是か非か。日本航空医療学会雑誌 2017;18(2): 189.
93. 大森一彦、竹内郁人、日域佳、磯隆史、近藤彰彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一。心肺停止患者に対するドクターヘリでの対応の検討。日本航空医療学会雑誌 2017;18(2): 172.
94. 近藤彰彦、高橋良介、竹内郁人、日域佳、石川浩平、大坂裕通、大森一彦、柳川洋一。ドクターヘリ診療における EFAST の活用についての検討。日本航空医療学会雑誌 2017;18(2): 117.
95. 大森一彦、竹内郁人、日域佳、近藤彰彦、石川浩平、大坂裕通、柳川洋一。ドクターヘリはへき地救急医療にとって有益のみ与えるか。第21回へき地・離島救急医療学会 2017

小池道明

96. 小池道明、岩尾憲明、今田春子、酒井寛美、菊地麻里、土屋明美。第70回日本輸血・細胞治療学会東海支部例会 名古屋 2018年2月17日、静岡県における大災害時の輸血療法に関するアンケート調査結果
97. 土屋明美、岩尾憲明、小池道明。第65回日本輸血・細胞治療学会総会 千葉 2017年6月23日 当院における新鮮凍結血漿(FFP)の適正使用に向けた取り組み

岩神真一郎

98. 岩神直子、岩神真一郎、関谷充晃、藤井充弘、石渡俊次、原宗央、檀原高、高橋和久。胸郭内腫瘍に対する超音波ガイド下穿刺の正診率に影響を与えた因子に関する検討。超音波医学 42 (Suppl): S136、2015
99. 原宗央、吉川仁美、松本直久、岩神直子、石渡俊次、藤井充弘、岩神真一郎。外科的生検で診断し、抗結核薬及びEGFR-TKI内服を行った結核合併肺腺癌の1例。第108回日本呼吸器学会東海地方学会 2015年11月14日 じゅうろくプラザ
100. 吉川仁美、松本直久、原宗央、岩神直子、石渡俊次、藤井充弘、岩神真一郎。高齢者にみられた乳び胸の1例。第108回日本呼吸器学会東海地方学会 2015年11月15日 じゅうろくプラザ
101. 岩神直子、中村愛、宮脇太一、松本直久、原宗央、石渡俊次、藤井充弘、岩神真一郎。過誤腫にクリプトコッカスを併発し肺癌との鑑別が困難であった1症例。第109回日本呼吸器学会東海地方学会 2016年5

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

月 21 日 名古屋市中小企業振興会館

102. 松本直久、中村愛、宮脇太一、原宗央、岩神直子、藤井充弘、岩神真一郎。妊婦に発症した肺炎球菌性膿胸の 1 例。第 109 回日本呼吸器学会東海地方学会 2016 年 5 月 22 日 名古屋市中小企業振興会館
103. 宮脇太一、柳下薫寛、藤井充弘、中村愛、松本直久、高遼、原宗央、岩神直子、石渡俊次、岩神真一郎、高橋和久。通院距離が EGFR チロシンキナーゼ阻害薬の治療効果に及ぼす影響。日本臨床腫瘍学会学術集会 2016 年 7 月 28 日 神戸国際展示場
104. 西牧孝奏、松本直久、原宗央、鈴木宣史、宮脇太一、岩神直子、藤井充弘、岩神真一郎。食道狭窄を伴う進行期肺腺癌に対しゲフェチニブの経管投与で症状改善が認められた 2 症例。第 110 回日本呼吸器学会東海地方学会 2016 年 11 月 5 日 名古屋市中小企業振興会館
105. 宮脇太一、柳下薫寛、藤井充弘、鈴木宣史、松本直久、原宗央、岩神真一郎、高橋和久。外来化学療法において通院距離が治療効果に及ぼす影響。第 57 回日本肺癌学会 2016 年 12 月 21 日 福岡国際会議場
106. 原宗央、松本直久、宮脇太一、岩神直子、藤井充弘、岩神真一郎、高橋和久。当院における肺炎球菌性肺炎症例の治療反応性に関する後方視的検討。第 57 回日本呼吸器学会学術講演会 2017 年 4 月 22 日 東京国際フォーラム
107. Miyawaki T, Yagishita S, Suzuki Y, Matsumoto N, Hara M, Iwakami N, Fujii M, Iwakami S, Takahashi K. Cost-effect analyses of bevacizumab and pemetrexed for non-squamous non-small cell lung cancer in clinical practice. 第 57 回日本呼吸器学会学術講演会 2017 年 4 月 22 日 東京国際フォーラム
108. 劉左右、塩田智美、杉山愛、和田裕雄、関谷充晃、守尾嘉晃、岩神真一郎、家永浩樹、高橋和久。右心カテーテルを施行した呼吸器疾患における、動脈血液ガス分析同時測定の意義。第 57 回日本呼吸器学会学術講演会 2017 年 4 月 22 日 東京国際フォーラム
109. 山田朋子、吉田隆司、宮脇太一、原宗央、岩神直子、藤井充弘、岩神真一郎。抗 IFN- γ 抗体陽性を示した播種性非結核性抗酸菌症の 1 例。第 111 回日本呼吸器学会東海地方学会 2017 年 5 月 27 日 愛知県がんセンター中央病院 国際医学交流センター
110. 宮脇太一、安部寿美子、住吉一誠、吉田隆司、原宗央、岩神直子、岩神真一郎。義歯を誤嚥した気道異物の 1 例。第 53 回日本呼吸器内視鏡学会中部支部会 2017 年 7 月 1 日 名古屋市立大学病院病棟・中央診療棟 3F 大ホール
111. 宮脇太一、安部寿美子、吉田隆司、住吉一誠、原宗央、岩神直子、岩神真一郎。Gefitinib により奏功が得られた心筋転移を伴う EGFR 遺伝子変異陽性肺腺癌の 1 例。第 112 回日本呼吸器学会東海地方学会 2017 年 11 月 11 日 三重県医師会館
112. 安部寿美子、吉田隆司、住吉一誠、宮脇太一、岩神直子、原宗央、岩神真一郎。ステロイド漸減中に再燃を認めた Nivolumab による薬剤性肺障害の 1 例。第 112 回日本呼吸器学会東海地方学会 2017 年 11 月 11 日 三重県医師会館

田中利隆

113. 篠原三津子、藤原里紗、石田ゆり、松井泰佳奈、大野基晴、矢田昌太郎、宮国泰香、菅沼牧知子、田中沙織、田中利隆、田口雄史、三橋直樹。分娩後の吐血を契機に診断した胃・肝血管腫の一例 第 129 回関東連合産科婦人科学会学術集会 2015.6.20 東京
114. 田中沙織、宮国泰香、篠原三津子、石田ゆり、村田佳菜子、松井泰佳奈、矢田昌太郎、菅沼牧知子、山本祐華、田中利隆、三橋直樹。内頸動脈及び中大脳動脈の血流異常を観察した無水脳症の一例 第 51 回日本周産期新生児医学会学術集会 2015.7.10-12 福岡
115. 矢田昌太郎、篠原三津子、石田ゆり、村田佳菜子、松井泰佳奈、菅沼牧知子、田中沙織、宮国泰香、山本祐華、田中利隆、三橋直樹。適切な管理により生児を得た巨大絨毛膜下血腫(Bruce's mole)の 1 例 第 51

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- 回日本周産期新生児医学会学術集会 2015.7.10-12 福岡
- 116.石田ゆり、田中利隆、北村絵里、篠原三津子、高橋奈々子、村田佳菜子、菅直子、矢田昌太郎、山本祐華、宮国泰香、金田容秀、三橋直樹. 超音波所見から子宮頸管延長および嵌頓子宮と診断した子宮筋腫合併妊娠の一例 第130回関東連合産科婦人科学会学術集会 2015.10.24-25 幕張
- 117.田中利隆、石田ゆり、北村絵里、篠原三津子、高橋奈々子、村田佳菜子、菅直子、矢田昌太郎、山本祐華、宮国泰香、金田容秀、三橋直樹. 超音波所見から子宮頸管延長および嵌頓子宮と診断した子宮筋腫合併妊娠の一例 第38回日本産婦人科手術学会学術集会 2015.11.28 東京
- 118.矢田昌太郎、石田ゆり、北村絵里、篠原三津子、高橋奈々子、村田佳菜子、菅直子、山本祐華、宮国泰香、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. Transplacental approach により帝王切開を行った前置胎盤症例の検討 第38回日本産婦人科手術学会学術集会 2015.11.28 東京
- 119.高橋奈々子、田中利隆、加藤雅也、北村絵里、篠原三津子、石田ゆり、菅直子、矢田昌太郎、山本祐華、金田容秀、三橋直樹. 帝王切開癒痕部妊娠に対しメソトレキセートおよび塩化カリウムの局注療法を施行し、待機的加療で治癒した一例 平成27年度静岡産科婦人科学会秋季学術集会 2015.11.15 静岡
- 120.石田ゆり、山本祐華、篠原三津子、高橋奈々子、北村絵里、村田佳菜子、矢田昌太郎、菅直子、宮国泰香、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. 妊娠34週以降の胎児発育不全における分娩管理の検討 第68回日本産婦人科学会学術集会 2016.4.21-24 東京
- 121.篠原三津子、山本祐華、高橋奈々子、北村絵里、石田ゆり、村田佳菜子、矢田昌太郎、菅直子、宮国泰香、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. HELLP症候群に伴う肝機能障害に尿崩症を発症した一例 第68回日本産婦人科学会学術集会 2016.4.21-24 東京
- 122.田中利隆、山本祐華、加藤雅也、北村絵里、篠原三津子、高橋奈々子、本田理子、村田佳菜子、菅直子、矢田昌太郎、金田容秀、三橋直樹. 超音波により先天性胆道拡張症と出生前診断した2例 第89回日本超音波医学会学術集会 2016.5.27-29 京都
- 123.加藤雅也、村田佳菜子、高橋奈々子、篠原三津子、北村絵里、本田理子、矢田昌太郎、菅直子、山本祐華、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. 塩酸リトドリン製剤の経静脈投与における副作用の検討 第131回関東連合産科婦人科学会総会・学術集会 2016.6.18-19 東京
- 124.村田佳菜子、田中利隆、加藤雅也、北村絵里、篠原三津子、高橋奈々子、本田理子、菅直子、矢田昌太郎、山本祐華、金田容秀、三橋直樹. 胎児期に四肢短縮を指摘され骨系統疾患が疑われた4例 第52回日本周産期新生児医学会学術集会 2016.7.16-18 富山
- 125.田中利隆、北村絵里、篠原三津子、高橋奈々子、本田理子、村田佳菜子、矢田昌太郎、菅直子、山本祐華、金田容秀、三橋直樹. 妊娠34週未満の早産妊婦に対する母体ステロイド単回プロトコールにおける投与状況 第52回日本周産期新生児医学会学術集会 2016.7.16-18 富山
- 126.矢田昌太郎、熊谷麻子、北村絵里、助川幸、村田佳菜子、菅直子、田中里美、山本祐華、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. 超音波カラードプラ法とHD live flow が診断に有用であった子宮動静脈奇形の1例 第132回関東連合産科婦人科学会総会・学術集会 2016.10.15-16 東京
- 127.矢田昌太郎、熊谷麻子、北村絵里、助川幸、村田佳菜子、菅直子、田中里美、山本祐華、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. 超音波カラードプラ法とHD live flow が診断に有用であった子宮動静脈奇形の1例 平成28年度静岡産科婦人科学会秋季学術集会 2016.11.18 静岡
- 128.助川幸、熊谷麻子、北村絵里、村田佳菜子、村瀬佳子、田中里美、矢田昌太郎、山本祐華、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. 興味ある胎児循環症例～Fetal Critical Aortic Stenosis～ 第14回日本胎児治療学会学術集会 2016.11.18-20 静岡
- 129.田中利隆. 妊産褥婦(授乳婦)と薬剤 ～産婦人科診療ガイドライン-産科編 2017を踏まえて～ 第2回母子保健研修会 2017.1.28 静岡

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

130. 助川幸、正岡駿、熊谷麻子、西澤しほり、村瀬佳子、田中里美、矢田昌太郎、山本祐華、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. 胎児重症大動脈弁狭窄症における肺静脈血流波形とその予後予測 第 23 回胎児心臓病学会学術集会 2017.3.3-4 東京
131. 田中利隆. 産婦人科診療ガイドライン産科編 2017 解説講習 CQ416 選択的帝王切開時に注意することは? 第 69 回日本産科婦人科学会総会・学術集会 2017.4.13-16 広島
132. Kumagai A, Tanaka T, Kitamura E, Sukegawa S, Murata K, Murase Y, Tanaka S, Yata S, Yamamoto Y, Kaneda H, Mitsuhashi N. Six cases of emergency hysterectomy in which electrothermal bipolar vessel sealing system was used. 第 69 回日本産科婦人科学会総会・学術集会 2017.4.13-16 広島
133. Kaneda H, Kumagai A, Kitamura E, Sukegawa S, Murata K, Murase Y, Tanaka S, Yata S, Yamamoto Y, Tanaka T, Mitsuhashi N. Onset of Adult T-cell Leukemia-lymphoma during the treatment of peritoneal cancer recurrence: case report. 第 69 回日本産科婦人科学会総会・学術集会 2017.4.13-16 広島
134. 正岡駿、矢田昌太郎、金田容秀、熊谷麻子、助川幸、西澤しほり、村瀬佳子、田中里美、山本祐華、田中利隆、三橋直樹. 妊娠初期に診断となった若年性陰癌の1例 第 133 回関東連合産科婦人科学会総会・学術集会 2017.6.17-18 東京
135. 田中利隆、山本祐華、正岡駿、熊谷麻子、助川幸、西澤しほり、村瀬佳子、田中里美、矢田昌太郎、金田容秀、三橋直樹. 地域医療における胎児診断の取り組み(胎児診断例の周産期管理) 第 53 回日本小児循環器学会総会・学術集会(シンポジウム) 2017.7.7-9 浜松
136. 田中里美、田中利隆、正岡駿、熊谷麻子、助川幸、西澤しほり、村瀬佳子、矢田昌太郎、山本祐華、金田容秀、三橋直樹. 当院における早産の母体ステロイドの投与状況 第 53 回日本周産期新生児医学会学術集会 2017.7.16-18 横浜
137. 村瀬佳子、田中利隆、正岡駿、熊谷麻子、助川幸、西澤しほり、矢田昌太郎、山本祐華、金田容秀、三橋直樹. 当院における常位胎盤早期剥離 50 症例の後方視的検討 第 53 回日本周産期新生児医学会学術集会 2017.7.16-18 横浜
138. 正岡駿、矢田昌太郎、金田容秀、熊谷麻子、助川幸、西澤しほり、村瀬佳子、田中里美、山本祐華、田中利隆、三橋直樹. 妊娠初期に診断となった若年性陰癌の1例 第 59 回日本婦人科腫瘍学会学術講演会 2017.7.27-29 熊本
139. 田中利隆. ここが変わった! 2017 産科ガイドライン 第 8 回羽衣セミナー 2017.9.2 静岡
140. *伊藤早紀、田中利隆、山本祐華、正岡駿、加藤雅也、熊谷麻子、北村絵里、篠原三津子、助川幸、高橋奈々子、本田理子、石田ゆり、村田佳菜子、西澤しほり、村瀬佳子、菅直子、矢田昌太郎、田中里美、宮国泰香、金田容秀、三橋直樹. 災害時における妊婦の適切なトリアージの構築に関する研究 第 45 回日本救急医学会総会・学術集会 2017.10.26 大阪
141. *伊藤早紀、田中利隆. 当院周産期センターにおける母体救急搬送の現状(災害時における妊婦の適切なトリアージの構築) 第 36 回静岡県東部周産期研究会 2017.11.30 静岡
142. 植木典和、正岡駿、伊藤早紀、助川幸、西澤しほり、村瀬佳子、矢田昌太郎、田中里美、金田容秀、田中利隆、三橋直樹. HELLP 症候群に尿崩症を合併した 2 例 第 134 回関東連合産科婦人科学会総会・学術集会 2017.12.9-10 栃木
- 市之川英臣**
143. *市之川英臣、尾泉広明、立盛崇裕、鈴木健司. 臍胸に対する胸腔鏡下手術と開胸手術の比較 第 33 回日本呼吸器外科学会定期学術集会、京都、2016.5.12
144. 星野浩延、市之川英臣、尾泉広明、鈴木健司. 外傷性血気胸に対するアプローチ 第 70 回日本胸部外科学会定期学術集会、札幌、2017.9.29
- 大林治、最上敦彦、神田章男、諸橋達**

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

145. 最上敦彦. 不安定型骨盤輪骨折に対する仙骨・腸骨間ロッド固定 第 29 回日本外傷学会総会・学術集会, June, 10-12, 2015 (札幌)
146. 最上敦彦、金子和夫. 大腿骨遠位部骨折の基礎と臨床. 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S13
147. 最上敦彦、大林治、二村謙太郎、岩瀬秀明、金子和夫. 不安定型骨盤輪骨折に対する仙骨・腸骨間ロッド固定(SIRF:Sacro-Iliac Rod Fixation). 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S31
148. 小畑宏介、二村謙太郎、最上敦彦、大林治、金子和夫. 月状骨関節窩における掌尺側小骨片の整復固定に難渋した橈骨遠位端骨折の2例. 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S77
149. 神田章男、諸橋達、最上敦彦、大林治、金子和夫. 寛骨臼骨折術後に対する人工股関節全置換術の治療成績－術後坐骨神経麻痺を生じた1例の検討－ 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S82
150. 内藤聖人、杉山陽一、小畑宏介、井下田由芳、最上敦彦、大林治、金子和夫. 橈骨遠位端骨折の合併する尺骨遠位端骨折の治療経験－内固定の適応に対する考察－ 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S112
151. 齊田良知、馬場智規、神田章男、最上敦彦、松本幹生、野尻英俊、森川太智、谷口有、伊坂陽、金子和夫. 非定型大腿骨不完全骨折の治療－いつ、どんな患者に予防的髓内釘固定を行うべきか？－ 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S127
152. 和田知樹、最上敦彦、大林治、金子和夫. 上腕骨近位端骨折 Neer 分類 3-4part に対する髓内釘治療の中期成績. 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S139
153. 三宅喬人、最上敦彦、二村謙太郎、大林治、金子和夫. 肘頭骨折に対するマルチプルテンションバンド固定による治療経験. 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S204
154. 二村謙太郎、最上敦彦、大林治、佐藤和生、松井祐希、上田泰久、倉田佳明、齋藤丈太、辻英樹、金子和夫. 足関節果部骨折の合併する遠位脛腓骨靭帯結合損傷の整復位評価. 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S251
155. 武田純、最上敦彦、和田知樹、大林治、金子和夫. SCORPION® NEO を用いた鎖骨遠位端骨折に対する治療経験. 第 41 回日本骨治療学会, June, 26-27, 2015 (奈良) プログラム・抄録集:S260
156. 山口順一郎、最上敦彦、糸井陽、田中将、大林治. 頚椎症性筋萎縮症の術後に多巣性運動ニューロパチーと診断された1例. 第 180 回静岡県整形外科医会集談会, Aug., 1, 2015. (浜松)
157. 諸橋達、石井聖也、神田章男、最上敦彦、大林治、金子和夫. ショートステムの術中骨折症例から考える固定様式と応力集中部位の検討. 第 89 回日本整形外科学会学術集会, May, 12-15, 2016 (横浜)
158. 最上敦彦、大林治、二村謙太郎、岩瀬秀明、金子和夫. 治療に直結する分類法: シンポジウム: 上腕骨近位部骨折の治療方針-ガイドラインの作成を目指して- 第 89 回日本整形外科学会学術集会, May, 12-15, 2016 (横浜)
159. 神田章男、大林治、最上敦彦、諸橋達、金子和夫. 股関節前方アプローチにおける関節包、外旋筋群温存に対する工夫: 第 89 回日本整形外科学会学術集会, May, 12-15, 2016 (横浜)
160. 前田浩行、金子和、大林治、前田睦浩、岩瀬秀明、柿沼裕貴、武井祐輔、三井和幸. ターニケット駆血後の運動器合併症の検討 第 53 回日リハビリテーション医学会学術集会, June, 9-11, 2016. (京都) プログラム・抄録集:I248
161. 最上敦彦、二村謙太郎、大林治、金子和夫. 不安定型骨盤輪骨折に対する脊椎インストレーションを用いた治療戦略~外傷外科医から~ 第 42 回日本骨治療学会, パネルディスカッション, July, 1-2, 2016 (東京)

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

プログラム・抄録集:S49

162. 三宅喬人、最上敦彦、二村謙太郎、神田章男、諸橋達、大林治、金子和夫. 脊椎インストレーションを使用した仙骨腸骨間固定. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S169
163. 神田章男、大林治、最上敦彦、諸橋達、金子和夫. 手術中整復操作によりバイポーラトリアルカップが骨盤内に迷入した一例. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S234
164. 諸橋達、三宅喬人、二村謙太郎、神田章男、最上敦彦、大林治、金子和夫. ショートステム Optimys を用いた THA における術中ステム周囲骨折症例の検討. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S271
165. 二村謙太郎、大林治、最上敦彦、諸橋達、神田章男、辻英樹、齊藤丈太、倉田佳男、上田泰久、金子和夫. 大腿骨転子間骨折の新分類. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S275
166. 松尾智次、最上敦彦、二村謙太郎、神田章男、諸橋達、大林治、金子和夫. 大腿骨遠位骨幹部骨折 (Intraisthmal fracture) に対する順行性髄内釘の治療経験. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S309
167. 田中将、糸井陽、大林治、最上敦彦、諸橋達、神田章男、二村謙太郎. 肋椎関節損傷が胸椎損傷に与える影響. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S323
168. 高橋良介、大林治、最上敦彦、糸井陽、田中将、金子和夫. 環椎後弓スクリューを用いた C1-2 hybrid fixation による創内創外固定を行った高齢者の歯突起 Anderson type 2. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S334
169. 三宅喬人、二村謙太郎、神田章男、諸橋達、最上敦彦、大林治、金子和夫. 側方圧迫型骨盤輪骨折 (Young-Burgess 分類 LC1) の保存療法の臨床成績. 第42回日本骨治療学会, July, 1-2, 2016 (東京) プログラム・抄録集:S382
170. 小見桃子、三宅喬人、小畑宏介、二村謙太郎、神田章男、諸橋達、最上敦彦、大林治. 脛骨高位骨切り術(HTO)術後に深部静脈血栓(DVT)による肺塞栓(PE)と奇異性塞栓症を合併した1例. 第183回静岡県整形外科医会集談会, July, 9, 2016. (浜松)
171. 諸橋達、大林治. 殿部痛に対する股関節注射による診断と治療-坐骨神経痛として漫然と治療されていた症例の鑑別の必要性. 第29回日本臨床整形外科学会学術集会, July, 15-18. (札幌) 2016
172. 最上敦彦、大林治. 大腿骨転子部粉碎骨折に対する大転子サポートプレート付き CHS による治療の適応と限界. 第65回東日本整形災害外科学会, Sep, 22-23, (箱根) 2016
173. 諸橋達、大林治、最上敦彦、神田章男、岩瀬秀明、金子和夫. Optimys 103 症例と Fitmore 15 症例の検討による反省と日本人への適応範囲. 第43回日本股関節学会学術集会 パネルディスカッション, Nov, 4-5, 2016 (大阪) プログラム・抄録集 231
174. 神田章男、大林治、最上敦彦、諸橋達、金子和夫. 股関節 direct lateral approach における中殿筋・小殿筋損傷. 第43回日本股関節学会学術集会, Nov, 4-5, 2016 (大阪) プログラム・抄録集 342
175. 諸橋達、大林治. 先天性内反足に対する距踵関節固定術後46年で疼痛を呈した球状足関節症に対して脛骨遠位斜め骨切り術を行った1例. 第41回日本足の外科学会学術集会, Nov, 17-18 (奈良) 2016
176. 諸橋達. 一体型人工骨頭置換術後20年経過症例に対してステム温存+Dual mobility Cup を用いた部分再置換を行った1例. 第47回日本人工関節学会, Feb, 24-25, 2017. (宜野湾)
177. 最上敦彦. 大腿骨遠位部における急性期処置としての創外固定. 第30回創外固定・骨延長学会学術集会, Mar, 3-4. (福岡) 2017
178. 岩崎英二、神田章男、大林治、最上敦彦、諸橋達、二村謙太郎、田中将、松尾智次、根岸義文. 骨欠損を認める寛骨臼回転骨切り術後に補助プレートを用いて THA を行い良好な経過が得られた1例. 第185回静岡県整形外科医会集談会, Mar, 18, 2017. (沼津)

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

179. 最上敦彦. 高齢者大腿骨遠位部骨折治療の問題点と工夫. 第66回東日本整形災害外科学会, Apr, 14-16, 2017. (東京)
180. 二村謙太郎, 田中将, 神田章男, 諸橋達, 最上敦彦, 大林治, 辻英樹, 金子和夫. Weberの3つの指標を参考にすれば syndesmo-sisの整復不良は回避できる. 第90回日本整形外科学会学術集会, May, 18-21, 2017. (仙台)
181. 最上敦彦, 二村謙太郎, 大林治, 岩瀬秀明. 大腿骨遠位端脆弱性骨折の治療戦略. 第90回日本整形外科学会学術集会, May, 18-21, 2017. (仙台)
182. 田中将, 糸井陽, 大林治, 最上敦彦, 諸橋達, 神田章男, 二村謙太郎, 金子和夫. 強直性脊椎障害に伴った脊椎損傷の治療成績. 第90回日本整形外科学会学術集会, May, 18-21, 2017. (仙台)
183. 諸橋達, 神田章男, 最上敦彦, 大林治, 金子和夫. 坐骨神経痛として治療されてきた殿部痛に対する股関節注射による鑑別. 第90回日本整形外科学会学術集会, May, 18-21, 2017. (仙台)
184. 最上敦彦. 医療安全を考慮した大腿骨近位部骨折の新たな治療戦略 -Hook Pin nailを用いた転子部骨折治療を中心に- 第43回日本骨折治療学会, Jul, 7-8, 2017. (郡山) 骨折 39(Suppl.), S63, 2017.
185. 二村謙太郎, 三宅喬人, 田中将, 神田章男, 諸橋達, 最上敦彦, 大林治, 岩瀬秀明, 金子和夫. 不安定型骨盤輪骨折に対する Sacro-Iliac Rod Fixationの生体力学試験 WITHIN RING CONCEPTの検証 第43回日本骨折治療学会, Jul, 7-8, 2017. (郡山) 骨折 39(Suppl.), S71, 2017.
186. 内藤聖人, 杉山陽一, 木下真由子, 後藤賢司, 岩瀬嘉志, 最上敦彦, 大林治, 金子和夫. 橈骨遠位端骨折受傷時における長母指伸筋腱損傷の調査. 第43回日本骨折治療学会, Jul, 7-8, 2017. (郡山) 骨折 39(Suppl.), S74, 2017.
187. 最上敦彦, 二村謙太郎, 大林治, 岩瀬秀明. 上腕骨近位端骨折用新型髓内釘(ARISTOPHN)の初期臨床データ解析. 第43回日本骨折治療学会, Jul, 7-8, 2017. (郡山) 骨折 39(Suppl.), S116, 2017.
188. 守屋秀一, 井上尚美, 小河裕明, 藤谷晃亮, 金子和夫, 佐藤克己. 上腕骨近位部及び骨幹部に骨折線を有する症例の治療経験. 骨折 39(Suppl.), S259, 2017.
189. 東村潤, 大林治, 最上敦彦, 諸橋達, 神田章男, 二村謙太郎, 三宅喬人, 辻英樹. 経肘頭脱臼骨折の治療経験. 第43回日本骨折治療学会, Jul, 7-8, 2017. (郡山) 骨折 39(Suppl.), S306, 2017.
190. 杉山陽一, 宮本英明, 木下真由子, 内藤聖人, 最上敦彦, 大林治, 金子和夫. 超音波エラストグラフィを用いた掌側ロッキングプレート固定後の正中神経弾性変形の調査. 第43回日本骨折治療学会, Jul, 7-8, 2017. (郡山) 骨折 39(Suppl.), S353, 2017.
191. 渡泰士, 馬場智規, 平中崇文, 最上敦彦, 本間康弘, 越智宏徳, 尾崎友, 松本幹生, 金子和夫. 骨折手術シミュレーターを用いた術中透視画面の位置の違いによる手術結果の検討. 第43回日本骨折治療学会, Jul, 7-8, 2017. (郡山) 骨折 39(Suppl.), S368, 2017.
192. 最上敦彦. 高齢者大腿骨遠位部骨折治療の問題点と工夫. 第66回東日本整形災害外科学会, Sep, 14-16, 2017. (東京)
193. 雨宮将太, 武井裕輔, 前田浩行, 諸橋達, 神田章男, 岩瀬秀明, 金子和夫, 前田睦浩, 寺阪澄孝, 下大川文晴, 三井和幸. 整形外科手術における新たなターニケットの開発に関する研究. 第33回ライフサポート学会大会, 第17回日本生活支援工学会大会, 日本機械学会福祉工学シンポジウム, Sep, 15-17, 2017. (東京)
194. 前田浩行, 岩瀬秀明, 大林治, 金子和夫, 前田睦浩, 大磯沙穂, 蟻沢駿哉, 雨宮将太, 武井裕輔, 三井和幸. EHD現象を利用した新しいターニケット装置の開発. 第5回看護理工学会学術集会, Oct, 14-15, 2017. (金沢) プログラム・抄録集: 78.
195. 最上敦彦, 諸橋達, 神田章男, 大林治, 岩瀬秀明, 金子和夫. 大腿骨頸部骨折の骨接合術の適応と手術方法. 第44回日本股関節学会学術集会, Oct, 20-21, 2017. (東京) 抄録集: 197.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

196. 諸橋達、岩崎英二、東村潤、神田章男、最上敦彦、大林治、金子和夫. 変形性股関節症 118 症例に対するヒアルロン酸注射の効果の検討. 第 44 回日本股関節学会学術集会, Oct, 20-21, 2017. (東京) 抄録集: 317.
197. 神田章男、大林治、最上敦彦、諸橋達、金子和夫. 骨盤骨切り術後の人工股関節全置換術. 第 44 回日本股関節学会学術集会, Oct, 20-21, 2017. (東京) 抄録集: 446.
198. 諸橋達、岩崎英二、東村潤、神田章男、最上敦彦、大林治、金子和夫. THA 再置換術 180 関節のアプローチ別脱臼率の比較～前回アプローチに関わらず direct lateral アプローチが有用～ 第 44 回日本股関節学会学術集会, Oct, 20-21, 2017. (東京) 抄録集: 455.
199. 東村潤、諸橋達、岩崎英二、神田章男、最上敦彦、大林治. 人工股関節全置換術後に認めた異所性骨化のアプローチ別の影響. 第 44 回日本股関節学会学術集会, Oct, 20-21, 2017. (東京) 抄録集: 532.
200. 諸橋達、岩崎英二、東村潤、神田章男、最上敦彦、大林治、金子和夫. Direct anterior Approach による THA 術後異所性骨化による可動域制限に対して骨化巣切除を行った 1 例. 第 44 回日本股関節学会学術集会, Oct, 20-21, 2017. (東京) 抄録集: 536.
201. 前田浩行、大林治、金子和夫、前田睦浩、武井裕輔、三井和幸. 整形外科及びラットの研究におけるターニケットの新たな駆動評価と至適圧力の検討. 第 1 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会, Oct, 28-29, 2017. (大阪) プログラム・抄録集: S180.
202. 諸橋達. 当院における外反母趾及びリウマチ足趾変形に対する矯正骨切りの比較検討-固定デバイスと皮膚障害の関連について- 第 42 回日本足の外科学会・学術集会, Nov, 9-10, 2017. (名古屋)
203. 兩宮将太、武井裕輔、前田浩行、諸橋達、神田章男、岩瀬秀明、金子和夫、前田睦浩、寺阪澄孝、下大川文晴、三井和幸. 整形外科手術における患者の負担軽減が可能なターニケットの開発に関する研究. 第 44 回日本臨床バイオメカニクス学会, Nov. 24-25, 2017. (松山) プログラム・抄録集:133
204. 諸橋達、岩瀬秀明、神田章男、佐藤太一、本間康弘、最上敦彦、大林治、金子和夫. 人工股関節全置換術におけるステム挿入時に発生する打ち込み音の解析および術後中期における画像評価との関連. 第 44 回日本臨床バイオメカニクス学会, Nov, 24-25, 2017. (松山) プログラム・抄録集:172.

諏訪哲

205. 勝又俊郎、大木美枝子、米持真由美、園田健人、磯隆史、村田梓、設楽準、國本充洋、大内翔平、遠藤裕久、和田英樹、坪井秀太、荻田学、諏訪哲. レフルル心内膜炎の一症例 第 50 回静岡心エコー図セミナー 2015 年 7 月 25 日、静岡
206. 松本里枝、山本優子、神谷知子、小野田基代乃、渡辺清美、櫻井操、諏訪哲. 緊急カテ対応に向けての看護記録改善の取り組み～チェック方式の活用を取り入れ効率化・適正化を図る～ 第 34 回日本心血管インターベンション治療学会東海北陸地方会 2015 年 9 月 9 日～10 日、名古屋
207. 和田英樹、宮内克己、設楽準、遠藤裕久、土井信一郎、小西宏和、内藤亮、坪井秀太、荻田学、土肥 智貴、葛西隆敏、田村浩、岡崎真也、諏訪哲、代田浩之. Impact of Blood Glucose Control on Long-Term Clinical Outcomes in Patients with Coronary Artery Disease: Bare Metal Stents vs Drug Eluting Stents. 第 63 回日本心臓病学会学術集会、2015 年 9 月 18 日、横浜
208. 國本充洋、諏訪哲、荻田学、坪井秀太、和田英樹、遠藤裕久、大内翔平、設楽準、村田梓、磯隆史、園田健人. 遺残坐骨動脈に生じた急性下肢動脈閉塞症に対し保存的加療を行った一例. 第 63 回日本心臓病学会学術集会、2015 年 9 月 19 日、横浜
209. 設楽準、宮内克己、坪井秀太、荻田学、葛西隆敏、土肥智貴、内藤亮、小西宏和、土井信一郎、和田 英樹、遠藤裕久、田村浩、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、代田浩之. 待機的冠動脈造影時の患者背景、内服状況に関する検討:冠動脈疾患の有無による比較. 第 63 回日本心臓病学会学術集会、2015 年 9 月 20 日、横浜

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

210. 園田健人、宮内克己、荻田学、坪井秀太、小西宏和、内藤亮、和田英樹、遠藤裕久、土肥智貴、葛西 隆敏、田村浩、諏訪哲、代田浩之. Clinical characteristics and contemporary predictor of coronary artery disease treated with and without statin. 第 63 回日本心臓病学会学術集会、2015 年 9 月 20 日、横浜
211. 遠藤裕久、坪井秀太、宮内克己、荻田学、土肥智貴、葛西隆敏、設楽準、和田英樹、土井信一郎、小西宏和、内藤亮、田村浩、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、代田浩之. The Association between high sensitive CRP and Coronary Artery Disease in non-Elderly Patients. 第 63 回日本心臓病学会学術集会、2015 年 9 月 18 日、横浜
212. 石原正治、藤野雅史、小川久雄、野口暉夫、安田聡、中尾浩一、尾崎行男、木村一雄、諏訪哲、藤本 和輝、中間泰晴、森田孝、清水涉、斎藤能彦、西村邦彦. 高感度トロポニンを用いた急性冠症候群の治療戦略: J-MINUET 研究からの報告. 第 63 回日本心臓病学会学術集会、2015 年 9 月 18 日、横浜
213. Shitara J, Ogita M, Miyauchi K, Wada H, Naitoh R, Konishi H, Tsuboi S, Dohi T, Kasai T, Tamura H, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Association between Sustained Increase of Creactive Protein (CRP) and Longterm Mortality in Patients with Coronary Artery Disease Treated with PCI. 第 80 回日本循環器学会学術集会 2016 年 3 月 18 日~20 日、仙台
214. Sonoda T, Ogita M, Miyauchi K, Konishi H, Wada H, Naitoh R, Tsuboi S, Dohi T, Kasai T, Tamura H, Okazaki S, Isoda K, Suwa S, Daida H. Impact of Lipoprotein (a) as Residual Risk on Clinical Outcomes in Patients with Coronary Artery Disease Treated with Statin after PCI. 第 80 回日本循環器学会学術集会 2016 年 3 月 18 日~20 日、仙台
215. 設楽準、坪井秀太、喜多村健一、青木映莉子、海老名秀城、園田健人、磯隆史、國本充洋、小西宏和、荻田学、諏訪哲. 腹部大動脈狭窄症に対してステント留置術を施行した症例 第 35 回日本心血管インターベンション治療学会東海北陸地方会、2016 年 4 月 8 日、名古屋
216. 園田健人、荻田学、喜多村健一、青木映莉子、海老名秀城、磯隆史、設楽準、國本充洋、小西宏和、坪井秀太、諏訪哲. 左前下行枝の慢性完全閉塞病変に対し、Reverse wire technique を用いて経皮的冠動脈形成術を施行した症例 第 35 回日本心血管インターベンション治療学会東海北陸地方会、2016 年 4 月 8 日、名古屋
217. 和田英樹、荻田学、宮内克己、坪井秀太、小西宏和、設楽準、國本充洋、園田健人、磯隆史、海老名 秀城、青木映莉子、喜多村健一、田村浩、諏訪哲、代田浩之. 左主幹動脈に対して PCI を施行した ASC 患者の背景比較と入院中死亡の因子についての検討 第 25 回日本心血管インターベンション治療学会学術集会・東京・2016/7/9
218. 和田英樹、荻田学、宮内克己、設楽準、遠藤裕久、土井信一郎、小西宏和、内藤亮、坪井秀太、土肥 智貴、葛西隆敏、田村浩、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、代田浩之. インスリン抵抗性と PCI 後の脳血管イベントの関連についての検討 第 25 回日本心血管インターベンション治療学会学術集会・東京・2016/7/9
219. 設楽準、坪井秀太、宮内克己、荻田学、葛西隆敏、土肥智貴、小西宏和、内藤亮、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、代田浩之. 冠動脈形成術後のスタチン内服患者における赤血球容積粒度分布幅 (RDW) の有用性 第 64 回日本心臓病学会学術集会、2016 年 9 月 23 日~25 日、東京
220. 磯隆史、小西宏和、宮内克己、設楽準、和田英樹、内藤亮、坪井秀太、荻田学、土肥智貴、葛西隆敏、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、代田浩之. 経皮的冠動脈形成術後施行患者の予後と出血事象における ORBIT スコアの意義 第 64 回日本心臓病学会学術集会、2016 年 9 月 23 日~25 日、東京
221. 海老名秀城、石原正治、藤野雅史、西村邦宏、宮本恵宏、中尾浩一、安田聡、野口暉夫、尾崎行男、木村一雄、藤本和輝、中間泰晴、森田孝、荻田学、諏訪哲. 急性心筋梗塞患者における来院時間と院内死亡率の検討~Japanese Registry of Acute Myocardial Infarction Diagnosed by Universal Definition (J-MINUET)~ 第 64 回日本心臓病学会学術集会、2016 年 9 月 23 日~25 日、東京

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

222. 園田健人、荻田学、宮内克己、小西宏和、坪井秀太、内藤亮、土肥智貴、葛西隆敏、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、代田浩之. Gender difference of lipoprotein(a) and long-term clinical outcomes in patients with coronary artery disease after percutaneous coronary intervention. 第64回日本心臓病学会学術集会、2016年9月23日~25日、東京
223. 磯隆史、小西宏和、喜多村健一、青木映莉子、海老名秀城、園田健人、設楽準、國本充洋、坪井秀太、荻田学、磯田菊生、諏訪哲. 保存的治療にて軽快した孤立性上腸間膜動脈解離の一例 第64回日本心臓病学会学術集会、2016年9月23日~25日、東京
224. 喜多村健一、坪井秀太、青木映莉子、海老名秀城、園田健人、磯隆史、設楽準、國本充洋、小西宏和、荻田学、磯田菊生、諏訪哲. 心電図変化を伴う胸痛を契機に診断された褐色細胞腫の一例 第64回日本心臓病学会学術集会、2016年9月23日~25日、東京
225. 國本充洋、坪井秀太、青木映莉子、喜多村健一、海老名秀城、園田健人、磯隆史、設楽準、小西宏和、荻田学、磯田菊生、諏訪哲. 内科的加療に難渋しLVAD植込みを施行したD-HCMの一例 第64回日本心臓病学会学術集会、2016年9月23日~25日、東京
226. 和田英樹、荻田学、諏訪哲、代田浩之. 劇症型肺炎球菌感染症に合併した劇症型心筋炎の一例 第64回日本心臓病学会学術集会、2016年9月23日~25日、東京
227. 和田英樹、荻田学、宮内克己、設楽準、遠藤裕久、土井信一郎、内藤亮、小西宏和、坪井秀太、土肥智貴、葛西隆敏、田村浩、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、代田浩之. Gender Differences in Patients with Statin Therapy Following Percutaneous Coronary Intervention 第64回日本心臓病学会学術集会、2016年9月23日~25日、東京
228. 恩田俊仁、井上健司、塩崎正幸、木村友紀、岡井巖、諏訪哲、藤原康昌、住吉正孝、代田浩之. 薬物溶出性ステント時代における各種心血管リスクスコアとバイオマーカーの心血管死予測効果の再評価 第64回日本心臓病学会学術集会、2016年9月23日~25日、東京
229. 高橋徳仁、坪井秀太、太田洋、荻田学、青木映莉子、園田健人、磯隆史、海老名秀城、國本充洋、設楽準、小西宏和、諏訪哲. 腹部大動脈閉塞に対しEVTを施行したLeriche症候群の一例 日本心血管インターベンション治療学会第37回東海北陸地方会、名古屋、2017年5月12日
230. 園田健人、荻田学、坪井秀太、和田英樹、内藤亮、小西宏和、土肥智貴、葛西隆敏、岡崎真也、磯田菊生、諏訪哲、宮内克己、代田浩之. PCI施行後の冠動脈疾患患者における腎機能増悪と長期予後の関連 第65回日本心臓病学会学術集会、大阪、2017年10月1日
231. 堂垂大志、高橋徳仁、小西宏和、阿部寛史、竹内充裕、藤原圭、磯隆史、海老名秀城、園田健人、塩澤知之、坪井秀太、荻田学、諏訪哲. OCTが有用であったA lotus root-like appearanceを呈した急性冠症候群の一例 日本心血管インターベンション治療学会第38回東海北陸地方会、金沢、2017年10月7日
232. 小西宏和、宮内克己、和田英樹、内藤亮、坪井太、荻田学、土肥智貴、葛西隆敏、諏訪哲、代田浩之. Effect of Pemafrate (K-877) in Atherosclerosis Model Using Low Density Lipoprotein Receptor Knock-out Swine with Balloon Injury 第82回日本循環器学会学術集会、大阪、2018年3月24日
233. Ebina H, Ogita M, Suwa S, Nakao K, Kimura K, Ako J, Noguchi T, Yasuda S, Fujimoto K, Nakama Y, Morita T, Nishimura K, Miyamoto Y, Ishihara M. Off-hours Presentation Does not Affect Long-term Clinical Outcomes of Japanese Patients with Acute Myocardial Infarction: J-MINUET Substudy 第82回日本循環器学会学術集会、大阪、2018年3月24日

佐藤浩一

234. 徳田智史、前川博、加藤永記、山本陸、上田脩平、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、和田了、佐藤浩一. 上行結腸に発生したinflammatory fibroid polypの1例. 静岡県外科医会第234回集談会、2016.6.11、CSA 貸会議室レイアアップ御幸町ビル6階

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

- 235.水口このみ、加藤永記、山本陸、宮崎剛、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、内田隆行、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。十二指腸カルチノイドに対する LECS 施行の経験。静岡内視鏡外科研究会、2016.7.9、プラザヴェルデ
- 236.上田脩平、山本陸、加藤永記、宮崎剛、櫻庭駿介、徳田智史、水口このみ、内田隆行、宗像慎也、伊藤智彰、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。多発胃癌の DNA メチル化の検討。第 69 回静岡県癌治療研究会、2016.10.1、静岡市産学交流センター B-nest
- 237.櫻庭駿介、折田創、上田脩平、徳田智史、水口このみ、内田隆行、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、櫻田睦、前川博、和田了、佐藤浩一。大腸癌における原発巣部位別に検討した HER-2 発現の検討。第 78 回日本臨床外科学会総会、2016.11.26、グランドプリンスホテル新高輪、国際間パミール
- 238.小泉明博、櫻庭駿介、上田脩平、徳田智史、水口このみ、内田隆行、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。診断に苦慮した c-kit 陰性、CD34 陰性の胃粘膜下腫瘍の一例。第 78 回日本臨床外科学会総会、2016.11.24、ザ・プリンスさくらタワー東京
- 239.山本陸、加藤永記、李智榮、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、水口このみ、内田隆行、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、和田了、佐藤浩一。門脈血栓と限局性小腸壊死をきたしたプロテイン S 抗原活性低下の一例。第 53 回日本腹部救急医学会総会、2017.3.3、パシフィコ横浜
- 240.徳田智史、前川博、山本陸、加藤永記、上田脩平、櫻庭駿介、水口このみ、内田隆行、宗像慎也、清水秀穂、折田創、櫛田知志、櫻田睦、和田了、佐藤浩一。IPMC を併存した遠位胆管癌の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 241.上田脩平、山本陸、加藤永記、徳田智史、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。左卵巣静脈原発平滑筋肉腫の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 242.水口このみ、山本陸、加藤永記、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。子宮円靱帯に発生した平滑筋腫の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 243.小泉明博、加藤永記、山本陸、李智榮、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。虫垂粘液嚢腫の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 244.山本陸、加藤永記、李智榮、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。腸重積をきたした回腸脂肪腫の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 245.小笠大起、佐藤浩一、前川博、櫻田睦、折田創、櫛田知志、内田隆行、宗像慎也、水口このみ、櫻庭駿介、徳田智史、上田脩平、李智榮、加藤永記、山本陸、和田了。噴門側胃切除術と膵尾部・脾臓合併切除により完全一括切除をなし得た胃原発性 Gastrointestinal stromal tumor (GIST) の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 246.櫻庭駿介。体上部後壁の胃粘膜下腫瘍に対する LECS の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 247.加藤永記、山本陸、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。術後 11 年目で腎転位をきたした直腸癌の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ
- 248.三好悠斗、山本陸、加藤永記、李智榮、徳田智史、上田脩平、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。乳腺アポクリン癌の 1 例。静岡県外科医会第 236 回集談会、2017.3.4、プラザヴェルデ

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

249. 前川博、佐藤浩一、櫻田睦、折田創、櫛田知志、清水秀穂、内田隆行、宗像慎也、水口このみ、櫻庭駿介、徳田智史、上田脩平、加藤永記、山本陸。絶食による血中 adipokine の変動について。第 117 回日本外科学会総会、2017.4.27、パシフィコ横浜
250. 折田創、片岡太郎、田中成和、加藤永記、山本陸、上田脩平、櫻庭駿介、徳田智史、水口このみ、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、櫻田睦、前川博、和田了、城石俊彦、佐藤浩一。大腸炎におけるパイロトーシス誘導分子ガスダーミンDの働き及び癌化の解明。第 117 回日本外科学会総会、2017.4.28、パシフィコ横浜
251. 加藤永記、折田創、山本陸、李智榮、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。術後 11 年目で腎転移をきたした直腸癌の 1 例。第 42 回日本外科系連合学術集会、2017.6.29、あわぎんホール
252. 山本陸、加藤永記、李智榮、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、水口このみ、宗像慎也、内田隆行、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。腸重積をきたした回腸脂肪腫の一例。第 42 回日本外科系連合学術集会、2017.6.29、あわぎんホール
253. 上田脩平、佐藤浩一、前川博、櫻田睦、折田創、櫛田知志、清水秀穂、内田隆行、宗像慎也、水口このみ、櫻庭駿介、徳田智史、李智榮、加藤永記、山本陸。右卵巣静脈原発平滑筋肉腫の一例。第 42 回日本外科系連合学術集会、2017.6.30、あわぎんホール
254. 徳田智史、折田創、櫻庭駿介、内田隆行、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。消化器癌症例を用いたうつ病マーカーの検討。第 72 回日本消化器外科学会総会、2017.7.21、ANA クラウンプラザホテル金沢
255. 村井勇太、前川博、小泉明博、加藤永記、山本陸、上田脩平、櫻庭駿介、徳田智史、宗像慎也、清水秀穂、折田創、櫛田知志、櫻田睦、佐藤浩一。原発性小腸癌の一例。静岡県外科医会第 237 回集談会、2017.8.26、静岡商工会議所
256. 山本陸、宗像慎也、村井勇太、小泉明博、加藤永記、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、和田了、佐藤浩一。当院での 4 型大腸癌の検討。第 79 回日本臨床外科学会総会、2017.11.25、東京国際フォーラム
257. 村井勇太、小泉明博、加藤永記、山本陸、上田脩平、櫻庭駿介、徳田智史、櫛田知志、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。原発性小腸癌 5 例の検討。第 79 回日本臨床外科学会総会、2017.11.24、東京国際フォーラム
258. 小泉明博、和田了、佐藤浩一、前川博、櫻田睦、折田創、櫛田知志、清水秀穂、櫻庭駿介、徳田智史、上田脩平、加藤永記、山本陸、村井勇太。胃腺扁平上皮癌の 1 例。第 79 回日本臨床外科学会総会、2017.11.25、東京国際フォーラム
259. 佐藤将盛、小泉明博、村井勇太、山本陸、加藤永記、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一。成人の十二指腸膜様狭窄に対し内視鏡的切開術を施行した 1 例。第 79 回日本臨床外科学会総会、2017.11.24、東京国際フォーラム
260. 新田周作、櫛田知志、徳田智史、櫻庭駿介、上田脩平、折田創、櫻田睦、前川博、佐藤浩一、加藤永記、山本陸、小泉明博、村井勇太、清水秀穂。正中弓状靭帯圧迫症候群による下脛十二指腸動脈瘤の破裂により腹腔内出血をきたした症例。第 79 回日本臨床外科学会総会、2017.11.24、東京国際フォーラム
261. 徳田智史、前川博、小泉明博、村井勇太、山本陸、加藤永記、上田脩平、櫻庭駿介、氷室貴規、宗像慎也、櫛田知志、折田創、櫻田睦、田中顕一郎、佐藤浩一。腺癌成分を混在した十二指腸乳頭部原発の印環細胞癌の 1 例。第 109 回静岡胆膵疾患研究会、2018.2.24、ニッセイ静岡駅前ビル
262. 村井勇太、前川博、小泉明博、加藤永記、山本陸、上田脩平、櫻庭駿介、徳田智史、宗像慎也、清水秀穂、折田創、櫛田知志、櫻田睦、田中顕一郎、佐藤浩一。経皮経肝胆道ドレナージ後右肝動脈仮性動脈瘤の 1 例。第 54 回日本腹部救急医学会総会、2018.3.8、京王プラザホテル
263. 小泉明博、徳田智史、櫻庭駿介、宗像慎也、櫛田知志、折田創、櫻田睦、佐藤浩一。肝嚢胞自然破裂を来

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

した1例. 第 54 回日本腹部救急医学会総会、2018.3.9、京王プラザホテル

264. 前川博、村井勇太、小泉明博、加藤永記、上田脩平、徳田智史、櫻庭駿介、氷室貴規、宗像慎也、田中顕一郎、櫛田知志、折田創、櫻田睦、佐藤浩一. 遠位胆管癌症例の補助化学療法の効果についての検討. 第 72 回静岡県癌治療研究会、2018.3.17、静岡第一ホテル

折田創

265. 折田創、松澤宏和、水口このみ、平田史子、丹羽浩一郎、伊古田正憲、伊藤智彰、瀬沼幸司、櫛田知志、櫻田睦、前川博、佐藤浩一. GSDM 遺伝子ファミリーの腫瘍マーカーとしての有用性について検討. 第 115 回日本外科学会、愛知(名古屋国際会議場)4月18日、2015
266. 折田創、片岡太郎、遠藤未来美、伊藤智彰、寒竹正人、清水芳男、城石俊彦、Kathleen, G.、Malcolm B.、佐藤浩一. 災害医学研究と遺伝学. 第 88 回日本遺伝学会総会 2016年9月7日 三島
267. 折田創、片岡太郎、田中成和、加藤永記、山本陸、上田脩平、櫻庭駿介、徳田智史、水口このみ、宗像慎也、清水秀穂、櫛田知志、櫻田睦、前川博、和田了、城石俊彦、佐藤浩一. 大腸炎におけるパイロトーシス誘導分子ガスターミン D の働き及び癌化の解明. 第 117 回日本外科学会総会(パシフィコ横浜)2017.4.28 (291と同じ)

前川博

268. 前川博、佐藤浩一、櫻田睦、折田創、櫛田知志、清水秀穂、内田隆行、宗像慎也、水口このみ、櫻庭駿介、徳田智史、上田脩平、加藤永記、山本陸. 絶食による血中 adipokine の変動について. 第 117 回日本外科学会総会(横浜)2017.4.27、パシフィコ横浜(290と同じ)
269. 前川博、伊藤智彰、折田創、Alicia, H.、Malcolm, B.、佐藤浩一. 膵癌組織における CHFR, CDO1, TAC1 遺伝子のメチル化の検討 第 48 回日本膵臓学会大会 2017.7.14 京都 みやこめっせ

寒竹正人

- 270.* 寒竹正人. 第 61 回日本新生児成育医学会 ランチョンセミナー SGA 児におけるエピゲノム解析 2016/12/3 大阪国際会議場
- 271.* 寒竹正人. CLD 児における出生1か月以降のステロイド投与はグルココルチコイドレセプター遺伝子メチル化を誘導する. 日本周産期・新生児医学会雑誌 53; 497: 2017.

土至田宏

272. 土至田宏. 家兎ドライアイモデルの角膜上皮障害に対するレバミピド点眼液の治療効果の検討. 第 120 回日本眼科学会総会、仙台市、2016年4月7日～10日.
273. 土至田宏. 診断・治療に苦慮した角膜疾患例. 第 1 回東海角膜クラブ、名古屋市、2016年6月4日.
274. 土至田宏. トライアルケース内の蛋白濃度. フォーサム 2016 東京、東京都、2016年7月1日～3日.
275. 土至田宏、朝岡聖子、市川浩平、古賀暖子、林雄介、桑名亮輔、松崎有修、太田俊彦. 角膜内血腫の1例. 第 68 回静岡県眼科医会集談会、静岡市、2017年1月21日.
276. 土至田宏、太田俊彦、唐澤真里亜、須藤史子、村上晶. 家兎ドライアイモデルにおけるジクアホソル点眼液とレバミピド点眼液の治療効果の検討. 角膜カンファランス 2017、福岡市、2017年2月16日～18日.
277. 土至田宏、太田俊彦、村上晶. 主涙腺組織の頑健結膜下移植による涙液分泌量改善を介したドライアイ治療の試み. 第 16 回日本再生医療学会総会、仙台市、2017年3月7日～9日
278. 土至田宏、舟木俊成、小野浩一、關保、大竹博司、加藤卓次、渡部草太、田淵照人、海老原伸行、村上晶. レチノールパルミチン酸エステル点眼液のドライアイ患者に対する治療効果. 第 121 回日本眼科学会総会、東京都、2017年4月6日～4月9日
279. 土至田宏、林雄介、朝岡聖子、市川浩平、古賀暖子、桑名亮輔、松崎有修、太田俊彦. 帯状角膜変性に対する EDTA 塗布併用ケラテクトミー術後の屈折値の変化. 第 32 回 JSCRS 学術総会、福岡県、2017年6月23日～25日.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

280. 土至田宏. HCL ケースの培養結果と蛋白濃度. 第 60 回日本コンタクトレンズ学会総会, 大阪府, 2017 年 7 月 14 日～16 日 .
281. 土至田宏, 松崎有修. 火山灰が眼表面へ及ぼす影響. 第 69 回静岡県眼科医会集談会, 静岡市, 2017 年 8 月 19 日.
282. 土至田宏. 副交感神経除神経家兎ドライアイモデルにおけるレチノールパルミチン酸エステル点眼液の治療効果. 第 37 回日本眼薬理科学会. 高山市, 2017 年 9 月 1 日.
- 古元将和**
283. 古元将和. 帝王切開時に PIP 関節で完全に切断された右小趾に対し composit graft を行った 1 例. 第 8 回日本創傷外科学会総会・学術総会. 2017 年 5 月 26-28 日. 仙台国際センター.

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等
ホームページで公開している場合には、URL を記載してください。

<既に実施しているもの>

【インターネットでの公開状況】

柳川洋一 タイトルのみホームページで公開

http://www.hosp-shizuoka.juntendo.ac.jp/consult/departments/emergency_ac.html

また、論文の一部は free open access となっているものがあり、准公開状態である。

【市民公開講座等】

小池道明

市民公開講座 『平成 28 年熊本地震における基幹災害拠点病院の対応』

http://www.hosp-shizuoka.juntendo.ac.jp/event/open_lecture_bn.html

柳川洋一

第 53 回 市民公開講座 『災害に備えよう』

-日本における災害医療の現状 静岡県東部におけるドクターヘリの現状と課題-

http://www.hosp-shizuoka.juntendo.ac.jp/event/open_lecture_bn_53.html

楠威志

第 65 回 市民公開講座 『鼻呼吸と腹式呼吸の重要性』

http://www.hosp-shizuoka.juntendo.ac.jp/event/open_lecture_bn_65.html

【その他の講演・研究会等】

柳川洋一

1. 柳川洋一 大規模災害時の医療 田方医師会 平成 27 年度
2. 柳川洋一 救急救命士処置拡大の概要 御殿場医師会 平成 27 年度
3. 柳川洋一 救急救命士処置拡大の概説(御殿場市) 平成 27 年度
4. 柳川洋一 災害医療一般の概説(伊豆の国市) 平成 28 年度
5. 柳川洋一 感冒や胃腸炎と判断された重篤な疾患症例シリーズ(下田メディカル) 平成 28 年度
6. 柳川洋一 CBRNE って? (順天堂大学静岡病院) 平成 28 年度
7. 柳川洋一 減圧症に関する当院の知見 (順天堂大学静岡病院) 平成 28 年度
8. 柳川洋一 田方医師会災害研修 熊本地震での当院の活動、CBRNE 災害に関して 平成 29 年度

大出靖将

9. 大出靖将 東日本大震災の体験談 (田方医師会主催:田方中消防署) 平成 28 年度

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

大坂裕通

10. 大坂裕通 日常から出来る災害準備について (田方医師会主催:田方中消防署) 平成 28 年度
11. 大坂裕通 かかりつけ医と救急医療の使い方～AED(伊東市市民健康講座) 平成 28 年度
12. 大坂裕通 ドクターヘリ勉強会(御殿場市小山消防) 平成 28 年度

大森一彦

13. 大森一彦 静岡県東部の救急事情とドクターヘリ (志太榛原救急医療研究会) 平成 28 年度
14. 大森一彦 ドクターヘリの活用方法は時代とともに進化している! (駿東伊豆消防) 平成 28 年度
15. 大森一彦 救命救急センターの外傷診療(沼津医師会) 平成 28 年度
16. 大森一彦 トリアージ PAT 法(沼津市立病院) 平成 28 年度
17. 大森一彦 伊豆の国市立長岡南小学校職業講話「フライトドクター」 平成 29 年度
18. 大森一彦 三島市立山田小学校職業講話「フライトドクター」 平成 29 年度

石川浩平

19. 石川浩平 ラジオ(エフエム三島・函南ボイスキュー) ドクヘリ紹介 平成 29 年度

山本拓史

20. 山本拓史 脳神経外科領域におけるてんかん治療 平成 29 年 7 月 20 日
田方医師会学術講演会, 静岡県

大林 治

21. 大林治 第4回静岡東部骨粗鬆症学術講演会,座長, Aug. 27, 2015. (沼津)
22. 大林治 第4回順天堂大学 TKA セミナー,座長, Sep., 5, 2015. (東京)
23. 大林治 静岡東部 OP セミナー, 特別講演座長, Jan., 9, 2016. (沼津)
24. 大林治 イブニングカンファレンス in 静岡, 特別講演座長, Feb., 5, 2016. (静岡)
25. 大林治 静岡東部骨粗鬆症クリニカルセミナー, 特別講演座長, Feb., 8, 2016. (静岡)
26. 大林治 第 182 回静岡整会 ワンポイントレッスン, 座長, Mar., 19, 2016. (三島)
27. 大林治 第 6 回静岡東部骨粗鬆症学術講演会, 特別講演座長, Aug., 25, 2016. (沼津)
28. 大林治 骨粗鬆症の最近の話題について 三島市医師会外科系医会, 学術講演, Oct., 5, 2016. (三島)
29. 大林治 第 36 回静岡骨軟部腫瘍研究会, 世話人, Oct., 22, 2016. (三島)
30. 大林治 静岡県デュピイトラン拘縮治療フォーラム, 基調講演座長. Nov., 26, 2016. ()
31. 大林治 デュピイトラン拘縮の治療について. 静岡県東部整形外科医会,
特別講演, Mar., 13, 2017. (静岡)
32. 大林治 デュピイトラン拘縮の治療について. 静岡県東部整形外科医会,
特別講演, Jul., 21, 2017. (静岡)
33. 大林治 第2回静岡東部整形外科骨・感染症セミナー、座長、Jul., 27, 2017. (沼津)
34. 大林治 Next lecture Meeting in Mishima-消化管出血をいかにマネジメントするか- 座長、
Sep., 14, 2017. (三島)
35. 大林治 関節リウマチ・骨粗鬆症について 関節リウマチ・骨代謝カンファレンス、Oct., 12, 2017. (静岡)

最上敦彦

36. 最上敦彦 Juntendo University Group Private Cadaver Workshop, 講演, Oct., 2-5, 2015.(Bangkok)
37. 最上敦彦 僕が整形外科医になった理由～整形外科医を志す公君へ～
TMED kamakura2015-Trauma Master Entertainment Dialog, Oct.24-25, 2015. (横浜)
38. 最上敦彦 重度手部外傷～中手・手根骨欠損/手関節脱臼の 1 例 重度四肢外傷セミナー-IN 岡山,
Oct., 0-31, 2015. (岡山)
39. 最上敦彦 4th iSSOT Izu Spring Seminer of Orthopaedic Trauma, 代表世話人, Apr., 16, 2016. (三島)

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

40. 最上敦彦 僕が整形外科医になった理由～I Love fractures! 順整会神奈川支部会講演会、特別講演、May, 7, 2016. (横浜)
41. 最上敦彦 ARISTO PHN 上腕骨近位端骨折の治療戦略. 第2回順天堂若手整形外科外傷検討会, Aug., 20 (浦安) 2016
42. 最上敦彦 C type にこそ逆行性髄内釘!～顆部骨片固定にこだわった髄内釘選択と手術手技～骨折治療マイスターに聞く 大腿骨遠位端骨折の髄内釘治療, 特別講演, Mar., 13, 2017. (東京)
43. 最上敦彦 脆弱性骨盤輪骨折に対する手術適応と方法 第128回中部日本整形外科災害外科学会学術集会, 座長, Apr., 7-8, 2017. (神戸)
44. 最上敦彦 第5回伊豆整形外科外傷スプリングセミナー(ISSOT), 代表世話人, Apr., 15, 2017. (三島)
45. 最上敦彦 第90回日本整形外科学会学術集会, 座長(外傷:大腿骨骨折), May., 18-21, 2017. (仙台)
46. 最上敦彦 医療理論を考慮した上腕骨近位部骨折の治療戦略-髄内釘固定を中心に- 第1回関西救急整形外科シンポジウム, 特別講演, Jul. 1, 2017. (兵庫)
47. 最上敦彦 上腕骨近位骨折治療におけるわたしの流儀. 第5回みちのく骨切り研究会, 特別講演, Sep., 2, 2017 (仙台)
48. 最上敦彦 Fracture Repair Decade～骨折治療の10年、何が変わったのか?～ 第60回多摩整形外科医会, 特別講演, Sep., 9, 2017 (東京)
49. 最上敦彦 僕が整形外科医になった理由～整形外科医を志す君へ～(外傷の疼痛管理を含めて). 第66回秋田整形外科医会, 特別講演, Sep., 30, 2017 (秋田)
50. 最上敦彦 髄内釘治療～その進化と極意～ 第6回千葉整形外科研究会, 特別講演, Oct., 28, 2017 (千葉)
51. 最上敦彦 第23回救急整形外科シンポジウム, 座長, Nov., 24-25, 2017. (北谷)
52. 最上敦彦 尺側手部重度損傷の1例. 第21回順天堂大学整形外科手肘外科学研究会, Dec., 2, 2017. (東京)
53. 最上敦彦 下腿関節内骨折に対する手術の工夫(シンポジウム) 第129回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会, 座長, Dec. 6-7, 2017. (富山)

寒竹正人

54. 寒竹正人 * 京都 NICU 懇話会 特別講演 新生児期のステロイド投与によるグルココルチコイドレセプター遺伝子のメチル化 2017/7/22 京都

神田章男

55. 神田章男 第8回御茶ノ水 HIP JOINT カンファレンス, 座長, Dec., 19, 2015. (東京)
56. 神田章男 第12回津軽エリア大腿骨頸部骨折ネットワーク研究会、特別講演, Nov., 10, 2017. (弘前)
57. 神田章男 新たな Palm size navigation 'Hip Align'と術中透視画像によるカップ設置角の比較検討. 第11回御茶ノ水 HIP JOINT カンファレンス, Nov., 18, 2017. (東京)
58. 神田章男、大林治、最上敦彦、諸橋達、金子和夫 多発性骨軟骨腫症に対する人工股関節全置換術. 第8回御茶ノ水 HIP JOINT カンファレンス, Dec., 19, 2015. (東京)

諸橋達

59. 諸橋達 第8回御茶ノ水 HIP JOINT カンファレンス, 座長, Dec., 19, 2015. (東京)
60. 諸橋達 脳梗塞後患者の THA 周術期抗凝固療法について. 第8回御茶ノ水 HIP JOINT カンファレンス, Lecture, Dec., 19, 2015. (東京)
61. 諸橋達 一体型人工骨頭置換術後 20年の症例にステムを残したまま Dual mobility カップのライナーを用いて行った THA.. 第9回御茶ノ水 HIP JOINT カンファレンス, Oct., 1, 2016. (東京)
62. 諸橋達 前方アプローチ THA 術後異所性骨化による可動域制限に対して骨化巣切除を行った治療経験.

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

第10回御茶ノ水 HIP JOINT カンファレンス, Apr., 15, 2017. (東京)

【新聞取材協力】

平成28年度

柳川洋一

毎日新聞 3月11日 東日本大震災 静岡の備え

静岡新聞 5月23日 特殊災害への対応を学ぶ

朝日新聞 11月26日 ヒートショック予防

伊豆新聞 5月11日/5月17日 かかりつけ医と救急医療の使い方～AED

平成29年度

菅尾高裕

毎日新聞 11月20日 インスリン備蓄計画

<これから実施する予定のもの>

14 その他の研究成果等

「12 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付してください。

1.【特許】

折田 創

*城石俊彦、天野孝紀、折田創、田中成和、特願 2016-69775

大腸癌モデル動物、大腸癌モデル動物の製造方法、抗癌剤、アレルギーモデル動物、アレルギーモデル動物の製造方法、及びスクリーニング方法

出願者: 国立遺伝学研究所、学校法人順天堂(共同出願)

出願日: 平成28年3月30日

2.【災害診療の基礎となる各種シュミレーション教育の開催やインストラクター参加】

柳川洋一

※注) 以下略語 ICLS: 心肺蘇生、JMECC: 内科急変対応、ISLS: 脳卒中初期診療、

JPTEC: 病院前外傷救護、JATEC: 院内標準外傷初期診療、

MCLS/DMAT: 多数傷病者マネージメント、PNLS: 脳外科初期診療

平成27年度

ICLS 順天堂大学医学部附属静岡病院

JMECC 順天堂静岡病院 3回

沼津市立病院

JPTEC 第92回静岡外傷セミナー

平成28年度

ICLS 4月 順天堂大学静岡病院 研修医1年向け

4月 順天堂大学静岡病院

7月31日-8月2日 順天堂大学保健看護学部

10月 順天堂大学静岡病院

11月 静岡県東部スキルアカデミー 沼津ワークステーション

JMECC 10月 順天堂静岡 JMECC 順天堂大学静岡病院

11月 沼津市立病院 JMECC

ISLS 10月 第4回順天堂静岡 ISLS 順天堂大学静岡病院

JPTEC 第123回静岡外傷セミナーin 沼津 沼津ワークステーション

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

<p>第126回静岡外傷セミナーin伊豆の国 田方消防署 静岡県消防学校</p> <p>JATEC 4月 東京国立国際医療センター 5月 国際医療福祉大学 7月 横浜市立大学附属市民総合医療センター 11月 順天堂救急グループ</p> <p>MCLS 第4回静岡 MSLC インストラクターコース 第4回駿東田方 MCLS 順天堂大学保健看護学部 第1回静岡 MCLS-CBRNE 田方消防署 第1回静岡 MCLS マネージメントコース 静岡消防学校 第11回静岡 MCLS 標準コース</p> <p>DMAT 静岡 DMAT 隊員養成研修 山梨県 DMAT 技能維持研修</p> <p>PNLS 11th Asian Congress of Neurological Surgeons, Surabaya, Indonesia 2016.</p> <p>平成29年度</p> <p>ICLS 4月 順天堂静岡 ICLS 6月 第42回 TSA ICLS 7月 保健看護学部 ICLS</p> <p>JMECC 11月 沼津市立 JMECC</p> <p>JPTEC 8月 JPTEC インストラクターコース 10月 JPTEC 標準コース(函南)</p> <p>JATEC 9月 順天堂大学救急グループ</p> <p>DMAT 10月 静岡 Local DMAT 隊員養成研修 12月 平成29年度第6回日本 DMAT 隊員養成研修 1月 平成29年度第7回日本 DMAT 隊員養成研修</p> <p>MCLS 11月 第5回駿東田方 MCLS 標準コース 11月 静岡消防学校 MCLS マネージメントコース</p>
--

15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

<「選定時」に付された留意事項>

- ① 行政(消防、警察など)との連携を考慮すべきである。
- ② 災害時合併症の病因解明による、効率的な防災体制構築へフィードバックしてほしい。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

①への対応

- ・災害訓練では、消防・行政・警察・自衛隊・市民等と協働して訓練等を実施した。熊本地震勃発時は静岡県庁、熊本県庁、自衛隊と協働し、現地で災害診療支援を行った。減圧症の勉強会を、消防、海上保安庁、警察、ダイビングショップ関係者を招いて毎年開催し、今後その成果を発表予定である(柳川)。
- ・救急母体搬送症例(救急車、ドクターヘリ)を対象とした研究に関しては行政と連携して研究成果を得ており(田中)、また災害時の輸血療法に関しては、血液センター、近隣の施設、行政との連携を構築していく方針である(小池)。
- ・県、市町が災害時にどのような対応を考えているか把握するために現時点で行政からの聞き取りを行い、問題点が判明してきたため、これらをもとに今後、行政、地元医師会と連携して、災害時に該当患者が安全な医療を受けられるシステムを構築していく(岩神)。
- ・災害時の残存病院機能に応じて手術室運営がなされるが、災害規模が大きいと、手術室スタッフは、救命処置への配備となる。その時の重要な救命処置である一次救命処置、二次救命処置を広めるために、災害医学研究センター内に、アメリカ心臓病協会認定の研修会システムを立ち上げ、年間数回にわたり、近隣の救命士、自衛隊員とともに救命処置講習会を通して、医療スタッフに徹底させるようにしている(岡崎)。

②への対応

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

・腸炎モデルマウスを利用した知見から、腸炎に対する予防としての ω 3飽和脂肪酸やヨーグルトなどの備蓄に関する提言を行っていく(折田)。

・子宮内での胎児評価法が確立されれば、被災直後のみならず避難所などでの活動に役立てたい。

また年長児においては唾液にて解析できるのでやはり被災直後の心身状態の評価や、避難所環境の向上に役立てたい。被災時でなくても、被虐待児の評価にも応用可能であることが知られており行政との連携における分子基盤にもなりうる(寒竹)。

法人番号	131025
プロジェクト番号	S1511008L

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成27年度	施設	98,496	70,221	28,275	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	64,583	23,571	41,012	0	0	0	
	研究費	60,190	30,728	29,462	0	0	0	
平成28年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	44,253	22,127	22,126	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	68,932	38,942	29,990	0	0	0	うち一般補助 3,348
平成29年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	65,459	35,850	29,609	0	0	0	うち一般補助 2,311
総額	施設	98,496	70,221	28,275	0	0	0	
	装置	44,253	22,127	22,126	0	0	0	
	設備	64,583	23,571	41,012	0	0	0	
	研究費	194,581	105,520	89,061	0	0	0	
総計	401,913	221,439	180,474	0	0	0		

法人番号

131025

17

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
静岡災害医学 研究センター	平成 27年度	251m ²	3	約 50 名	98,560	49,280	私学助成

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m²

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置) Illumina次世代シーケンサー	28	Next Seq500	1	250 h	44,253	22,126	私学助成
(研究設備) DKH3次元動作解析システム	27		1	380 h	22,515	15,010	私学助成
メラ遠心血液ポンプ装置(HAS-GFP)	27	HAS-CFP	1	1300 h	10,748	7,165	私学助成
実験動物飼育システム一式	27		1	通年稼働 h	31,320	18,837	私学助成
(情報処理関係設備)				h h h h h h			

18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	15,267	試薬、器具等	15,267
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	120	電話料、切手代等	120
印 刷 製 本 費	456	業績集等印刷費	456
旅 費 交 通 費	390	学会参加交通費	390
報 酬・委 託 料	9,169	保守・分析委託	9,169
(修繕費等)	1,429	機器修理等	1,429
計	26,831		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人 件 費 支 出 (兼務職員)	561		561 時給 1,550円、年間時間数約 350時間 実人数 1人
教 育 研 究 経 費 支 出	0		0
計	561		561
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教 育 研 究 用 機 器 備 品	32,798		32,798 実験用機器 ALSシミュレータ+SimPad 他
図 書	0		0
計	32,798		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	0		
ポスト・ドクター	0		
研究支援推進経費	0		
計	0		

法人番号

131025

(千円)

年 度	平成 28 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
		教 育 研 究 経 費 支 出	
消 耗 品 費	26,008	試薬、器具等	26,008
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	505	電話料、切手代等	505
印 刷 製 本 費	1,222	業績集等印刷費	1,222
旅 費 交 通 費	1,710	学会参加交通費	1,710
報 酬 ・ 委 託 料	11,810	保守・分析委託	11,810
修 繕 費 等	1,439	機器修理等	1,439
計	42,694		
		ア ル バ イ ト 関 係 支 出	
人件費支出 (兼務職員)	3,061		3,061
教育研究経費支出	0		0
計	3,061		0
		設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)	
教育研究用機器備品	15,542	実験用機器	15,542
図 書	0		0
計	15,542		
		研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出	
Jサーチ・アシスタント	0		0
ポスト・ドクター	5,614		5,614
研究支援推進経費	2,021		2,021
計	7,635		

(千円)

年 度	平成 29 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
		教 育 研 究 経 費 支 出	
消 耗 品 費	18,862	実験用消耗品	18,862
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	317	電話料、切手代等	317
印 刷 製 本 費	2,438	論文掲載料	2,438
旅 費 交 通 費	3,339	学会出張旅費	3,339
報 酬 ・ 委 託 料	12,841	業務委託費	12,841
修 繕 費 等	572	機器修繕費等	572
計	38,369		
		ア ル バ イ ト 関 係 支 出	
人件費支出 (兼務職員)	3,633		3,633
教育研究経費支出	0		0
計	3,633		0
		設 備 関 係 支 出 (1個又は1組の価格が500万円未満のもの)	
教育研究用機器備品	19,858	実験用機器	19,858
図 書	0		0
計	19,858		
		研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出	
Jサーチ・アシスタント	0		0
ポスト・ドクター	1,367		1,367
研究支援推進経費	2,232		2,232
計	3,599		

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業



順天堂大学 静岡災害医学研究センター 平成 27 年度採択プログラム

大規模災害に対応する包括的医療提供体制構築を目指す統合型研究拠点の形成

～第2回プログレスミーティング～

静岡災害医学研究センター研究報告会

平成29年11月17日(金) 17:00～18:00

G棟4階 面談カンファレンス2

演者1: 寒竹 正人 先任准教授 (順天堂大学医学部附属静岡病院小児科 准教授)

演題 :

Postnatal relative adrenal insufficiency results in methylation of the glucocorticoid receptor gene in preterm infants

演者2: Malcolm Brock 教授 (Department of Surgery, The Johns Hopkins University School of Medicine, Baltimore, Maryland, USA.)

演題 :

Lessons Learned From a Clinical Trial of Epigenetic Therapy in Humans



平成 27 年度選定・私立大学戦略的基盤形成支援事業

「大規模災害に対応する包括的医療提供体制構築を目指す統合型研究拠点形成プロジェクト」

外部評価表

評価委員名

国立研究開発法人 国立がん研究センター 先端医療開発センター 免疫療
法開発分野 分野長 吉村 清 先生

Malcolm V Brock 先生

背景として、地震災害におけるストレスとホルモンについて説明があった。慢性ストレスにおいてはグルココルチコイド受容体による調節が破綻することがある。妊娠期での母胎にストレスがかかると胎児に P-11beta HSD2 に調節障害が起こる。急性ストレス、ストレスとメチル化に関してはオランダ家族研究で飢餓により統合失調症や肥満が起こることがわかった。これはメチル化のリプログラミング障害によって起こることがわかった。

小児科 寒竹正人先生

災害に備えた組織体制の構築と災害時の経験が被災時のメチル化に与える影響について研究した。災害、虐待、NICU での滞在は同様にストレスを受ける。複数の小児や新生児のコホートに対するグルココルチコイド受容体への影響（メチル化）を調べた。

〈特筆すべき成果〉

Malcolm V Brock 先生

妊娠期ストレスでは、胎児に様々な障害が起こる。妊娠ストレスによる胎児の心血管性病変の起こる確率は Hazard Ratio 1.13 である。実験動物ではストレスによりがんが多く発症することもわかった。白血病やホジキン病の発症リスクが上がる。妊娠期ストレスによる大動脈内膜でのメチル化に対するグルココルチコイド受容体に関して ApoE マウスで検索した。1日2時間の拘束ストレスを与える。ここで大動脈を摘出しプラークをオレンジ E 染色で評価した。妊娠期ストレス群の胎児ではプラークが多いことがわかった。今後は大動脈内皮や平滑筋においてプラーク発症メカニズムを多面的に検索する必要がある。

NNK 投与で肺腫瘍が発生する折田博士が確立したモデルを説明した。これを妊娠期ストレス群の胎児においてとコントロール群で比べると、ストレス群での胎児の肺腫瘍が多かった。今後は分子レベルでの評価を行っていく予定である。

(評価) 明快な背景の説明の元、丁寧な実験計画を組み、一つ一つ実証している。非常に好感が持てる。慢性ストレスにおける妊娠期のストレスの胎児への影響が明らかになっていくことで日本の災害に対する対策の指標になっていくと思われる。今後の予定に入っている分子メカニズムを含めた研究をさらに継続して行うことが好ましい。

小児科 寒竹正人先生

妊婦のストレスが胎児のグルココルチコイド受容体遺伝子のメチル化に影響を与え、グルココルチコイド受容体産生に影響を与える。虐待を受けて自殺した子供の脳のグルココルチコイド受容体にはメチル化が起こる。28 週などで産まれた未熟な早期出産児は正常出産児に比べてメチル化が4日で上昇し、下降上昇を繰り返すことがわかった。基本的にはメチル化が起こるとグルココルチコイド受容体遺伝子のプロモーターの活性が落ちる。

グルココルチコイド受容体のメチル化は生活の質とは逆相関する。予定より早期に生まれた新生児がグルココルチゾールの前駆体が増えてグルココルチゾールが増えない。

その理由がグルココルチコイド受容体のメチル化に関係している。新生児に対して、産まれたときと生後1, 2ヶ月を次世代シーケンサー (NGS) 解析で検索した。採血をどの程度したか人工呼吸を行ったかなどの状況とストレスとの関係を GR 遺伝子メチル化を介して検索した。新生児がグルココルチゾールの欠失がグルココルチコイド受容体のメチル化に影響を与えている。別の13才程度のコホートの子供の研究ではストレスとして両親の離婚が大きくメチル化に影響を与える。ステロイドが出ているが効かなくなる状況が起こることは深刻な影響を与える。相対的副腎不全と呼ばれる状態となりグルココルチコイド受容体のメチル化が起因となる。これらの状況は精神異常を引き起こす。これらの現象は大人と逆の反応である。

(評価) 子供に与えるストレスがグルココルチコイド受容体のメチル化に大きく影響を与えることがわかった。コホートを変えて年齢が変わり、別のストレスを感じてもかなり劇的に影響を与えている。社会的に非常にインパクトのある研究であり、本研究を継続して深く行うことを切望する。メチル化のリプログラミングを目指したものあるいは阻害

剤を用いた治療法の確立を是非目指して頂きたい。NICU のストレス研究の経験が実際今後起こる災害時のストレスで計測したときにどのような差があるかなど今後の推移は非常に興味深い。社会的意義が非常に高い研究を行っている。

自署

吉村 清



平成 27 年度選定・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「大規模災害に対応する包括的医療提供体制構築を目指す統合型研究拠点形成プロジェクト」
外部評価表


評価委員名	藤田保健衛生大学 医学部 歯科・口腔外科 教授 松尾 浩一郎
-------	-----------------------------------

被災者は多大な精神的ストレスを受ける。ストレスは、成人だけでなく、子供や妊婦も例外ではない。妊娠中に震災に被災した児童は、胎生中から出産、成長過程において継続的なストレスを受ける可能性が高い。妊娠期ストレスにより、低出生体重児、行動障害やうつ病などの精神症状などが出現することが今まで報告されている。今回のプロジェクトの成果発表では、妊娠期から学童期までにおけるストレスにより、遺伝子変異を通じた全身への影響について2名の先生から発表があった。まず、Johns Hopkins 大学の Malcolm Brock 先生からは、妊娠期ストレスによる動脈硬化と腫瘍発現に関する研究結果の報告があった。次の発表者、寒長正人先生からは、妊娠期から出生後のストレスにより、胎児のグルココルチコイド (GR) 遺伝子にメチル化が出現するか報告された。

<特筆すべき成果>

Brock 先生らの研究では、実験動物 (AJ マウス) を用いて、妊娠中の母体に2時間ほどの拘束ストレスを与えることによって、(1) 大動脈内膜でメチル化がおこるか検証がなされた。その結果、成長後の大動脈のプラーク面積が有意に多く出現していた。(2) 次に、発がん物質 NNK50mg/kg を注入したマウスにおいて、妊娠期のストレスを与えられた群のほうが、オスメスともに肺腫瘍が多く出現していた。本研究では、動物モデルにおいて、母体へのストレス因子として、拘束ストレスを与えたこと、ならびにそのストレスにより、胎児の動脈硬化やがん化が促進された結果が導き出されたことは特筆すべき成果と言える。妊娠期ストレスが、出産された子供の動脈硬化やがん化にまで影響を及ぼす可能性が示されたことは大きい。今後は、分子レベルでの評価を行うことで、動脈硬化とがん化のメカニズムを詳細に検討していくことが期待される。

一方、寒竹先生らの研究では、妊娠期のストレスを多く受けている NICU の早期低体重出生児を対象に、対象児の出生直後、1か月後、2か月後の DNA を抽出し、対象遺伝子のメチル化が起こっているか、解析が行われた。その結果、胎生中の低栄養と出生後の副腎不全が GR 遺伝子のメチル化につながる事が明らかになった。本成果で特筆すべき点は、出生前のストレスだけでなく、出生後のストレス要因によってもメチル化が出現することが明らかになった点にある。本成果から、妊娠期に被災した場合には、そのストレスにより、出生した子供に影響が及ぼすことが示唆されるとともに、早期からの介入により、その障害が軽減できることも示唆された。本成果は、災害による子供への長期の影響を軽減できる重要な成果と考える。また、本研究成果を礎として、今後被災時のストレスによるメチル化が起こっているかを被災地で検証することができれば、被災時への具体的な介入手段を決定することの一助になることが期待できる。

自署 松尾 浩一郎 



～第3回プログレスミーティング～ 静岡災害医学研究センター研究報告会

日時：平成29年12月21日(木) 17:30～18:15

場所：管理棟別館2階 第2会議室

演題

胎児期ストレスによる 成人期発症疾患への影響

巨大な自然災害は、日本だけでなく世界でも多く発生している。災害時には、多くの被災者に多大な精神的ストレスがかかる。我々は、その中で特に妊娠している被災者に注目した。これまでの疫学研究によると、胎児期の母体ストレスにより精神疾患だけでなく、高血圧や心疾患などの成人疾患の発症リスクが高まるとされている。この発生メカニズムについては、未だ不明な点が多い。我々は、動脈硬化発症モデルのApoEノックアウトマウスと肺腫瘍発症モデルであるA/Jマウスを用いて、胎児期ストレスと成熟期に発症する動脈硬化、肺腫瘍の関連性、そしてその発生メカニズム解明を目的に研究を行っている。今回は、その中間報告を行う。

演者

伊藤 智彰

Department of Surgery,

Department of Molecular and Comparative Pathobiology,
School of Medicine, Johns Hopkins University

平成 27 年度選定・私立大学戦略的基盤形成支援事業

「大規模災害に対応する包括的医療提供体制構築を目指す統合型研究拠点形成プロジェクト」

外部評価表

評価委員名	国立研究開発法人 国立がん研究センター 先端医療開発センター 免疫療法開発分野 分野長 吉村 清 先生
-------	---

伊藤智彰先生

〈背景〉

胎児期ストレスに対する成人期発症疾患への影響としてグルココルチコイド受容体への影響（メチル化）を調べた研究が過去に存在する。ストレスとホルモンに関しての説明として、地震とストレスの調査の説明から始まった。急性ストレスに反応する副腎からのアドレナリンの放出がある。慢性では視床下部下垂体経路副腎系(HPA系)でグルココルチコイド(G)がでてG受容体(R)に結合し脳に働き通常はネガティブフィードバックが働く。慢性ストレスにより血中のGが上昇してしまう。妊娠ストレスとこの発症疾患について母のHPA系と胎児のGの動きは独立しており、母にストレスがかかるが胎児はネガティブフィードバックがかからず、Gが活性化したまま胎児の脳の中のGRの発現が下がる。GRは別名NR3C1ともいわれる。このNR3C1の発現はGRのメチル化により発現が下がる。これによりcorticosteroneの血中濃度が相対的に上がる。一方で妊娠中にストレスのかかる胎児の心血管系疾患が増える疫学研究がある。疾患の起こる確率としてハザード比(HR)が1.2-1.3程度になる。発がんに関してもホジキン病、白血病、精巣腫瘍の発生が上がるとの報告がある。

〈特筆すべき成果〉

ストレス後に血管内皮でのGRのメチル化が動脈硬化と関係しているか？あるいはストレスで肺癌の発生に影響を与えるか？あるいはこの際のGRは関係するか？の疑問に対して恐らく関係するのではとの仮説を立てた。マウスにストレスをかける群、かけない群を妊娠8-12日に1日あたり2時間程度の拘束ストレスをかけて25週目で動脈をとりブラックを検索することで動脈硬化の程度を調べた。実際の手技としてはブラックをOil Red Oの染色を行った。雄雌を基本的にはすべて分けて検索した。雄でも雌でも25週目で動脈硬化を認めた。マウスは動脈硬化モデル発生モデルであるApoE null mouseを用いた。明らかにストレス群に動脈硬化・ブラックを多く認めた。ストレスは2時間の容器内の拘束(市販のビルケースに穴を開けたもの)で行った。超音波による動脈硬化の検索も補足的に行った。妊娠期ストレスを与えた群に明らかに多くのブラックを認めた。これは超音波で内膜の肥厚つまりブラックと考えられる部分の検索を行い判断した。ブラックの染色の評価は認められた面積の全体の血管面積に対する比として検索した。特に雌で顕著であったが、雄雌共に有意差をもってストレス群に多く認めた。このブラックの生成機序は血中のLDLが酸化し内皮に取り込まれたところでマクロファージがこれを貪食し泡沫化しブラックになると考えられる。この発生メカニズムの一つに血圧上昇がある。そこでこのストレスモデルと血圧の関係を検索した。Prenatal stressと共に修正後胎児にかけられるストレスであるOffspring stressの影響も同時に検索した。予想外に雌では優位にストレス群は血圧が低かった。特にPSとOS両方のストレスをかけたマウスは血圧が低い。糸球体減少、腎臓重量低下によるものかと仮説を立てている。いずれにしろ血圧上昇とは関係の無い機序でのブラックがストレスにより発生し動脈硬化となることが示唆された。続いて肺腫瘍モデルを用いたストレスによる肺腫瘍発生に関する研究の成果が発表された。A/Jマウスという肺腫瘍発生モデルを用いて研究を行った。G12-16(日目)の1日2時間の拘束ストレスで行った。G21でこのモデルでは基本的に誕生する。11週目でニトロ酸アミン(NNK)投与による腫瘍誘発した。27週目に臓器を摘出して検索した。妊娠期ストレス群とストレス無し群で比較をすると子の腫瘍の数が明らかにストレス群に多かった。現在マウスの数を増やすことで統計学的検索を行っているが有意差が出る可能性が高い。

〈評価〉

明快な背景の元、整合性のある実験計画を組んでいる。実験系は確立されており、従ってそこで産まれるデータも明瞭で説得力がある。どのモデルを用いた実験も実際は非常に手のかかるものであるが、研究者である伊藤氏はこれを粘り強く、丁寧に行い、手技的問題点も真正面から丹念に取り組み創意工夫により解決している。慢性ストレスにおける妊娠期のストレスの胎児への影響が本研究により明らかになっていくことで日本の災害に対する対策の確固たる指標になっていくと思われる。社会的意義が強く、災害医学への即効性のある研究であり、高い貢献度を考えると継続と発展を強く望む。

自署 吉村 清 